

東北学院大学論集

歴史と文化

(旧歴史学・地理学)

第56号

福島県喜多方市 灰塚山古墳第6次発掘調査報告	辻 秀人	1
宮城県栗原市栗駒猿飛来 鳥矢ヶ崎古墳群青雲神社地点発掘調査報告	辻 秀人	85

2017年

東北学院大学学術研究会

東北学院大学論集

歴史と文化

(旧歴史学・地理学)

第56号

2017年

東北学院大学学術研究会

福島県喜多方市
灰塚山古墳第6次発掘調査報告

平 辻 秀人・佐藤 由浩・相川ひとみ・鈴木 舞香
大貴・酒井 瞳・鈴木 千賀・結城 智・清野 寛仁
岡本 莉奈・斎藤 千晶・窪田 磨実・佐伯鉄太郎
高橋多津美・横山 舞・宮崎真理子

調 査 体 制

- 調 査 期 間 平成 28 年 8 月 7 日～8 月 22 日、8 月 28 日～9 月 8 日
- 調 査 主 体 東北学院大学文学部歴史学科考古学専攻辻ゼミナール
- 調 査 担 当 東北学院大学教授 辻 秀人
- 調 査 員 佐藤由浩（大学院博士課程前期 2 年）
相川ひとみ（大学院博士課程前期 1 年）
梅宮崇成・鈴木舞香・白銀沙也佳・吉原夏海・石山朋美・
野村真吾・小丸雄大・木村 智・宮崎真理子（4 年生）
平 大貴・酒井 瞳・鈴木千賀・結城 智・清野寛仁・
岡本莉奈・斎藤千晶・窪田磨美・佐伯鉄太郎
高橋多津美・横山 舞（3 年生）
- 調 査 参 加 者 高橋伶奈・加藤雄大・庄司 舞・賀屋由布（2 年生）
小池和香・徳江真奈美（1 年生）
- 調 査 協 力 喜多方市教育委員会・植村泰徳（喜多方市教育委員会）
山中雄志（磐梯町）・片岡 洋（喜多方市）
田部成彦（新宮区区長）
上野正典・後藤直人・田部文市・渡辺和男
近 輝夫・近ノリ子（敬称略）
- 土 地 所 有 者 新宮区



写真 1 灰塚山古墳調査風景（第 2 主体部）

例 言

- 1、東北学院大学考古学辻ゼミナールでは平成23年から福島県喜多方市灰塚山古墳の発掘調査を6年間にわたって継続して実施してきた。本書は平成28年8月7日～8月22日、8月28日～9月8日実施した福島県喜多方市灰塚山古墳第6次発掘調査の報告書である。
- 2、調査は東北学院大学文学部歴史学科考古学専攻辻ゼミナールのゼミ活動の一環として実施したものである。
- 3、調査は東北学院大学文学部教授辻秀人が担当した。調査の主な参加者は東北学院大学大学院文学研究科アジア文化史専攻学生、考古学ゼミナール所属学生を中心とする東北学院大学文学部歴史学科の学生、考古学実習Ⅰを履修する学生、参加を希望した歴史学科1・2年生である。
- 4、出土遺物、作成図面の整理作業は東北学院大学文学研究科博士課程前期所属学生及び文学部歴史学科考古学ゼミナール所属の3、4年生が中心となって実施した。
- 5、本書の編集は辻秀人が担当し、執筆は参加者が分担した。各項目の執筆者は文末に記した。報告の記載は各執筆の原稿に辻が加筆訂正を行ったものである。従って最終的な文責は辻にある。
- 6、本書に掲載した図面の高さ表示はすべて海拔高、北はすべて真北を示す。
- 7、本書は鉄製品、有機質の保存処理実施前に作成しており、ここに掲載する実測図は最終的な図面ではない。保存処理終了後あらためて遺物の理解を含めて報告書を作成する予定である。

これまでの調査概要

平成23年 第1次調査 平成23年8月10日～9月12日

調査内容 墳丘測量 墳丘構造の解明

調査成果 墳丘を清掃し、墳丘測量図の精度確認。

墳丘内に第1、3トレンチを設定し、墳丘構造の様相を把握。

墳丘前方部墳頂部に第3トレンチ、後円部墳頂に第4トレンチを設定し、墳頂平坦面の上面精査。

平成24年 第2次調査 平成24年8月6日～9月12日

調査内容 墳丘構造の確認

調査成果 ・第前方部墳頂平坦面の第3トレンチを拡張し、墳頂平坦面の様相確認。

・後円部墳頂平坦面の第4トレンチを拡張し、墳丘上に1辺10m程度の塚状遺構が存在することを確認

・くびれ部両側に第6、7トレンチを設定し、くびれ部を確認

平成25年 第3次調査 平成25年8月5日～9月11日

調査内容 墳頂平坦面の塚状遺構掘り下げ

調査成果 江戸時代の礫石経を確認

塚状遺構下層で墓壙および陥没坑と想定される遺構を確認

後円部東西に第8、9トレンチを設定し、後円部墳丘構造を確認

平成26年 第4次調査 平成26年8月5日～9月11日

調査内容 後円部墳頂の礫石経塚の掘り下げ

調査成果 礫石経塚の全容を解明

礫石経塚下層を精査 墓壙平面、陥没坑の確認

平成27年 第5次調査 平成27年8月5日～9月4日

調査内容 墓壙内掘り下げ

調査成果 墓壙内古墳主軸上に粘土槨上面（第1主体部）、墓壙東側に小型粘土槨（第2主体部）を確認

墓壙埋土を精査、切り合い関係を確認

これまでに公表された報告書

福島県立博物館 1987年『古墳測量調査報告』福島県立博物館調査報告第16集

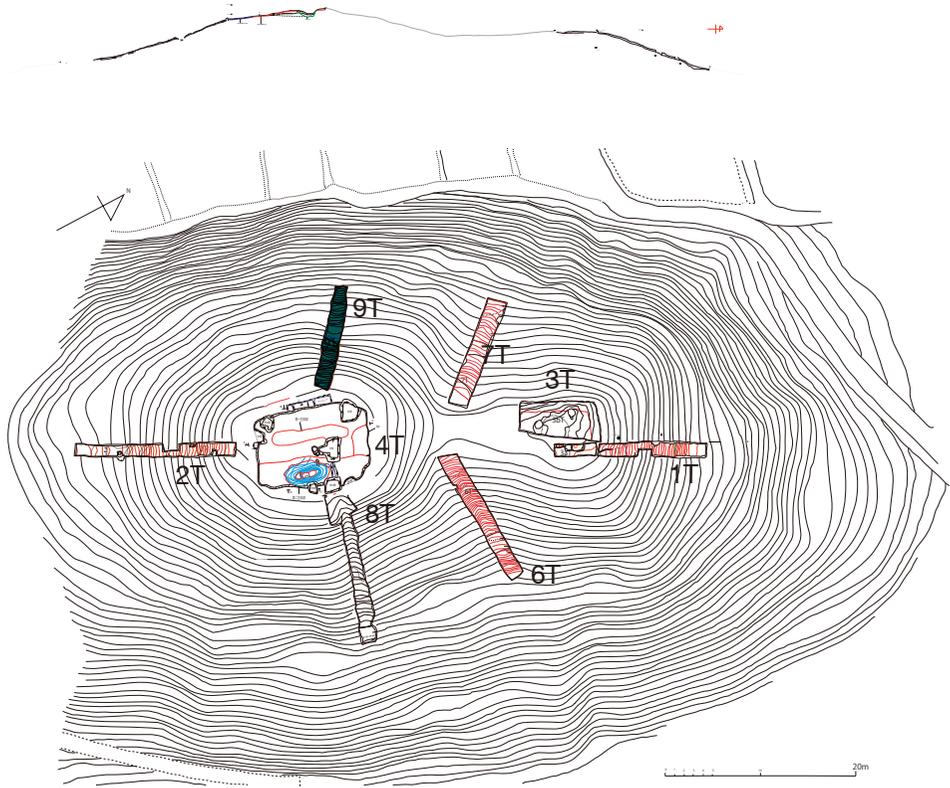
辻 秀人他 2012年「福島県喜多方市灰塚山古墳第1次発掘調査報告」『東北学院大学論集 歴史と文化』第48号

辻 秀人他 2013年「福島県喜多方市灰塚山古墳第2次発掘調査報告」『東北学院大学論集 歴史と文化』第49号

辻 秀人他 2014年「福島県喜多方市灰塚山古墳第3次発掘調査報告」『東北学院大学論集 歴史と文化』第52号

辻 秀人他 2015年「福島県喜多方市灰塚山古墳第4次発掘調査報告」『東北学院大学論集 歴史と文化』第53号

辻 秀人他 2015年「福島県喜多方市灰塚山古墳第5次発掘調査報告」『東北学院大学論集 歴史と文化』第54号



第1図 灰塚山古墳トレンチ配置図



写真2 調査風景

序章 調査の目的

東北学院大学辻ゼミナールでは、東北古墳時代の様相を解明することを目標として活動を継続している。福島県会津地方に多く古墳が分布することはこれまでによく知られてきた。中でも会津盆地東南部の一箕古墳群、東北部の雄国山麓古墳群、西部の宇内青津古墳群では前期の首長墓の系譜を3代以上にわたってたどることができる、有力な古墳群である。(辻 2006)。調査の対象とした喜多方市灰塚山古墳は宇内青津古墳群の最も北に位置する前方後円墳である。

灰塚山古墳はこれまで、福島県立博物館によって測量調査が実施され(福島県立博物館1987)、全長60mを超える大型前方後円墳であることが判明している。宇内青津古墳群では亀ヶ森古墳に次ぎ2番目の規模である。古墳の形態も宇内青津古墳群の中ではやや異質であり、最北を占める位置もあってその内容が注目されてきた。ただ、出土遺物が知られておらず、所属時期等についての手がかりがなく、古墳の範囲も測量段階では必ずしも明確にはされていなかった。

これまでに実施した第1～5次調査では、後円部、前方部、くびれ部の墳丘構造がほぼ明らかになるとともに、後円部墳頂にある方形の塚状遺構が礫石経塚であることが判明した。第4次調査では、礫石経塚の全体像を理解し、礫石経塚の掘り下げを実施した。礫石経塚の調査終了後、礫石経塚の下層にあたる後円部墳頂平坦面を精査し、墓壙と陥没坑を検出することができた。前回の第5次調査では、墓壙と陥没坑を掘り下げ、埋葬施設の探索を行った。その結果、墓壙内古墳主軸上で検出した南北に長い陥没坑が木棺痕跡である可能性が高まった。また、墓壙内東側で確認されていた小礫集中部下層の粘土が広がりを追跡したところ、船底状を呈する長楕円形の粘土の構築物が存在することが判明した。第5次調査の段階では、この構築物は粘土槨の上面の可能性を考えた。また、南北4m、東西2m、高さ80cmの規模と形状と主軸上の木棺痕跡とほぼ軸をそろえることから、二つ目の埋葬部であると考えられた。

今年度の調査では第5次調査の段階で所在を確認していた主軸上の木棺痕跡(第1主体部)と粘土槨の上面かと考えられた粘土の構築物(第2主体部)を掘り下げ、灰塚山古墳の埋葬施設を明らかにすることを目的に調査を実施した。

引用文献

- 福島県立博物館 1987年 『古墳測量調査報告』福島県博物館調査報告第16集
辻 秀人 2006年 『東北古墳研究の原点 会津大塚山古墳』新泉社



写真3 第5次調査検出埋葬施設全景（南から撮影）



写真4 第1主体部北半部検出状況



写真5 第1主体部全体検出状況



写真6 第2主体部全景

第1章 古墳の立地

第1節 古墳と周辺の地形

灰塚山古墳は喜多方市慶徳町新宮字小山腰 2908-1 に所在する。会津盆地の西側を画する越後山地の東側の縁辺にあたる丘陵上に立地する。会津盆地の平坦地と西側山地との境界にあたる。丘陵末端部で、周囲を解析された独立丘陵の頂上部分に古墳が築かれている。丘陵を構成する土は七折坂層で、河川の堆積物である砂層、礫を主体とし、火砕流堆積物も含まれる。七折坂層は断層が至近距離にあるため、層位が傾斜している。(註1)。

第2節 歴史的環境

灰塚山古墳は会津盆地西部に分布する宇内青津古墳群中の北端に位置する大型前方後円墳である。宇内青津古墳群を構成する主な古墳は前方後円墳12基、前方後方墳3基で会津盆地の平野部から西側丘陵上まで広く分布している。最古段階は会津坂下町柵ガ森古墳、白ガ森古墳で、古墳時代前期でも古い段階にあたる。福島県最大の前方後円墳である亀ヶ森古墳とその横に並ぶ前方後方墳の鎮守森古墳、出崎山3号墳、7号墳が前期古墳と考えられている。中期、後期になると古墳は減少し、わずかに長井前ノ山古墳が中期、鍛冶山4号墳が後期と考えられている。天神免古墳は前期または中期で所属時期が確定していない。

ところで、近年喜多方市古屋敷遺跡が発掘調査の結果、中期後半の豪族居館であることが判明し、国の史跡に指定された。古屋敷遺跡に拠点をおいた首長の墓は当然宇内青津古墳群中にあるのが自然である。現在その候補として古屋敷遺跡に近い天神免古墳、虚空蔵森古墳、灰塚山古墳などが挙げられているが、古墳の築造時期が明確でないため、古屋敷遺跡と対応する古墳は確定していない。

灰塚山古墳の立地する独立丘陵は、国指定史跡新宮城跡と接し、すぐ西側にあたる。新宮城跡は中世の城館跡であり、中心部分によくその本来の姿をとどめている。その中心は14世紀にあり、15世紀まで存在したと考えられている。灰塚山古墳は新宮城から西側を見た時に、最も近い丘として目に入る位置にある。灰塚山古墳の位置に新宮氏の墓所が想定されており、中世においての何らかの意味をもち、使われた可能性もある。

註1 福島県立博物館竹谷陽二郎氏のご教示による。



第2図 宇内青津古墳群分布図



写真7 灰塚山古墳遠景（西から）



写真8 灰塚山古墳遠景（東から）

第2章 発掘調査成果

今年度は第5次調査までで確認していた2基の埋葬施設の様相を明らかにすることを目的に調査を実施した。調査開始の時は、墓壙内にあって古墳の主軸にほぼ位置を合わせている木棺痕跡と見られる陥没坑（第1主体部）が灰塚山古墳の主たる埋葬施設、その西側にあるやや小型の粘土槨の上面かと考えられた。粘土の構築物（第2主体部）は相対的に新しく、副次的な埋葬施設と考えていた。また、第1主体部は陥没坑内に多くの白色粘土が観察されることから粘土槨天井部が崩れた状態である可能性が考えられていた。以下埋葬施設ごとに調査所見を説明したい。（酒井 瞳、鈴木千賀）

1 第1主体部（第3図 写真8）

(1) 木棺痕跡の掘り下げ

墳頂平坦面を精査して第5次調査の成果を再確認した後、第1主体部の中軸線あたる部分に幅10cmの土層観察用の断面、中軸線に直行する形で幅20cm幅の断面を3本残し、土層の観察を行いながら陥没坑内を掘り下げた。

約40cmほど掘り下げたところ西側に粘土槨の天井部が崩落した部分であると思われる白色粘土が広がり、最初の段階ではこの部分を粘土槨上面と認識した。白色粘土の広がりをおいかけて掘り下げを行った。掘り下げた段階で、西側部分では白色粘土の底面と立ち上がりを確認することができたが、東側では立ち上がりを確認することができず、白色粘土が東に広がる可能性が想定された。そこで土層観察用の断面の位置を移動し、改めて陥没坑内の小区画を設置し掘り進めた。小区画は北側からA, B, C, D区とした。

新たな小区画を用いて土層観察用の断面を残してさらに東に掘り進めたが、東側の白色粘土の立ち上がりは確認できず、やむを得ず2箇所30cm幅のサブトレンチを設置し掘り進めた。サブトレンチの掘り下げ中にガラス玉、豎櫛、青銅鏡が出土した。これら遺物の出土により、白色粘土の上面が棺の内部であることが判明し、底面での掘り下げを停止した。サブトレンチを東側に掘り進めたところ、東側の白色粘土の立ち上がりを確認することができた。また平面上においても土質の違いから陥没坑の再確認を行った。サブトレンチで確認されていた白色粘土の立ち上がりを追いかけて東側全体で掘り上げたところ、西側よりも低い位置で白色粘土が収束していることがわかった。新たに認識された陥没坑の中軸線に20cm幅の土層観察用の断面を設置し、床面を精査した。床面近くに黒色とオレンジ色のブロック状の層が存在しこれを木棺が腐ったものと推定している（写真9）。

粘土槨の天井部が落ちた状態を想定して掘り下げを開始した。しかし、白色粘土上面で遺物が出土し、白色粘土上面が棺の床面であり、陥没坑の壁面と見ていた側面の立ち上がりが木棺痕跡の側壁にあたることを判明した。掘り下げた土層には粘土槨の天井部が想定される粘土層は存在しなかった。

従って、棺の上部は粘土で覆われておらず、埋葬施設は白色粘土上に設置された木棺と

考えた。埋葬施設の構造は粘土床の木棺直葬と考えられる。

(2) 木棺痕跡

木棺痕跡は、ほぼ古墳主軸上にあり、南北8.3 m、東西約1.7 mを測る。平面形はほぼ長方形を呈し、東西幅の変化はほとんどない。東西横断面はいずれも底面で幅70 cm前後、上端で幅170 cm程度、深さ60 cm程度を測



写真9 第1主体床面付近の土層

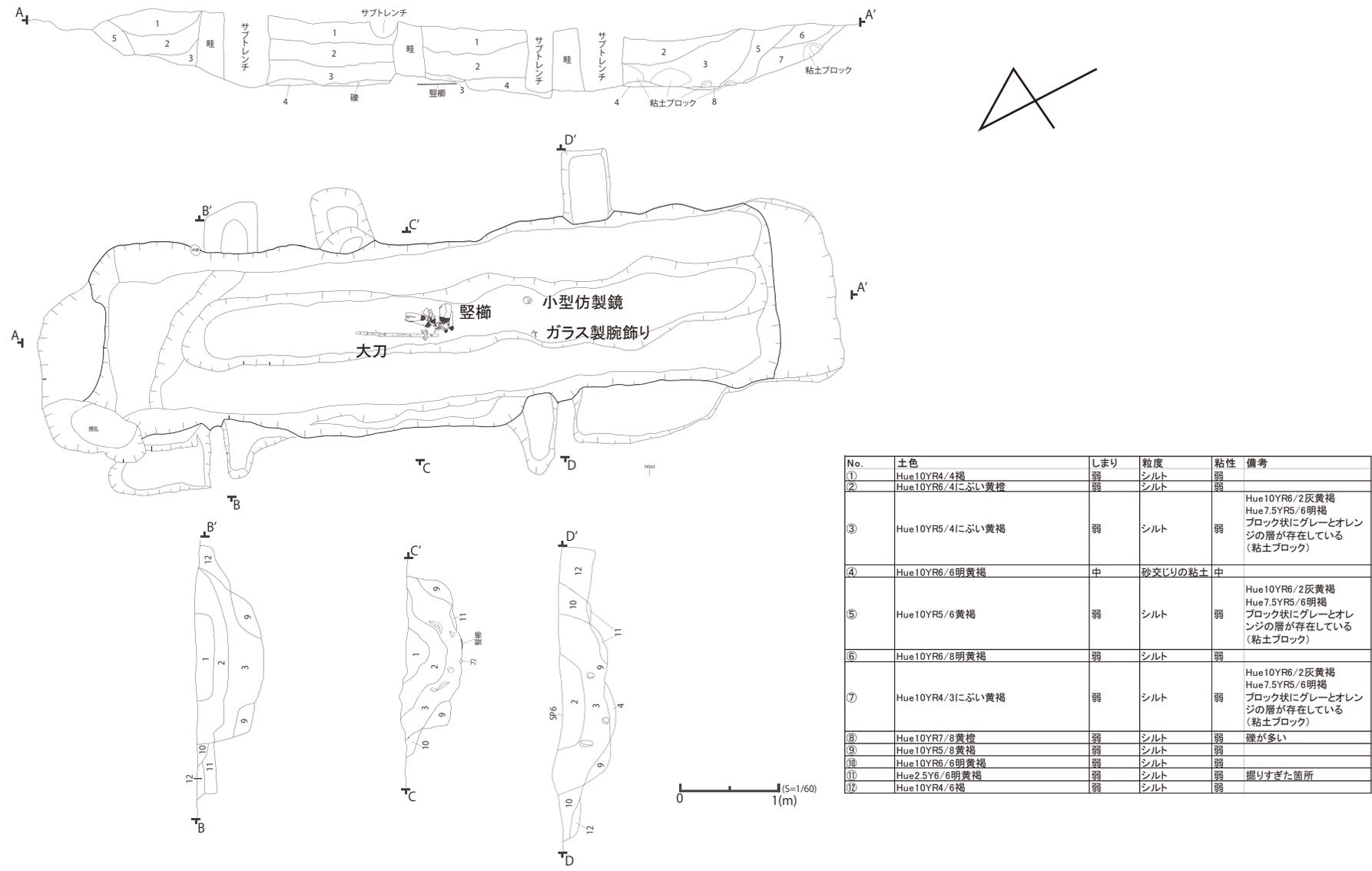
り、箱形に近い形状を示している。南北縦断面はおおむね平坦だが、棺の両端は南北いずれも緩やかに立ち上がる。全体の形状は船底から船首、船尾にいたる形状に類似する形状である。

横断面の形状からみて、木棺は木をくりぬいたものではなく、組合せ式であった可能性が高い。南北両端は斜めに立ち上がっていくことも合わせて全体に古墳時代の舟の形状を思わせる。

なお、木棺痕跡底面には幅15 cm程度、深さ2 cm程度の浅い溝がある。溝の下面には小礫群が存在し、排水施設と見られる。従って木棺底部の形状を反映したものではないと考えている。

墓壇埋め土の構造や粘土床の構築手順等については今後の調査で明らかにしていく予定である。

(結城 智)



No.	土色	しまり	粒度	粘性	備考
①	Hue10YR4/4褐	弱	シルト	弱	
②	Hue10YR6/4にぶい黄橙	弱	シルト	弱	
③	Hue10YR5/4にぶい黄褐	弱	シルト	弱	Hue10YR6/2灰黄褐 Hue7.5YR5/6明褐 ブロック状にグレーとオレンジの層が存在している (粘土ブロック)
④	Hue10YR6/6明黄褐	中	砂交じりの粘土	中	
⑤	Hue10YR5/6黄褐	弱	シルト	弱	Hue10YR6/2灰黄褐 Hue7.5YR5/6明褐 ブロック状にグレーとオレンジの層が存在している (粘土ブロック)
⑥	Hue10YR6/8明黄褐	弱	シルト	弱	
⑦	Hue10YR4/3にぶい黄褐	弱	シルト	弱	Hue10YR6/2灰黄褐 Hue7.5YR5/6明褐 ブロック状にグレーとオレンジの層が存在している (粘土ブロック)
⑧	Hue10YR7/8黄橙	弱	シルト	弱	礫が多い
⑨	Hue10YR5/8黄褐	弱	シルト	弱	
⑩	Hue10YR6/6明黄褐	弱	シルト	弱	
⑪	Hue2.5Y6/6明黄褐	弱	シルト	弱	掘りすぎた箇所
⑫	Hue10YR4/6褐	弱	シルト	弱	

第3図 第1主体部（木棺痕跡）平面、断面図



写真10 第1主体部（木棺痕跡）完掘状況



B区南壁断面



C区南壁断面



D区南壁断面

写真11 第1主体部 土層断面写真



写真12 木棺痕跡南端立ち上がり状況

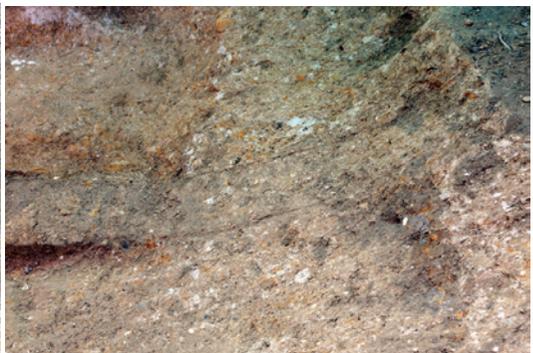


写真13 木棺痕跡北端立ち上がり状況

(3) 遺物出土状況

① 遺物の出土位置関係

第1主体部からは青銅鏡（仿製鏡）1、ガラス製腕飾り（ガラス小玉13）、豎櫛（大小合わせて30以上）、大刀1が出土した。いずれも底面直上の黒色とオレンジ色のブロック状の層から出土しており、木棺の底面に置かれたものと判断された。

鏡は第3、4図に示したように木棺痕跡の中央よりやや南側に寄った位置から出土した。また、青銅鏡の西側でガラス製腕飾りが出土した。

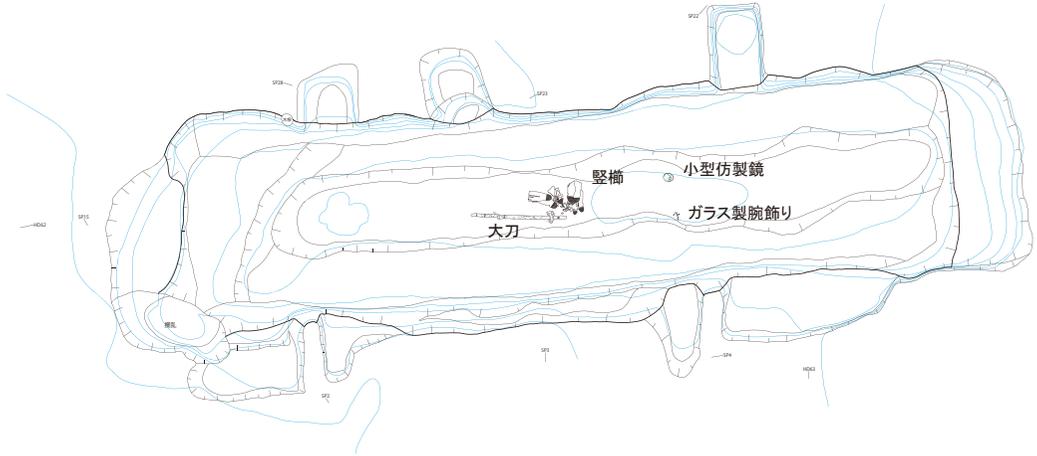
鏡、腕飾りからやや北に離れ、棺の中央付近で大刀と多量の豎櫛が出土した。大刀の切っ先は北に向いていた。

これらの遺物は動かされた形跡はなく、出土状況は埋葬時に置かれた位置をほぼそのまま示していると考えられる。鏡、腕飾りと豎櫛、大刀のまともりはやや離れていることをどう考えるかは解釈の余地はありそうだが、大刀が被葬者の体の脇に置かれていたと仮定すると、大刀の位置、切っ先の方向から見て、被葬者の体は棺の中央部分に頭を南西に向けて埋葬されていたと考えられよう。この場合、大量の豎櫛は被葬者の胸の上付近に置かれたことになる。また、鏡、腕飾りと大刀、豎櫛のグループとの空間があり、被葬者の頭はこの位置にあって、鏡と腕飾りは被葬者の頭の上に置かれたと見られる。

頭位が南西という例は少なく、極めて異例だが、例がないわけではない。また、同一棺複数埋葬という可能性も否定はしないが、少なくとも調査所見には複数埋葬を考え得る要素はなく、ここでは採ることはできない。



写真14 第1主体部遺物出土位置関係



第4図 第1主体部遺物出土位置

② 鏡の出土状況

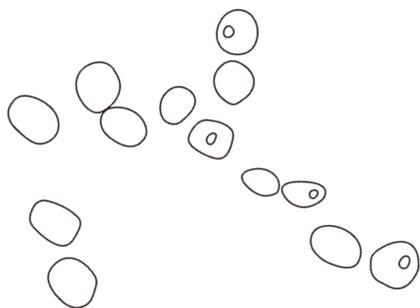
第1主体部木棺痕跡内のやや南よりの位置で鏡背面を上にした状態で出土した。完形である。出土時に(写真15)に示すように鏡背面上に有機質が比較的厚く観察された。また、取り上げ段階で鏡面の下に保存良好な木片が鏡面に付着しており、鏡が木製の箱に入っていたことを示していた。また、鏡背面の一部には布目が観察され、布にくるまれていたか布製の袋に入れられていたと考えられた。調査の段階では木質を残すために鏡背面を全面的には露出しなかったが、外区と内区の境に圏線がめぐること、内区に文様があることが観察された。(鈴木舞香)



写真15 第1主体部 鏡出土状況

③ 腕飾り（ガラス小玉）出土状況

第1主体部木棺痕跡内のやや南よりの位置、棺の東側で出土した。ガラス小玉13個で構成される腕飾りである。木棺痕跡底面から出土した。第5図、写真16に示すように、ガラス小玉は一部を除いて円弧を描く線上に連なる形で出土している。本来は糸で連ねられていたと見られる。
（佐伯鉄太郎）



第5図 腕飾り出土状況実測図
（縮尺1/1）



写真16 第1主体部 腕飾り出土状況

④ 豎櫛出土状況

第1主体部中央付近で、大刀の柄頭に近接して大量の豎櫛が集中して重なった状態で出土した。重なった状態のため、総数は確定できないが、大小取り混ぜて30個体以上は出土している。全長20cm、幅5cm前後の大型品と幅1cm程度の小型品がある。大型品は漆膜の下に竹材も残存しているものが多い。櫛歯と小型の櫛は漆膜のみの残存が多い。また、「棒状突起」（川村 1999）を持つもの、複数の小型豎櫛が大型豎櫛の棒状突起部分に取り付けられている状態のもの（以下「飾り」）が確認できる。

残存状況・重なり関係から全容は不明ではあるが、大型のものが8個（うち7個が「棒状突起」を持つ）、「飾り」と想定できるものが4組、その他小型のものが複数見られる。おそらくは散らばっている小型のものも「飾り」であったと考えられる。

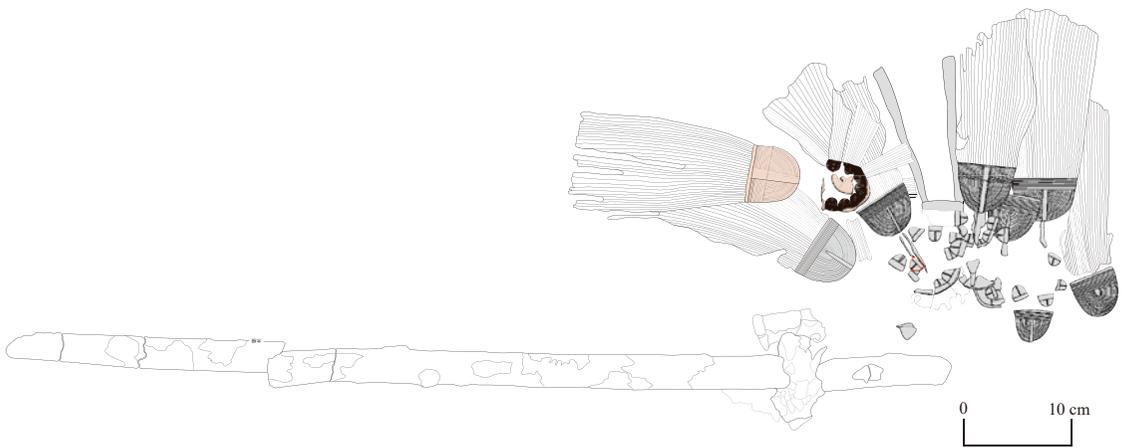
出土豎櫛は大小問わず黒漆が塗布されており、湾曲結歯式である。北側の飾り付き豎櫛は黒漆で加工した後、赤漆を塗布している。

出土豎櫛群はその重なり順序がよく見て取れる。頭位である南西側から順々に重ねていき、ばらまかれたというよりは何らかの意図をもって置かれたと考えられる。

（相川ひとみ）



写真 17 第1主体部 大刀と豎櫛群出土状況



第6図 大刀と豎櫛出土状況

⑤ 大刀出土状況

大刀は第1主体部中央部やや西よりの位置から出土した。木棺痕跡底部から出土しており、埋葬遺体の脇に置かれた副葬品と理解される。柄頭を南に、切っ先を北に向けており、東側に刃を向けている。柄頭付近では漆膜が覆うようすが観察された。漆膜がどのようなものに塗布されていたのかは判断できなかった。(平 大貴)

(4) 出土遺物

① 青銅鏡

比較的保存状態の良好な青銅鏡である。鏡背面は4分の1程が緑青、布、紐痕跡で覆われおり観察は難しいが、他は明瞭に文様を観察することができた。面径9.0cm、面反り2mm、縁の厚み3mm、鈕径1.5cm、鈕高は7mm、鈕孔幅6mmを測る。平縁で、鏡背面の文様は外区内側、隆線による圏線に接して櫛歯文、さらにその外側に圏線が確認できる。しかし、ほとんどが、摩耗しており、その文様は不明である。隆線による圏線の内側に接して鋸歯文、鋸歯文の内側に二重の圏線、その内側にやや立体的な文様があり、最も内側に1条の圏線がめぐる。内区にはやや不規則に配され、一定しない盛り上がりで表現された文様がある。全て異なった形状をしており、直径5mm程の円形のものから8mmの楕円形のもの、さらにその楕円形と円形が接着しくびれを持った形状のものが確認できる。また、これらの盛り上がりの一部から伸びる細長い形状のわずかな隆起線も数箇所確認できる。この文様が具体的に何を表したのか判然としない。

鏡背面の文様をどのように考え得るかは今後に残された大きな課題である。現状では森下章司氏が示す(森下 1991)古墳時代仿製鏡の三段階の内、4世紀末から5世紀に位置づけられる仿製鏡の小型化、簡素化が特徴的な第二の段階の仿製鏡の一群と考えておきたい。

(鈴木舞香)



写真18 第1主体部出土鏡

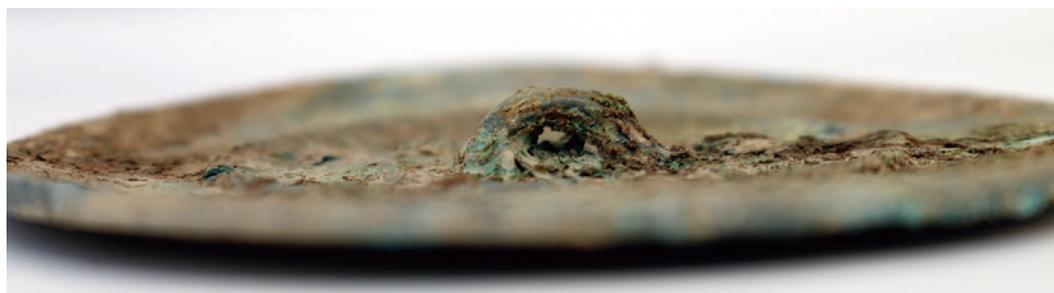


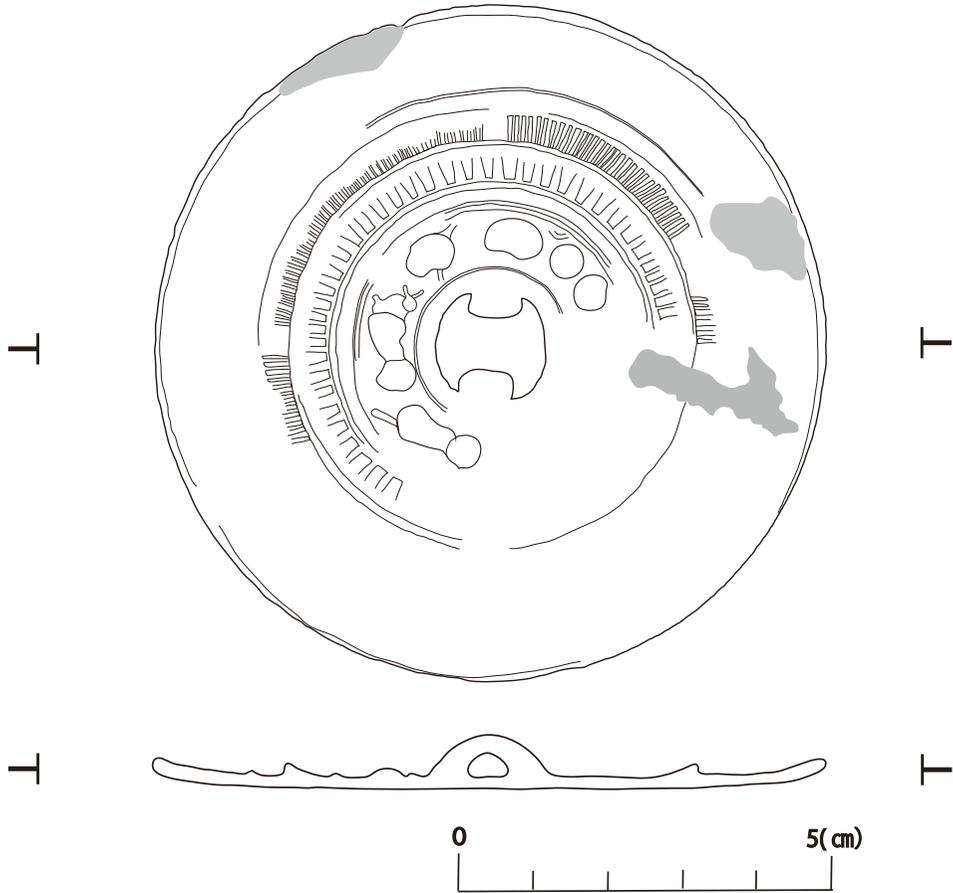
写真19 第1主体部出土鏡鈕孔



写真20 鏡背面周縁に残る布目



写真21 鏡背面に残る紐痕跡



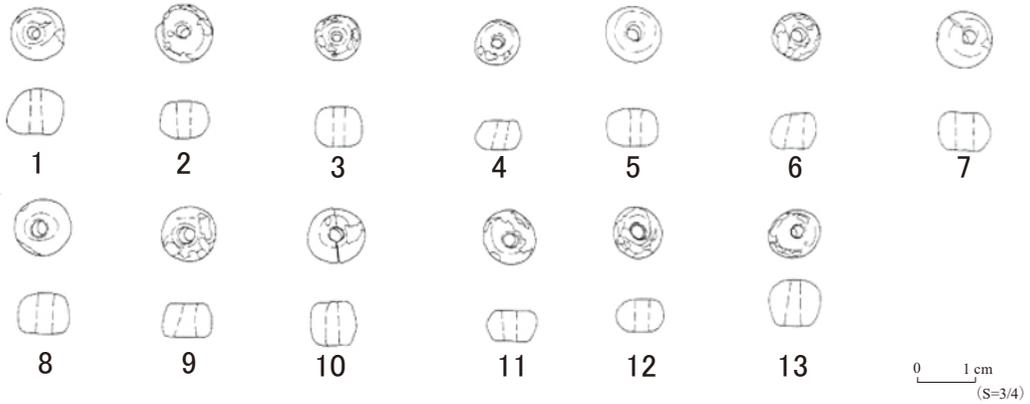
第7図 青銅鏡実測図

② 腕飾り (ガラス小玉)

ガラス小玉 13 個で構成される一連の装身具で、出土形状、大きさから見て腕飾りと判断された。ガラス小玉 13 個のうち 2 個は破損している。いずれも濃い紺色を呈する。直径は 8~10 mm、高さは約 8 mm、孔直径は約 2~3 mm である。(佐伯鉄太郎)



写真 22 第1主体部 腕飾り (ガラス小玉)



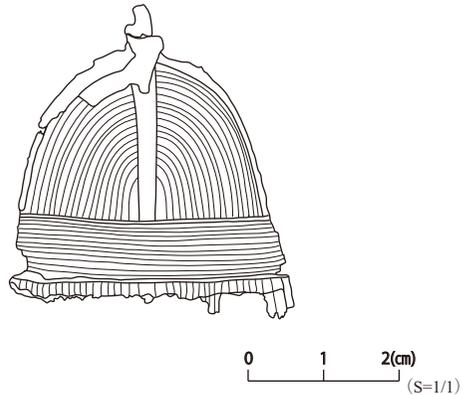
第8図 ガラス小玉実測図

③ 豎櫛

第9図、写真23の豎櫛1個体は現場で取り上げたものである。規格はムネ幅3.5cm・ムネ高4cmである。中央部を結束する糸が明瞭に確認できるほか、歯も一部残存している。残存状況から、櫛の製作手順が見て取れる。細く割いた竹の束の中央部を糸で縛り、そこを起点として折り曲げた後に、細く割いた竹で帯状に縛ったものと推測される。



写真23 出土豎櫛写真



第9図 豎櫛実測図

上記の豎櫛1個体の他は薄い漆膜だけが残存していたため、個別には取り上げることができなかった。以下調査時と切り取り後に観察した所見を述べる。

豎櫛群が分布する範囲は、全体で南北約50cm・東西約30cmに及ぶ。大型品と小型品の2タイプがある。個体ごとの規格は、大きさに若干のばらつきはあるが。大型の櫛はムネ幅4~6cm・ムネ高4~5cm・櫛歯13~16cm、小型の櫛はムネ幅1cm・ムネ高1cm・櫛歯5cmである。大型・小型豎櫛共に第9図の豎櫛と同じ製作手順で作られたものと考えられる。しかし、群の中で最南に位置する大型の豎櫛1個体には中央部を結束する糸と巻縛部は確認できない。竹の束の中央部を糸で縛ることはせずに折り曲げて製作されたものと考えられる。

大型品8個体のうち7個体には棒状突起があり、いずれも小型品と組み合わせられて一つの葬送に用いられる道具（以下葬具と記述）を構成していたと考えられる。従って被葬者の胸の位置と推定される場所に7個体の葬送用の特殊な葬具が置かれていたことになる。

葬具群は被葬者頭位に近い棺主軸と直交方向に置かれた南側の一群と棺主軸に斜交ないし平行方向に置かれた北側の一群の二つに分かれる。両群の間は少し間があいており、豎櫛とは異なる形の交差する3条の漆膜が観察されるが、現段階では詳細を明らかにすることはできなかった。

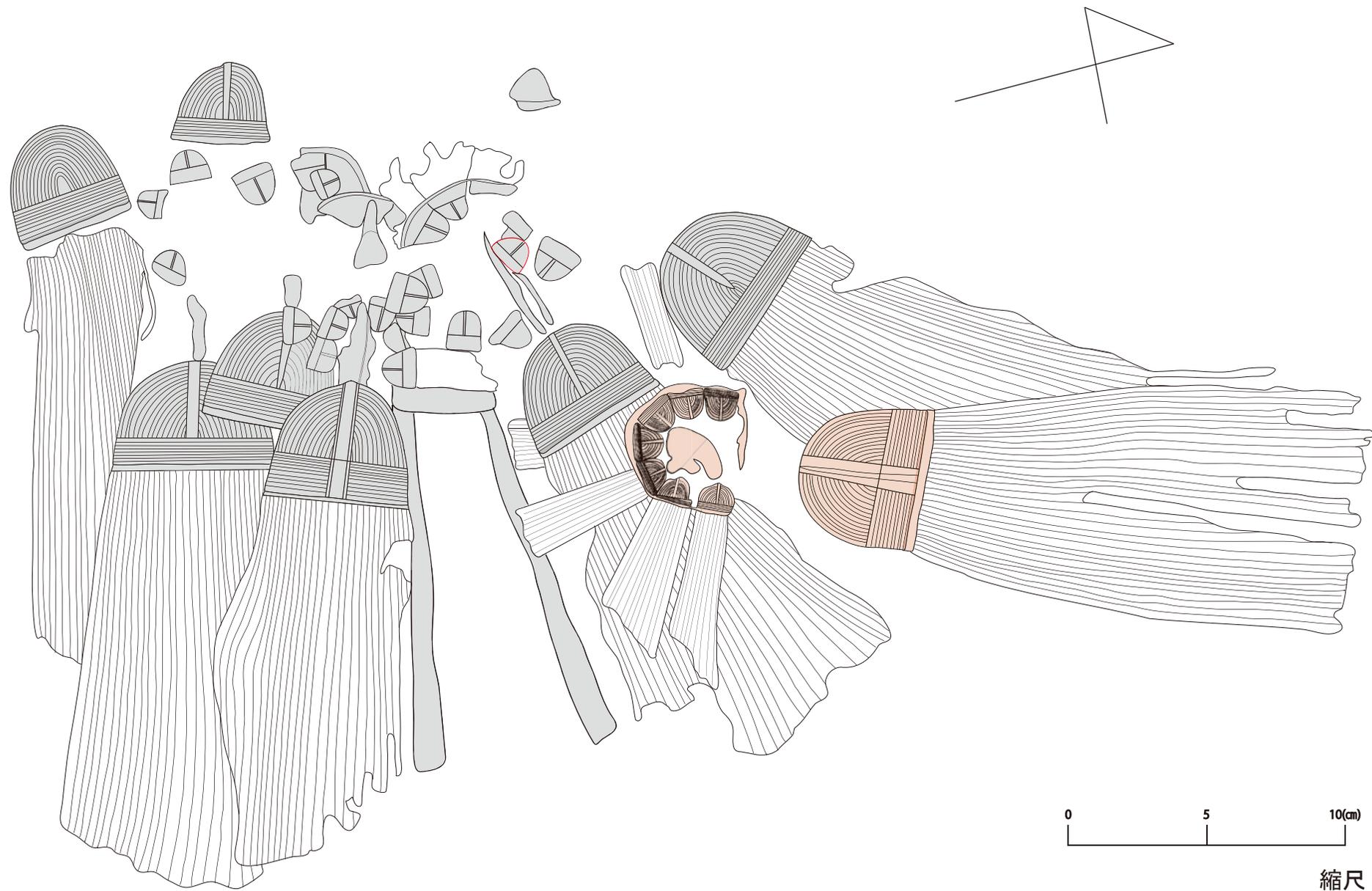
南側の一群は重複関係から最初に葬具の形をとらない単独の大型櫛が最初におかれ、その上に南から3個の葬具が順番に置かれていったと見られる。北側の一群は斜交する二つの葬具は並べて置かれた後に、朱漆が塗られた葬具が置かれたと見られる南北両群の前後関係は分からない。

これらの豎櫛群は調査終了後に、松田隆嗣氏の指導のもとに発泡ウレタンで固めた上で切り取り、取り上げることができた。発泡ウレタンは市販のインサルパック HIPER # 30 を6パック使用した。他に市販の1液タイプを使用した十分な硬さを得られなかった。

（相川ひとみ）



写真 24 豎櫛群出土状況



第10図 竪櫛出土状況実測図



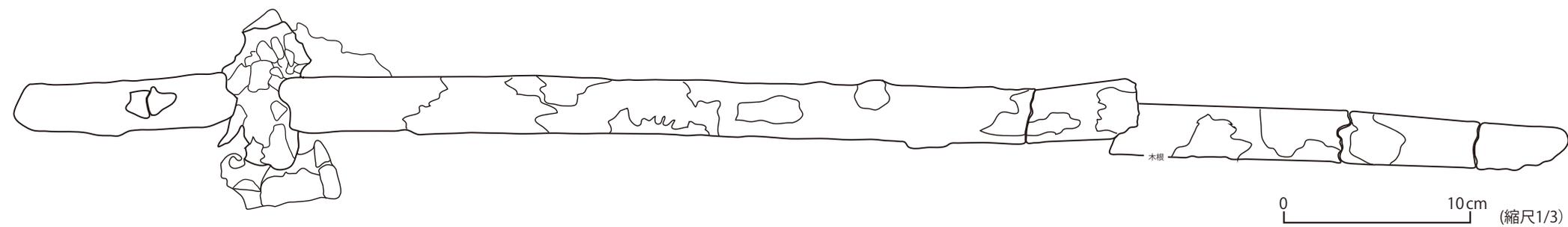
写真 25 堅櫛群養生、切り取り準備



写真 26 硬質発泡ウレタン注入



写真 27 切り取り終了



第 11 図 第 1 主体部出土大刀実測図



写真 28 第 1 主体部出土大刀

④ 大刀

第1主体部から大刀が一振り出土した。柄頭を南に、切っ先を北に向け、被葬者の遺体の脇に置かれたものである。保存状態が悪く、動かせない状態のため、保存処理終了を待って実測図を作成することとした。ここでは大刀が出土した段階での写真と実測図を提示する。大刀は長さ84cmを測る。茎は約12cm、目釘孔は木質に覆われて観察できない。柄には木質が多く残り、木装と判断される。柄元、鏑、鞘元部分には木質がかたまっているが、その形状は明瞭でない。関部も現状では観察できない。刀身は長さ70cm弱で、幅3cm程度を測る。ふくら切先である。刀身には木質も付着しており、鞘に入った状態と判断した。(平 大貴)

2 第2主体部

(1) 粘土層の掘り下げ

第5次調査で確認された長楕円形の粘土の高まりの性格解明のため、四分法により粘土を掘り下げることとした。四分された区画を、北西側から反時計回りに第1区、2区、3区、4区とし、掘り下げは第2区から開始し、土層断面を確認しながら3区、1区、4区と掘り進めた。

掘り下げにより、赤褐色と白色の粘土が交互に積まれている様子が観察された。すべての調査区において、赤褐色の粘土が最上層で検出され、また、白色の粘土層からは小礫が多数検出された。このことから、2色の粘土には明確な区別があり、白色の粘土層には小礫を入れ、粘土表面には赤褐色の粘土を積むという、意識的な構築手順がうかがえる。なお、粘土層内からの出土遺物は無く、白色の粘土層内で検出された小礫をサンプルとして取り上げた。

粘土層を掘り下げた結果、組み合わせられた板石群（以下石組み遺構）の上面に達した。



写真 29 粘土層と石組み遺構

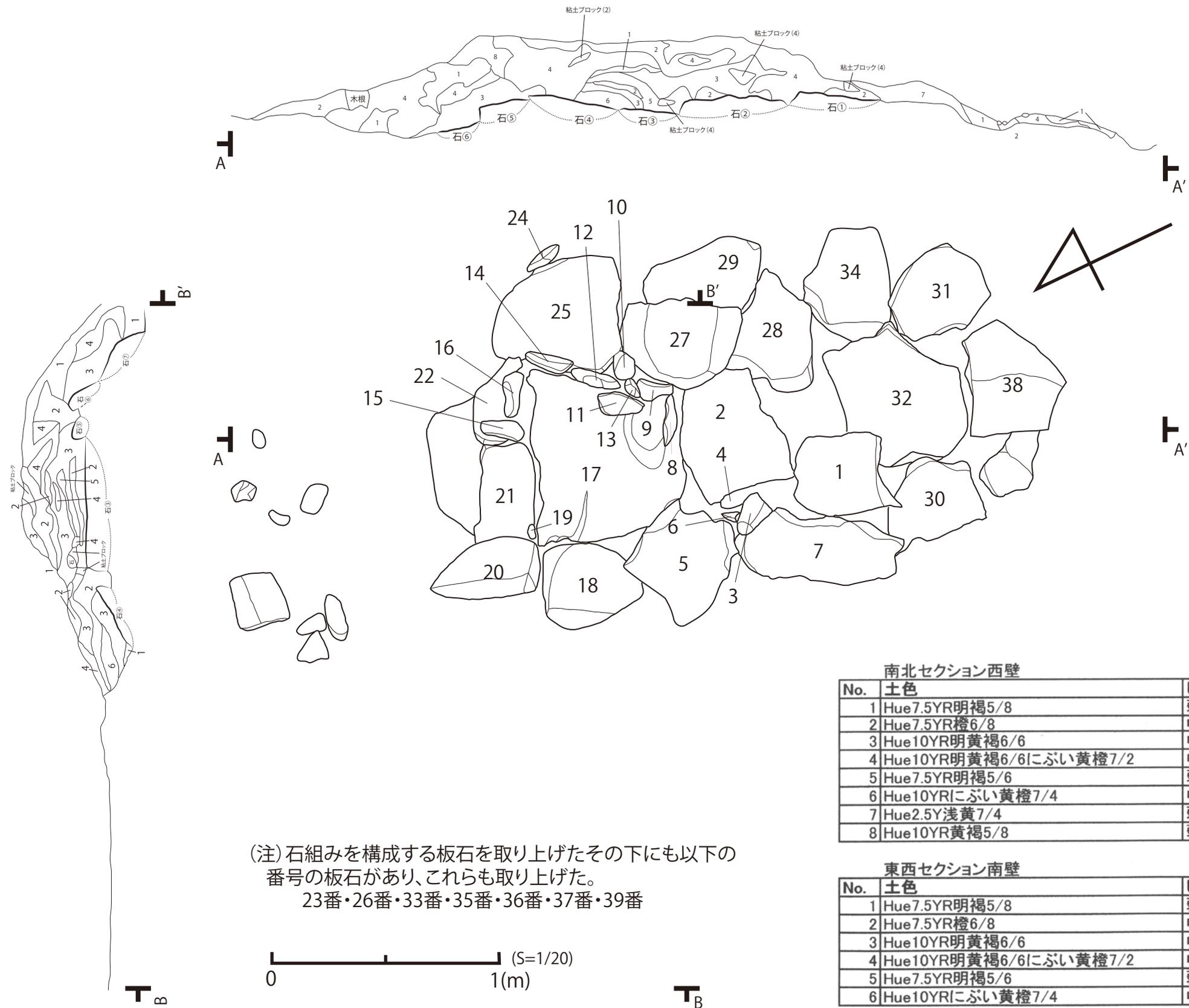
(2) 石組み遺構

粘土層を取り除いた結果、写真30、第12図に示したように板石を組み合わせた構築物が検出された。板石には第1表のように長さ50cmを越える大型石と長さ20cm前後の小型石がある。石組みは全体に亀の甲羅状に構築されている。石の重なりから、中央部のやや大型の石で構成されている部分は古く、左右から立てかけられた状態の石は比較的小型で、中央の石が配置された後に立てかけられている。

石組み全体は、南北長2.9m、東西幅1.6mを測る。石は合わせて39個確認され、それぞれの特徴は第1表の通りである。ほとんどの石の下面には黒や朱による彩色がほどこされており、一部の石には、人為的に打ち欠いたような痕跡が認められる。また、4番の石の裏面に鉄が付着していた。これは石の下に大量の鉄製品があり、その錆が付着したものである。なお、この石組みを構成する石材の産地は、古墳の北方にある喜多方市角間山であると喜多方市教育委員会からご教示いただいた。



写真30 石組み遺構全景
(北から撮影)



(注) 石組みを構成する板石を取り上げたその下にも以下の番号の板石があり、これらも取り上げた。
23番・26番・33番・35番・36番・37番・39番



南北セクション西壁

No.	土色	しまり	粒度	粘性
1	Hue7.5YR明褐5/8	弱	シルト	弱
2	Hue7.5YR橙6/8	中	シルト	中
3	Hue10YR明黄褐6/6	中	シルト	弱
4	Hue10YR明黄褐6/6にぶい黄橙7/2	中	シルト	弱
5	Hue7.5YR明褐5/6	弱	シルト	弱
6	Hue10YRにぶい黄橙7/4	中	シルト	弱
7	Hue2.5Y浅黄7/4	弱	シルト	弱
8	Hue10YR黄褐5/8	弱	シルト	弱

東西セクション南壁

No.	土色	しまり	粒度	粘性
1	Hue7.5YR明褐5/8	弱	シルト	弱
2	Hue7.5YR橙6/8	中	シルト	中
3	Hue10YR明黄褐6/6	中	シルト	弱
4	Hue10YR明黄褐6/6にぶい黄橙7/2	中	シルト	弱
5	Hue7.5YR明褐5/6	弱	シルト	弱
6	Hue10YRにぶい黄橙7/4	中	シルト	弱

第12図 石組み遺構全体図

福島県喜多方市灰塚山古墳第6次発掘調査報告

石番号	最大径 (cm)	最大幅 (cm)	表面	裏面	備考
1	49	37.5		黒	天井部と側面の石にかかる位置より検出。
2	62	47.5		黒	石の側面に打ち欠き (?) の痕有り。 天井部の板石。 石棺蓋石の上の板石。
3	19.5	13			板石どうしの間を充填する小礫。
4	17.5	8			鉄が付着。 板石どうしの間を充填する小礫。
5	61.5	52	黒、薄い朱	黒	側石。一部天井部の石にかかる。
6	12.5	9			板石どうしの間を充填する小礫。
7	74.5	38	黒	黒	側石。
8	22.5	6.5		黒	板石どうしの間を充填する小礫。
9	15.5	13			板石どうしの間を充填する小礫。
10	20	9			板石どうしの間を充填する小礫。
11	19.5	10			板石どうしの間を充填する小礫。
12	22.5	10			板石どうしの間を充填する小礫。
13	10	9			板石どうしの間を充填する小礫。
14	22	10			板石どうしの間を充填する小礫。
15	17.5	9			板石どうしの間を充填する小礫
16	20	8			板石どうしの間を充填する小礫。
17	85.6	84		朱、黒	天井部の板石。 石棺蓋石の上の板石。
18	51	47		黒	側石。
19	5.5	3			板石どうしの間を充填する小礫。
20	56	42	黒点	黒	側石。一部天井部の石にかかる。
21	46	31		黒	石棺蓋石の上の板石。
22	42.5	39.5		黒	23番の石と接合。 石棺蓋石の上の板石。
23	20	15.5		黒	22番の石と接合。 15番の石下より検出。
24	19.5	7		朱点	小礫。
25	63	54		黒	側石。
26	15.5	8.5			9・10・13番の石下より検出。 板石どうしの間を充填する小礫。
27	55.5	43		朱	天井部と側面の石にかかる位置より検出。
28	58	41		黒	天井部と側面の石にかかる部分より検出。
29	62	56		朱点、黒点	側石。
30	50	45		黒点	側石。
31	52	44	朱点	黒	側石。
32	76	63		朱点、黒	天井部の板石。 石棺蓋石の上の板石。
33	88.5	56		朱、黒、朱点	32番の石下より検出。 天井部の板石。 石棺蓋石の上の板石。
34	46	40.5		朱、黒	石表面に打ち欠き (?) の痕有り。 側石。
35	20.5	15	朱	朱	33番の石下より検出。 板石どうしの間を充填する小礫。
36	19.5	15	赤		33番の石下より検出。 板石どうしの間を充填する小礫。
37	51	37		黒	28・33番の石下より検出。 天井部と側面の石にかかる部分より検出。
38	60	48		黒	南端の石。 石棺蓋石の上の板石。
39	37.5	27.5	黒、朱点	朱点	31・32・34番の石下より検出。 石棺天井部と側面の石にかかる部分より検出。

第1表 石組み遺構構成石観察表



17 下面



25 下面



29 下面



33 下面



34 下面



38 下面

写真31 石組み遺構構成板石下面に残る朱彩、黒彩

(3) 石棺

石組み遺構の板石群を除去した後、石棺本体を検出した。石棺蓋石上面から多くの遺物が出土したが、遺物出土状況は次項で述べる。

石棺の蓋石は5枚で構成される。北から2番目の蓋石だけがやや厚みがあり柱状であるが他はいずれも薄く、板石である。蓋石の重なりから、北から3番目の中央部分の板石が最後に置かれたと考えられる。北側は最北の石が最初に置かれ、次に2番目が置かれる。南側も同様で、最南の石が最初で次に2番目が置かれる。棺の蓋石は北は北から順に2枚が置かれ、南も同じく南から順に2枚が置かれて、最後に残された隙間を中央の石で塞ぐという手順を採ったと見られる。5枚の蓋石で棺を覆った後に蓋石同士あるいは蓋石と側壁との間に小さな隙間が多くできてしまったために小さな石を差し込む形で隙間を塞いでいる。

石棺天井部は石を重ねながら構築するために平坦には構成できなかったようだ。最後に置かれた中央部分の板石上面が最も高く、南北ともにやや低く作られている。隙間から見える石棺内部の天井部も同様で、中央部分が最も高く、南北両側は低くなっている。隙間から見える範囲の石棺内面は全面真っ赤に彩色されている。

石組みの南側では粘性の強い白色の粘土が石組みを四角く囲む状態にあるのが明瞭に観察された。これは、石棺を埋納するための据え方に石棺設置後粘土を充填したと判断している。今回の調査では石棺の調査は進められなかったので、今後の調査でこの粘土層の広がり、構造、役割を追求したい。

なお、次項で述べる多量の武器はまさに石棺の最後に被せられた蓋石の上に供えられている。時系列に沿って現状の知見で復元すれば、以下のようなになるだろう。

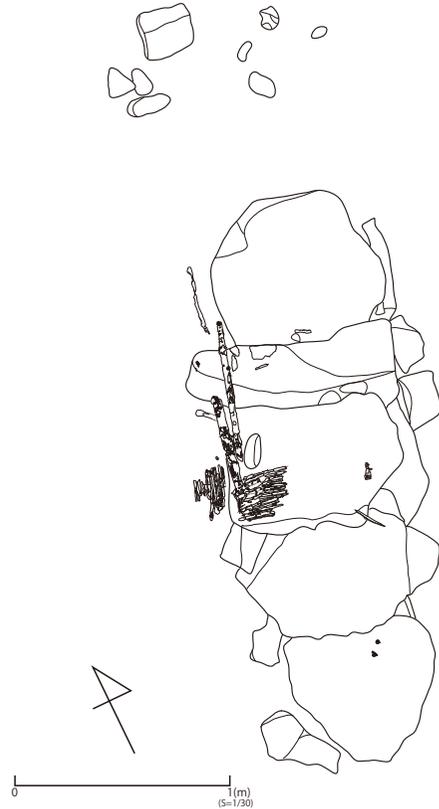
(被葬者の死→殯→石棺内への埋納→) 南と北から蓋石を置く→中央の石蓋で棺を閉じる
→中央の蓋石上に大刀、鉄剣(槍、戟?) 供献→30本程度の矢束を2つ供献
→板石で石組みを構築して石棺を覆う→石組み遺構の上に粘土を盛り、石組みを覆う

今回の調査では石棺内部、石棺構造等の調査を実施できなかった。従って石棺内の副葬品や被葬者に関する情報を知ることができなかった。また、石棺の構造や構築手順等解明すべき問題は多く残されている。これからの課題としたい。

(横山 舞)



写真32 石棺上面 南から



第13図 石棺上面実測図

(4) 石棺蓋石上面遺物出土状況

石組み遺構を構成する板石を重なるの最上部から順にはずし、その内部を探索した。板石をはずしていくと、その下層に箱式石棺の上面が検出され、石棺の蓋石上に多くの鉄製品、豎櫛などが配置された状態で発見された。

出土遺物の構成は以下の通りである。(カッコ内は検出数量)

- 大刀 (1)
- 鉄剣 (槍先) (1)
- 板状鉄製品 (1)
- 鉄鏃の束 A、B (2)
- 鉄鏃 (2)
- 豎櫛 (2)
- 管玉の破片 (1)
- 漆膜 (4)

① 石棺蓋石上面西側遺物出土状態

遺物群のうち大刀、鉄剣（槍先）、板状鉄製品、鉄鏃の束はいずれも、石棺の西側に集中して検出された。また、石棺西側には朱が散布している。このような状況から、石棺西側は埋葬後に行われる儀式の場であったと想定される。なお、石棺脇東側では朱の散布はごく微量であり、遺物は出土しなかった。

石棺蓋石の上面で検出された各遺物の位置関係は乱されておらず、埋葬を終了し、蓋石を被せた後置かれた状態をそのまま残していると考えられた。検出状況は次の通りである。

大刀1点と鉄剣（槍先）1点は、石棺の西側に、それぞれ切っ先を南に向けた状態で平行する位置に置かれていた。大刀と鉄剣（槍先）にはいずれも木質が観察され、鞘に入った状態であると判断された。大刀の柄部は鉄剣（槍先）よりも34cmほど北にあり、一見すると鉄剣と大刀はずれた位置に置かれたように見える。ただし、出土資料を槍先と見た場合、槍先の北方向の延長線上に帯状の漆膜と朱が点在する場所があり、これを槍の柄に塗彩された装飾とみることも可能である。この場合大刀と槍は切っ先方向も位置関係も揃えられていることになる。

さらに、鉄剣（槍先）の下層から交差する方向で板状鉄製品が出土している。板状鉄製品は鉄剣（槍先）と接合関係がある可能性が高い（写真33）。接合関係が認められれば、鉄剣（槍先）と板状鉄製品が交差して結合されていたことになり、両者合わせて結合式の戟と理解することも可能である。この場合北方向の延長線上にある帯状の漆膜と朱が戟の柄の部分と見ることができる。ただし、板状鉄製品には刃がついておらず、武器としての機能に問題が生じることになり、疑問が残る。

また、鉄鏃の束が2つ出土した。鉄鏃束Aは石棺中央の蓋石の上で鏃先を西に向けた一群である。鉄鏃の先端は鉄剣（槍先）の上に乗っており、鉄剣（槍先）の後に置かれたものである。鉄鏃はすべて長頸鏃で、銹着により、確実に個体数を確定できないが、おおむね30本程度が観察される。鏃先は石棺真ん中の蓋石西端におおむね揃えられている。同じ石蓋の東端近く、鏃身の方向を延長した位置に漆膜が複数出土した。漆膜の方向も鉄鏃の延長線上にあり、鉄鏃が装着された矢柄に塗られたものと考えられた。位置関係から見て矢柄の本矧部分にあたる可能性が高い。従って、



写真33 板状鉄製品と剣（槍先）との接合状況

鉄鏃の束は埋葬時には矢の束が供えられたものと見られる。つまり、鉄鏃の束は矢の束の存在を示すと考えられる。鏃身と本矧の位置から矢の長さは75~80 cm程度と推察された。

もう一つの鉄鏃の束Bは、大刀、鉄剣（槍先）の西側に方向を揃えて置かれていた。鏃先は鉄剣（槍先）先端と近い位置にあたる。Aと同様にすべて長頸鏃で構成され、30本程度で構成されていると見られた。石棺を構成する石上に漆膜が観察され、鏃身の延長方向にあたるため、A群と同様に矢の状態で供えられたと見られる。鏃身と本矧の位置から矢の長さは80 cm程度と推察された。

② その他の出土遺物

石棺南端の蓋石上面から竪櫛2点が出土した。また、中央の蓋石の南東隅に立てかけられた形で鉄鏃（長頸鏃）が完形で出土した。口巻部分等は観察できず、鉄鏃単体の出土と判断した。石棺北端の蓋石南端から鉄鏃の頸部だけが出土した。第2主体部主軸と直交する位置である。周囲に他の部分は認められず、頸部だけが置かれたと考えられる。

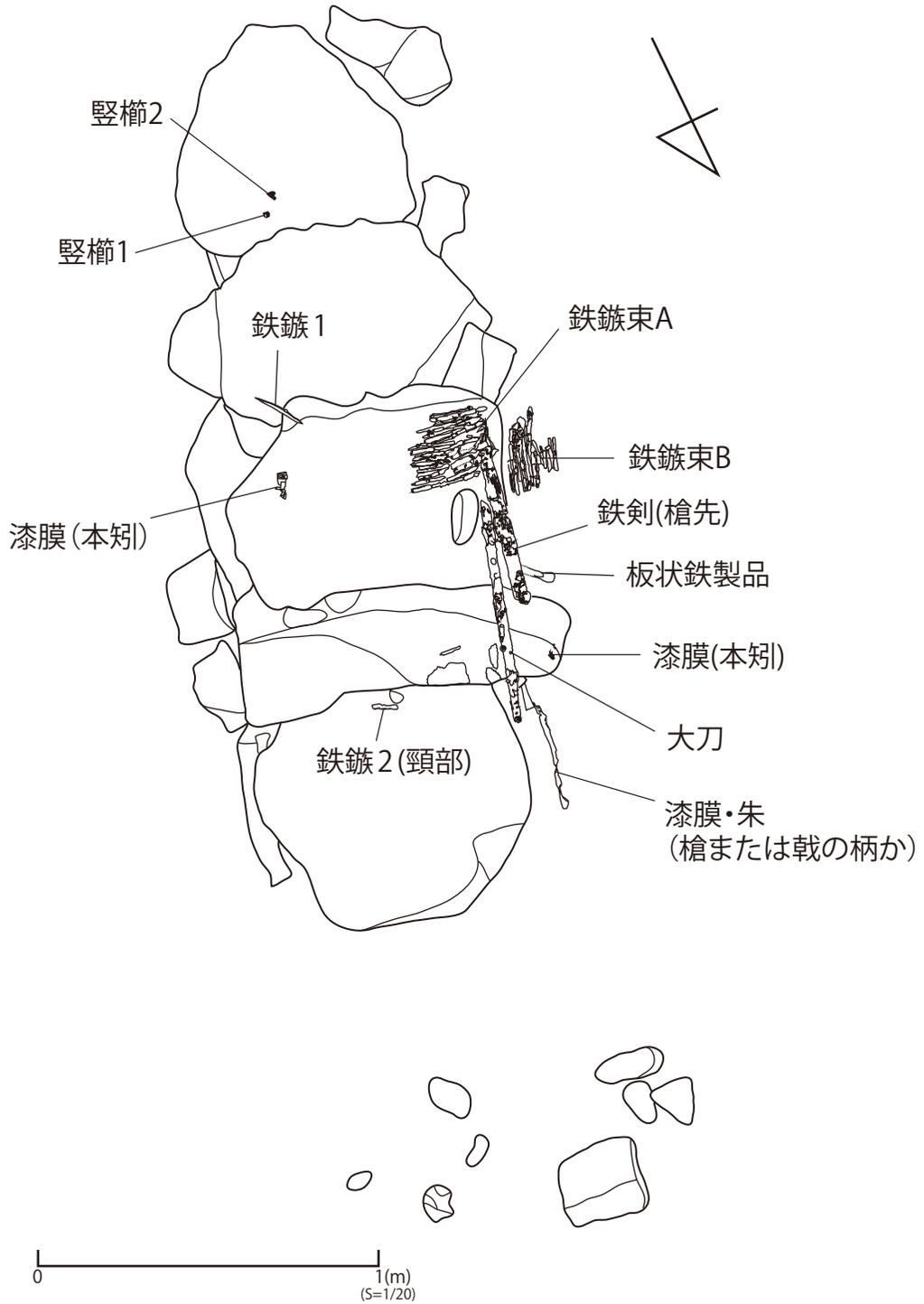
これらの出土遺物は被葬者の埋葬終了後蓋石が置かれた後に供えられた遺物群と考えられる。石棺蓋石西側から多量に出土した鉄製品との前後関係は不明である。

なお、残る管玉破片1点は石棺の隙を埋める粘土内から出土しており、死者への供え物と見ることはできない。

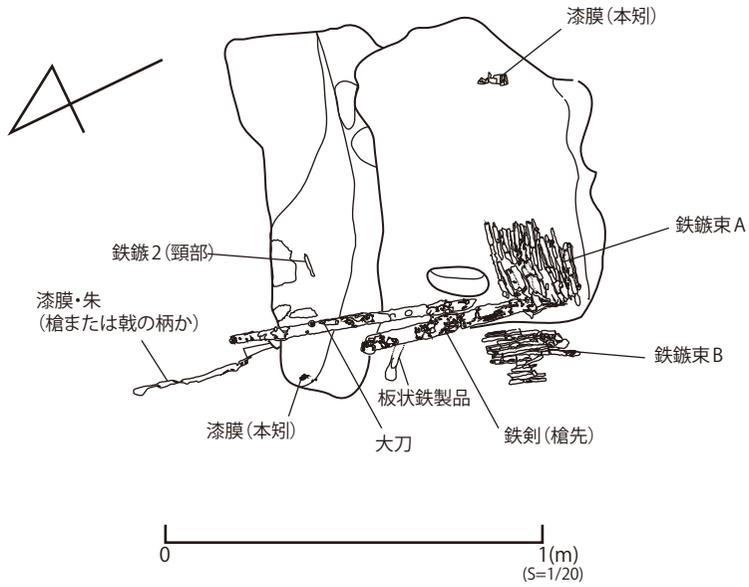
（横山 舞）



写真34 石棺蓋石上面西側鉄製武器出土状況



第14図 遺物出土状況全体図



第15図 遺物出土状況詳細図



写真35 本矧部分漆膜



写真36 槍または戟の柄に残る漆膜と朱



豎櫛1



豎櫛2

写真37 第2主体部豎櫛出土状況



写真38 第2主体部鉄鏃出土状況



写真39 第2主体部鉄鏃頸部出土状況

(4) 出土遺物

① 大刀

第2主体部石棺中央蓋石上から出土した大刀である。大刀は全長62cmを測る。身の長さ51cm、茎部の長さは11cmである。茎に目釘穴が一つ確認できる。身幅は最大で2.5cm、身の厚さは1cm。茎部の幅は1.5cm。である。柄部、刀身に木質が観察され、木装で鞘に収められていたと見られる。ふくら切っ先である。保存処理を実施できていないので、詳細な観察はできず、関部の形状等詳細は保存処理終了後に観察する予定である。実測図も現段階での作図であり、最終的な図は報告書作成段階で作成する予定である。

② 剣（槍先）

大刀と平行する位置置かれた剣（槍先）である。茎は本来の形を残しておらず、不整形である。残された全長は53cm、身幅は最大で4.5cmを測る。剣身の両側に鎬があり、断面は菱形を呈している。断面の厚さは中央部で1cmあった。目釘穴の有無は確認できなかった。剣身部分には厚く木質が残されており、木製の鞘に入った状態と考えられた。

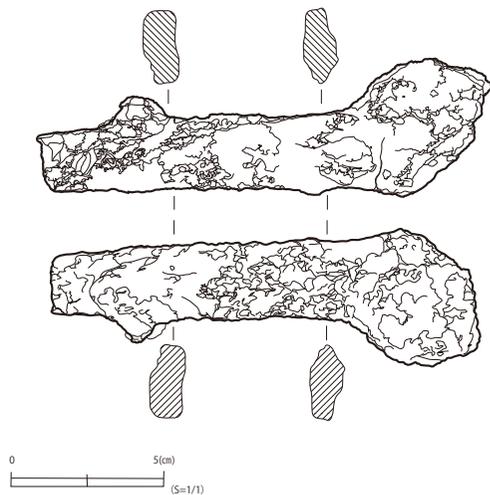
(斎藤千晶)

③ 板状鉄製品

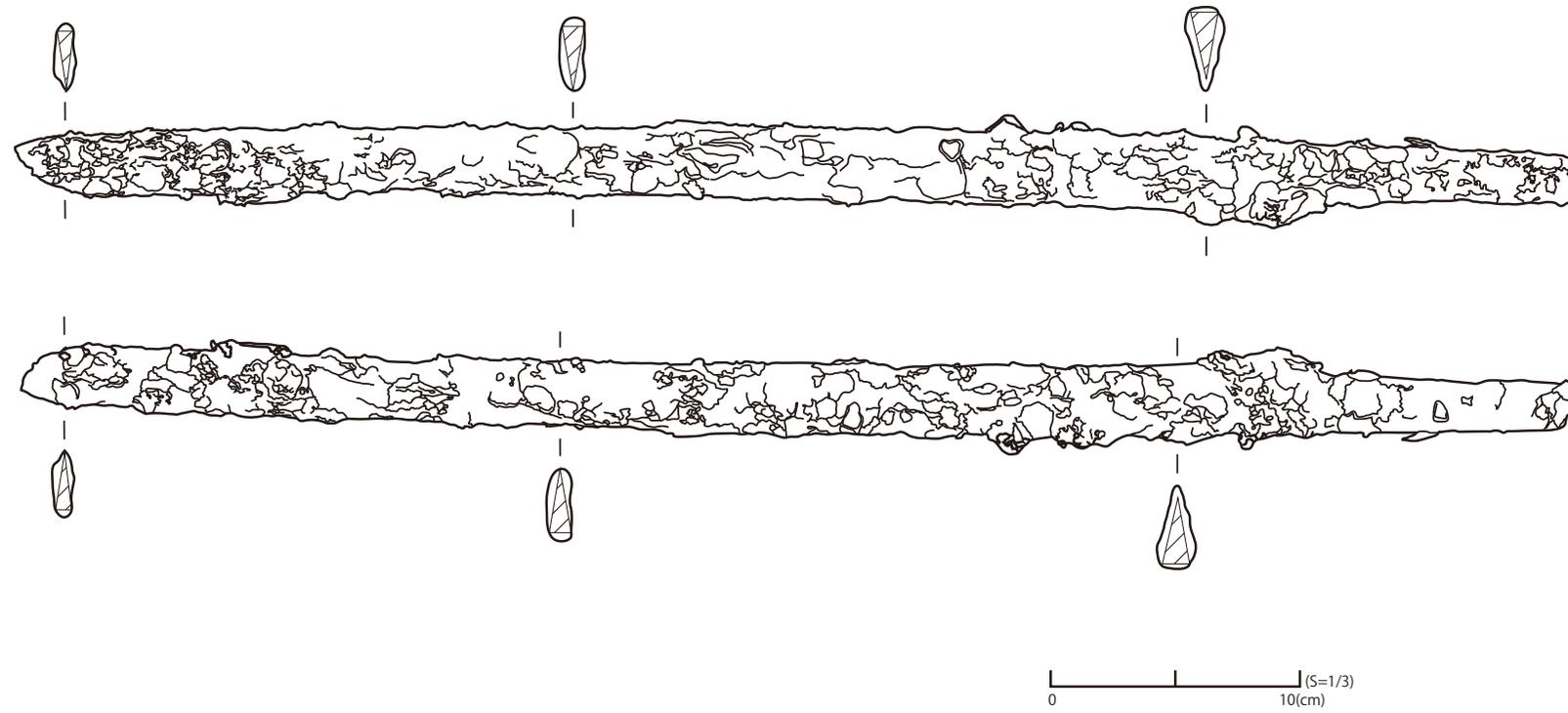
第2主体部西側から剣（槍先）に斜交する形で出土した鉄製品である。薄い板状の鉄製品で、長さ14cm、厚さ1cmを測る。幅は写真左で2cmで右に行くにつれて幅を増し、右端で4.5cmを測る。右側に大きな膨らみがあり、錆によるものと思われる。上下両端には面が作られており、特に刃を作り出した様子はない。左右両端は折れた状態で完結していない。先に述べたように②と接合する可能性が高く、②と組み合せて戟を構成するとも考えられるが、刃が作り出されておらず、疑問が残る。保存処理終了後に詳細観察を行い、検討したい。



写真 40 板状鉄製品



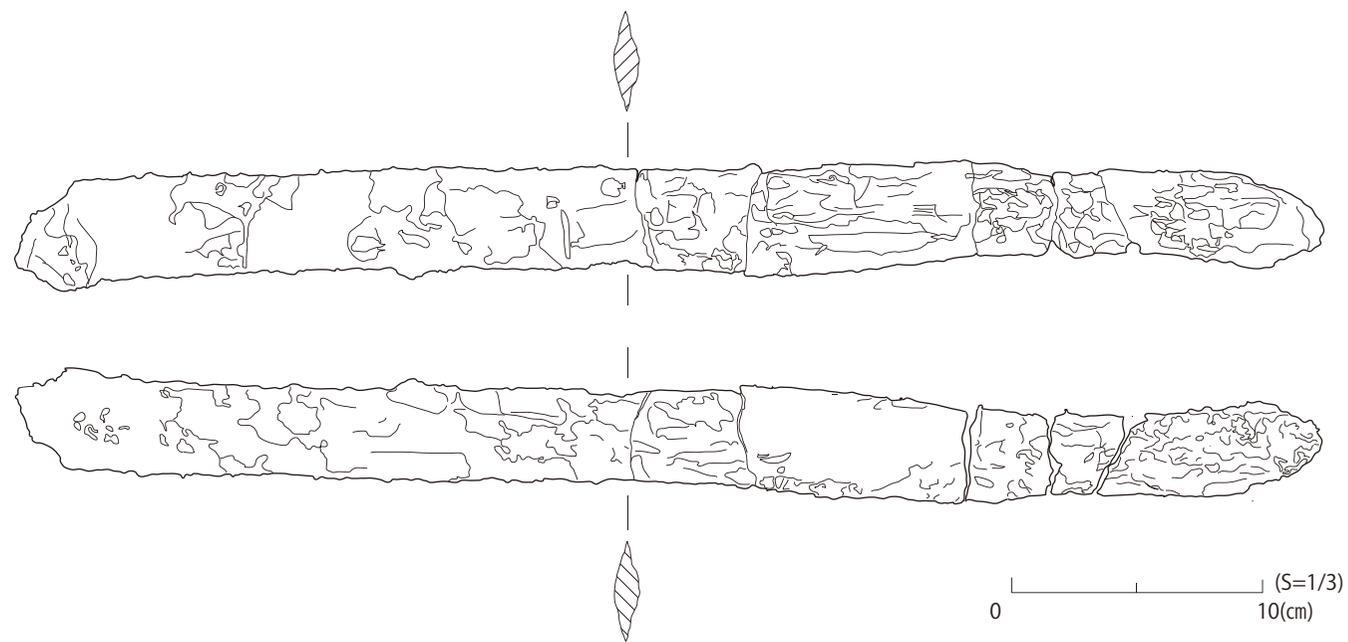
第 16 図 板状鉄製品 実測図



第 17 図 第 2 主体部出土大刀実測図



写真 41 第 2 主体部出土大刀



第18図 剣（槍先）実測図
（両面と断面）



写真42 第2主体部出土剣（槍先）

④ 鉄鏃束 A、B

A、Bの2群鉄鏃の束が出土している。

束Aは第2主体部主軸に平行する方向で置かれた、鉄剣（槍先）の先端に乗った状態で、鏃先が主軸に直交する位置で発見された。束Aは塊の状態で正確に数は数えられないが、表面から観察するだけで20個体前後は確認できる。保存処理、整理作業が進めば30個体前後の個体が確認できると推測している。鏃の先端は西方向に向いて揃っており、鏃身も方向を揃えている。先に述べたように矢柄の本矧部分の漆膜の存在から矢の束として供えられた一群である。矢束を収容する鞞や胡籙などの痕跡は確認できなかった。矢の束がむき出しで置かれていたと見られる。

鉄鏃は全て長頸鏃で、鏃身の形は柳葉形で長さ2.5～3.5cm前後である。頸部は長さ9.5～10cm前後、断面形は横に長い長方形である。茎は断面が円形で長さ3～4cm程度を測る。茎は全て木質で覆われており、口巻きによって矢柄と接続していた様子がうかがえる。

束Bは鉄剣（槍先）よりも西側に、鉄剣と平行した状態で発見された。鏃先を南に向けた鉄鏃の束である。束Aと同じく固まりの状況だが、13個体までは確認できる。全体では束Aと同様に30個体前後が束の状態で見つかりたと推測される。鏃の先端は南方向に向いて揃っており、鏃身も方向を揃えている。矢柄本矧部分の漆膜の存在から矢の束として供えられた一群である。矢束を収容する鞞や胡籙などの痕跡は確認できなかった。矢の束がむき出しで置かれていたと見られる。

鉄鏃は全て長頸鏃で、鏃身の形は柳葉形が原則だが、中に関で頸部との間に角が造り出されるものがある。全長20cm前後である。頸部は長さ13cm前後、断面形は横に長い長方形である。茎は断面が円形で長さ3cm程度を測る。茎は全て木質で覆われており、口巻きによって矢柄と接続している。

(窪田磨実)



写真43 鉄鏃束A



写真44 鉄鏃束B

⑤ 鉄鏃（単独出土）

東で出土した A、B 群とは別に単独で出土した鉄鏃が 2 点ある。1 点は茎の下端を南から 2 枚目の蓋石にのせ、鏃身を中央の蓋石に立てかけるような形で出土した完形の鉄鏃（鉄鏃 1）で、もう一つは北端の蓋石の南端に主軸に直交する方向で頸部だけが置かれた（鉄鏃 2）ものである。

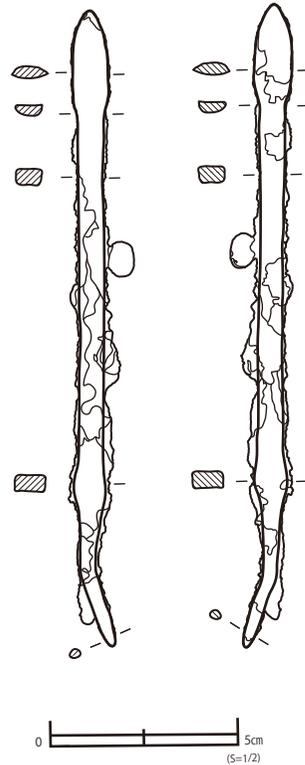
鉄鏃 1 は、全長 17cm、鏃身長さ 2.8 cm、頸部長さ 9.8 cm、茎部 4.4 cm を測る。鏃身は薄く、頸部断面は長方形、茎部断面は円形である。鉄鏃 1 は鏃身が小さく扁平で、鏃身関がナデ関であり、導入期の長頸鏃と思われる。また矢柄と鏃身を固定させるために糸や樹皮などで巻く「口巻き」部分は痕跡も含めて観察できず、鉄鏃単体で供えられていたと見られる。茎は中程から曲がっており、意図的に曲げられた可能性がある。

鉄鏃 2 は頸部だけが供えられていた。頸部の形状は鉄鏃 1 と共通しており、本来は同様の姿だったと考えられる。

（窪田磨実）



写真 45 鉄鏃 1



第 19 図 鉄鏃 1 実測図

⑥ 豎櫛

第2主体部では、南側の石棺上部で小型の豎櫛を2点検出した。検出された豎櫛の詳細は以下の通りである。

豎櫛1は、棟幅約1.6cm、棟高約1.5cmを測り、黒漆の塗布が確認できる。中央部を結束する糸が明瞭に確認できるほか、歯も一部残存している。残存状況から、櫛の製作手順は、細く割いた竹の束の中央部を糸で縛り、そこを起点として折り曲げた後に、新たに幅5mm程度まで同じく細く割いた竹で帯状に縛ったものと推測され、仕上げとして黒漆を用いたことが分かる。

豎櫛2は、棟幅約2.5cm、棟高約1.9cmを測る。こちらも黒漆の塗布が認められ、櫛歯は残存しない。豎櫛1とは異なり、中央部を結束する糸と巻縛部は確認できない。したがって、竹の束の中央部を糸で縛ることはせずに折り曲げて製作されたことは分かるが、その後の処理方法については資料の残存状況から判断することは不可能である。

製作手順の異なる2点の豎櫛がほぼ同じ場所で検出された理由は定かではない。ただし、第1主体部で検出された一部の豎櫛は重なり合っているのに対し、第2主体部で検出された2点は重なり合う状況では副葬されていなかった。

(横山 舞)

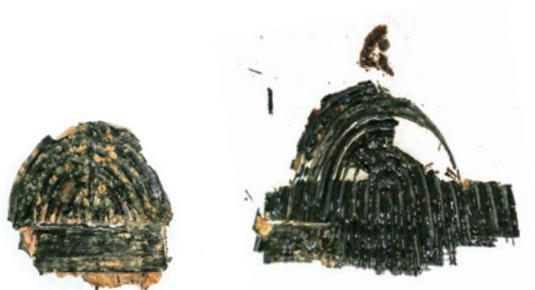


写真46 豎櫛1, 2写真



第20図 豎櫛1, 2実測図

3 墳丘上に築かれた塚状遺構からの出土遺物

灰塚山古墳後円部墳頂に礫石経柄が営まれていたことはこれまでの調査報告で述べてきた（辻他 2013、2014）。礫石経塚の調査は第4次調査で終了したが、後円部墳頂に残された樹木の根に護られる形で礫石経塚を構成する礫と土が一部残されていた。今回の調査にあたり、このような木を一部伐採したため、残されていた礫石経塚の礫と土を除去した。礫の掘りあげにあたり、慎重に観察したところ、以下の墨書礫を発見した。礫は比較的小型の川原石で、特徴はこれまでに報告した墨書礫と共通していた。



NO.1



NO.2



NO.3



NO.4



NO.5



NO.6



NO7

NO8 表



NO8 裏



NO.9



NO 1 0



NO 1 1



NO12 表



NO12 裏

写真47 墨書礫

第3章 考 察

1 第1主体部

第1主体部は古墳の主軸上に位置し、長さ8mを越える規模からみても灰塚山古墳の主たる埋葬施設だと考えられる。灰塚山古墳の全長60mを越える墳丘はまさにこの第1主体部の被葬者のために築かれたといえよう。

① 埋葬施設

掘り下げ当初の段階で粘土槨を想定していたが、粘土槨の天井部とみていた白色粘土の広がりから遺物が出土しはじめ、木棺痕跡の床面に相当することが判明した。

白色粘土は西側面から東側面下端まで延びているが、側面はシルト質の土で構成される。白色粘土は西側面から床面、東側面の下部まで伸びているだけであり、木棺が置かれる前の段階で木棺の形、規模に合わせて設置された粘土床と見ることができよう。従って第1主体部は側壁を持つ粘土床に木棺を直葬した施設といえよう。会津大津山古墳出土南棺、北棺（伊東、伊藤 1964）、本屋敷1号墳後方部木棺痕跡（伊藤他 1985）など木棺直葬で両端部を粘土で押さえる構造（第21図1～3）とは異なっているが、粘土で全面を密封する粘土槨の簡略形と理解することができるかもしれない。

福島県郡山市大安場古墳の埋葬施設は残念ながら埋葬施設の上部が削平されてしまっているため、全容は知り得ないが、報文によれば（柳沼他 1998）棺内の堆積土には白色粘土は見られず、木棺上を粘土で被覆することはなかったと考えられている。粘土床を構築し、その上に木棺を安置する構造は、灰塚山古墳第1主体部によく似ており、類似の施設である可能性を考えさせる（第21図5）。

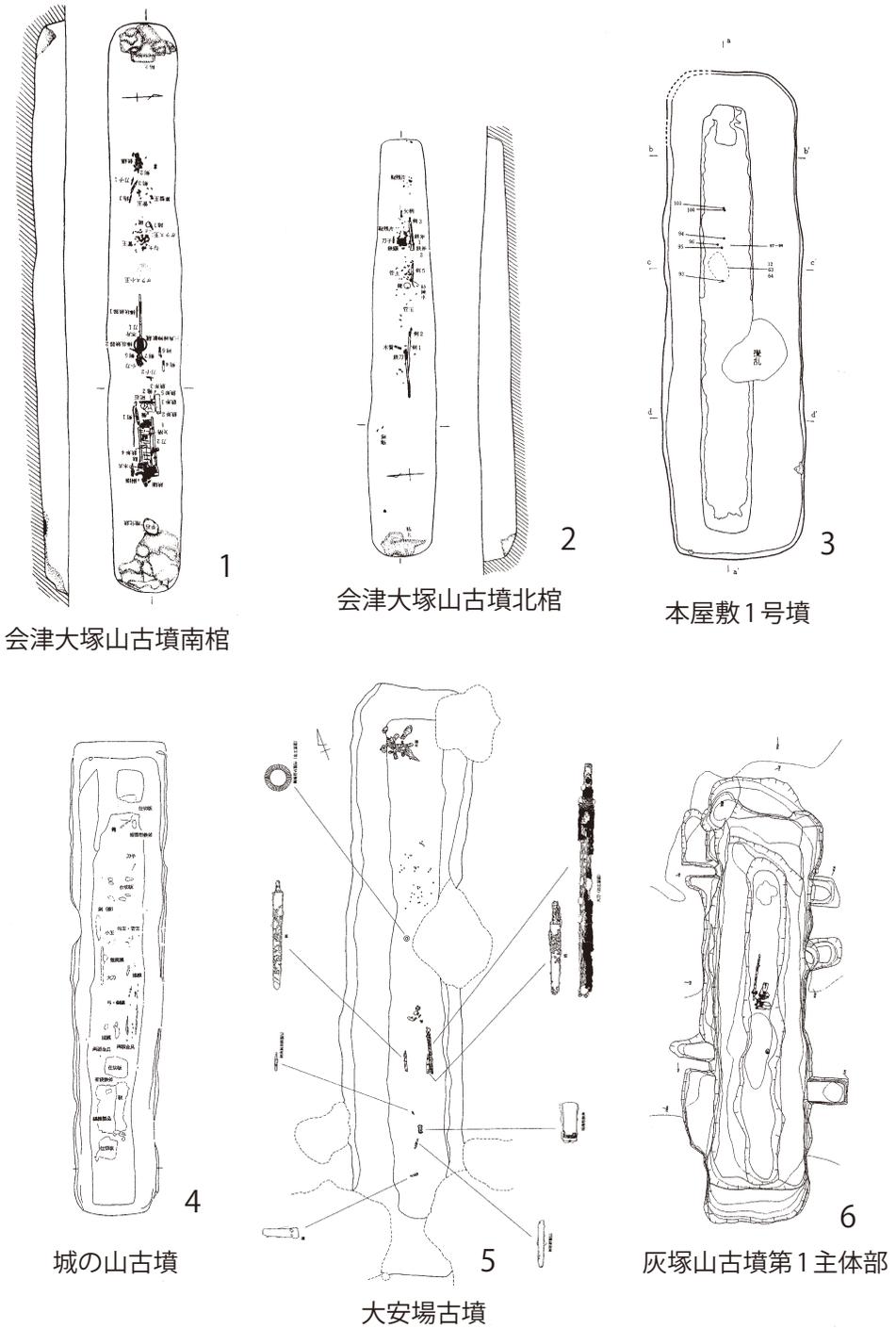
次に木棺の構造を考えてみたい。

全長8.3m、幅は1.7mを測り、全体の平面形は長方形に近い。大型の木棺である。横断面は第3図に示したように側壁は垂直に近い角度で立ち上がり、底面は平らである。底面中央のくぼみは排水のための施設で木棺の形状を反映していないと見られる。南北の端はなだらかな斜面になっており、幅を減じることはない。

長方形を呈する木棺平面形、規模は新潟県胎内市城の山古墳の埋葬施設（水澤他 2016）に近い。しかし、城の山古墳埋葬施設は底面が緩やかな弧を描き、削りぬき式の舟形木棺と考えられている。しかし、灰塚山古墳第1主体部は横断面が箱形で、削りぬき式と考えるのは難しい。

横断面形状から、第1主体部は組合せ式木棺と考えたい。箱形の中央部が南北両端の緩やかな立ち上がりに接続する形で、南北両端は舳先と艫を思わせ、全体は船の形を想起させる。古墳時代の準構造船に近い形状を想定したい。

今回の調査では、木棺の下部にある粘土層の構造、排水施設等については十分に追求することができなかった。今後の課題としたい。



第21図 木棺直葬埋葬施設比較図

② 第1主体部の時期

第1主体部の時期を考える手がかりは出土小型仿製鏡、腕飾り（ガラス玉）、豎櫛、大刀であるが、ガラス玉は成分分析を実施しておらず、大刀は保存処理前であるため十分に検討できる状況にはない。総合的な時期の検討は今後の課題として、ここでは仿製鏡、豎櫛から可能な範囲で第1主体部の時期を検討したい。

小型仿製鏡の文様は調査段階で珠文鏡かと見られたが、その後鏡背面の文様が明確になり、内区に不揃いな盛り上がりが見られることが判明した。森下章司氏から、内区の文様は獣像が変化したもので、分離式神獸鏡系（森下 1991）に入るものとのことをご教示を受けた。内区の文様を獣像の可能性を念頭に観察すると、文様には直径5mm程の円形のものから8mmの楕円形のもの、さらにその楕円形と円形が接着しくびれを持った形状のものが確認できる。さらにそれらが配される地の面には、細長い形状のわずかな突起も数箇所確認できる。楕円形の盛り上がりは獣像との関係はわからないが、くびれを持つ形状の盛り上がりには尾かと思われる細長い盛り上がりが見られ、獣像と見ることが可能と判断された。文様部分が紐痕跡や布で覆われている部分を除いて、獣像は2個観察できる。現状では神像は確認できないので、現段階ではこの鏡を「獣文鏡」と読んでおきたい。

獣文鏡は外区、内区の文様構成を含めて森下氏の分離式神獸鏡系の鏡である。この系列は4世紀末に登場し、5世紀前半まで存続すると考えられている。第1主体部出土獣文鏡はこの範囲で位置づけることが可能である。森下氏から本鏡を5世紀に前半に位置づけて問題がないとのことをご教示をいただいたことをうけて、ここでは5世紀前半に位置づけておきたい。

第1主体部から出土した豎櫛群は、40個体を越えており、大量に出土した点が特徴的である。また、次項で述べるように大型の豎櫛には棒状突起があり、その先に小型の豎櫛が取り付けられることも大きな特色である。

川村雪絵氏による集成では（川村 1999）、古墳からの豎櫛出土例は144例を数えるという。集成後の発見、追加例を加えれば全国で150基以上の古墳から豎櫛が出土していることになろう。豎櫛出土古墳の時期は古墳時代前期後半ないし末から中期にいたり、後期には残らないという。豎櫛を出土した古墳の埋葬施設を川村氏の集成によって検討すると、一部の例外を除けばほとんどが竪穴系の埋葬施設であり、豎櫛副葬古墳の時期が古墳時代前期後半ないし末から中期までという指摘は妥当であることが分かる。豎櫛の出土数は10個未満が多いが、30個を越える多量埋納14例を数え、中には150個体の出土例も報告されている。

石川県能美市下開発茶臼山古墳群第9号墳第1主体部から50個体、第2主体部から約125個体が出土している。人体埋葬に伴う豎櫛群の中で125個体は最多例である（三浦他2004）。出土豎櫛群の検討を行った三浦、長屋の両氏は、豎櫛40個体以上を出土した古墳16例を集成し、豎櫛の多量副葬された古墳は中期初頭から中期後葉に限られていること

と、帯金式甲冑が共伴する割合が高いことを指摘した（三浦、長屋 2004）。

また、大型と小型の櫛を組み合わせて葬具とする例は京都府宇治市宇治二子山古墳北墳西櫛（杉本他 1991）、兵庫県朝来郡和田山町茶すり山古墳第2主体部（岸本他 2003）等から出土しており、いずれも古墳時代中期中葉に位置づけられている。

以上の諸例から灰塚山古墳第1主体部豎櫛群は5世紀前半から中葉に位置づけられる。

第1主体部の時期は出土鏡、豎櫛群の検討から現状では5世紀前半から中葉と考えておきたい。（辻 秀人）

2 第2主体部

第2主体部は調査当初、木棺が粘土櫛で覆われた埋葬施設か、古墳の主たる被葬者と推測されている第1主体部の被葬者への供物を納めた施設の可能性が考えられた。しかし、調査を進めていく過程で、第2主体部は石棺上部を石組みで覆い、その上をさらに粘土で密閉するという構造をもった埋葬施設であることが判明した。

① 埋葬施設の構造

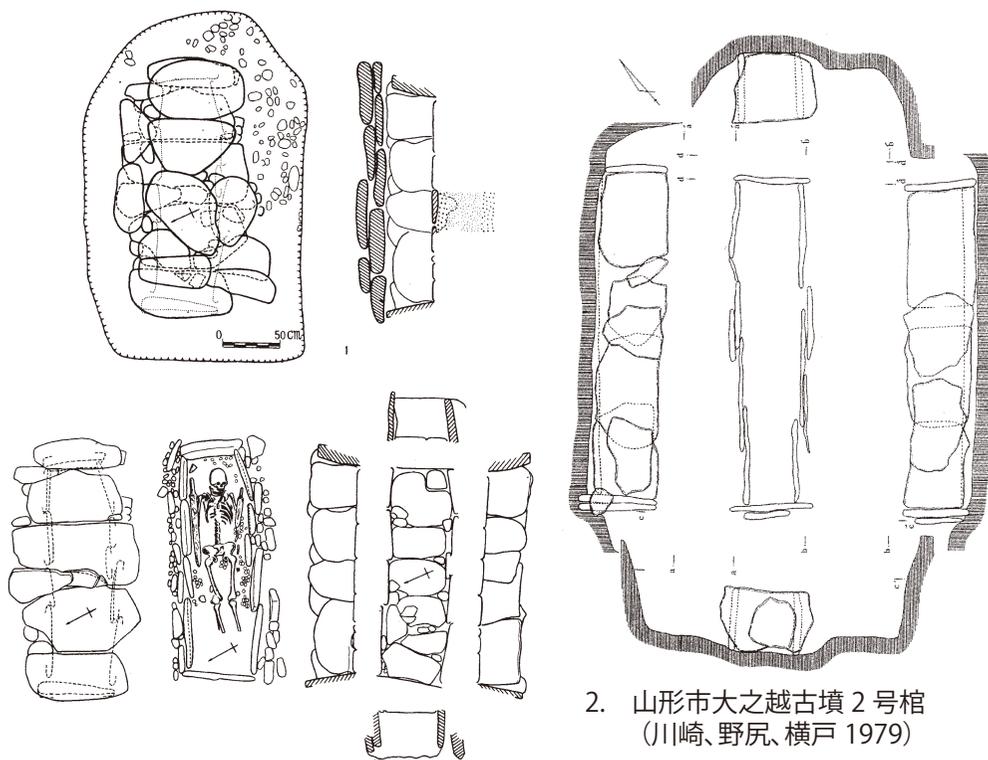
調査の現段階で第2主体部の構造をまとめると、埋葬部は板石を組み合わせて構築した石棺で、その上を板石を組み合わせた石組み遺構で覆い、さらに最上部を厚さ20～30cmの粘土で覆って密封する構造であった。未調査だが、石棺の周囲は粘土が充填されている様子が観察できる。きわめて厳重で、石棺を石組みと粘土で二重に覆う、いわば石棺の粘土櫛とも言うべき構造を持っている。

このような構造の箱式石棺は少なくとも東北地方には類例がない。

東北地方ではこれまで多くの箱式石棺が出土しているが、多くは福島県浪江町本屋敷3号墳（第22図3）のように箱式石棺を墓壇内に直接据え付けるものである。

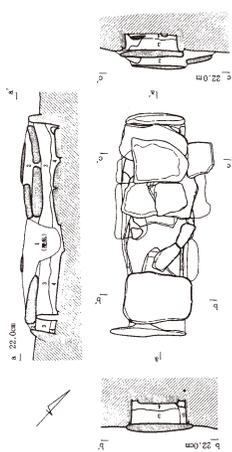
中で、第22図1に示した浪江町上の原3号墳1号石棺は二つの点で類似した要素を持つ。一つは棺の上面に粘土の被覆粘土が確認されていることである。報告文（伊東 1979）によれば「粘土は蓋石上面に貼られていた」とのことである。もう一つの類似要素は石棺の蓋石が二重になっている点である。「蓋石は二重であるが、下石は6枚で石室の上にかけてられ、その隙間を覆うように6枚の上石置かれ」ている。

上の原3号墳1号石棺は蓋石を覆う粘土の存在と蓋石の上にさらに石を重ねる構造に灰塚山古墳第2主体部との共通点が見られる一方、粘土の覆いは蓋石上だけに限られるようであり、蓋石の二重構造も蓋石部分にとどまり、灰塚山古墳第2主体部とは完全に同じ構造とは言えない。ただし、石棺を粘土と板石の二重構造で保護する意識には共通する意識を見ることができるようと思われる。なお、詳細な図面は公表されていないが、会津坂下町長井前ノ山古墳では石棺の合掌状をなす天井石を覆って「粘土及大小の川原石と角礫によって棺全体がカマボコ形に被覆され」と報告されている（菊地 2002）。長井前ノ山古墳例は灰塚山古墳第2主体部により近いのかもしれない。ただし、灰塚山古墳例と同様に棺側壁の外側に粘土が及ぶかどうか今後の報告に待ちたい。

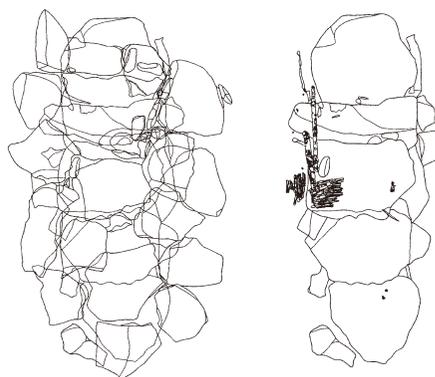


1. 浪江町上の原3号墳 (伊東 1979)

2. 山形市大之越古墳2号棺
(川崎、野尻、横戸 1979)



3. 本屋敷3号墳 (伊藤他 1975)



石組み遺構

石棺

4. 灰塚山古墳第2主体部

第22図 箱式石棺石棺比較図

② 埋葬後の供献儀礼

石棺の蓋石の上から多量の鉄製武器と豎櫛が出土した。すでに述べたように、石棺中央蓋石西側付近にはまず、大刀と鉄剣（槍、戟？）が置かれ、次に石棺主軸方向に直交して30本程度からなる矢の束と、主軸に平行方向で同じく30本程度の矢の束が置かれる。また前後関係は不明だが、石棺の南端蓋石の上に豎櫛2点が、中央蓋石の南東隅に鉄鏃1点、北端蓋石の南よりに鉄鏃頸部1点が主軸と直交して置かれている。多くの鉄製武器が出土した石棺中央蓋石は、石の重なりから見て最後に置かれており、被葬者の遺体が見えなくなった段階で意識的に置かれたと見られる。

このような状況から見て、多量の武器と豎櫛は被葬者を石棺に埋葬終了後に行われた供献の儀式で使われ、残されたと考えられる。粘土と蓋石で嚴重に保護され、内側を朱彩された石棺の様相も合わせ考えると、これらは死せる王者を武力と豎櫛の霊力を持って寄り来たる悪霊から被葬者を護るという「辟邪」の思想を具体的に実現したものと考えられよう。

遺体の埋葬時に儀式が執り行われていることはこれまでの調査例から知られているが、埋葬後の儀式の存在を明確に示す例は寡聞にして知らない。少なくとも東北地方では初めての確認例だろう。今後全国的に類例を検討する必要がある。

ところで、山形市大之古墳2号棺（第22図2）蓋石上から劍菱形杏葉等馬具、帯飾金具が出土している（川崎、野尻、横戸 1979）。これらの出土状態が不明であることや、出土したのが馬具を中心とする遺物群であることなど、灰塚山古墳第2主体部例と同様に見ることが可能か否か今後検討する必要がある。

③ 第2主体部の時期

第2主体部の時期を考える材料は、第1主体部との前後関係、埋葬施設の検討、出土遺物の所属時期である。

まず、第1主体部と墓壙の切り合い関係があり、第2主体部が新しいことが判明している。第1主体部は先述したように5世紀前半から中葉と考えられた。また、東北地方では箱式石棺を埋葬施設とする古墳の所属時期はおおよそ5世紀から6世紀にかけてである。

次に出土遺物では鉄鏃の編年研究が進んでおり、年代を考えることが可能である。第2主体部から出土した鉄鏃はいずれもナデ関をもつ長頸鏃で、水野敏典氏編年で中期第3段階（水野 2013）に位置づけられよう。

以上を総合して、第2主体部は第1主体部に後続し、5世紀中葉から後半の時期に位置づけられよう。

④ 今後の課題

今回の調査は、第2主体部石棺蓋石の上面までにとどまった。来年度の調査では、石棺の蓋石を取り上げ、石棺内部の様相を明らかにする予定である。今回の調査では石棺据え方や充填粘土の範囲も不確定であるため、今後は墓壙ライン、石棺据え方、充填粘土の範囲を確定させ、最終的には第2主体部の構築手順も明らかにしていきたい。（横山 舞）

3 墳丘

灰塚山古墳は、測量調査、第1次調査の成果から（福島県博 1987、辻他 2012）、南北方向の丘陵を整形し、その上に盛り土をして築かれた前方後円墳であることが判明している。全長 61.2 m、後円部直径 33.2 m、後円部高 5 m、前方部長さ 27.6 m、前方部前端幅 23 m を測る。調査前には丘陵頂部にある立地、墳丘の構築方法、前方部が比較的長く、前端幅が狭い形状などを総合して、灰塚山古墳は前期古墳の可能性が高いと考えていた。また、前方部高さは 4 m で、前方部が高い特徴があると見ていた。

しかし、前項までの検討で、灰塚山古墳では 5 世紀前半ないし中葉に主たる埋葬が行われ、5 世紀後半にも新たな埋葬が行われていることが判明した。いずれの埋葬部も墳頂平坦面からさほど深い位置にはないことを考慮すると、下層に埋葬部の存在する余地もなしとはしないが、まずは中期古墳と考えることができよう。改めて灰塚山古墳をこれまで知られている中期古墳との比較をしてみたい。

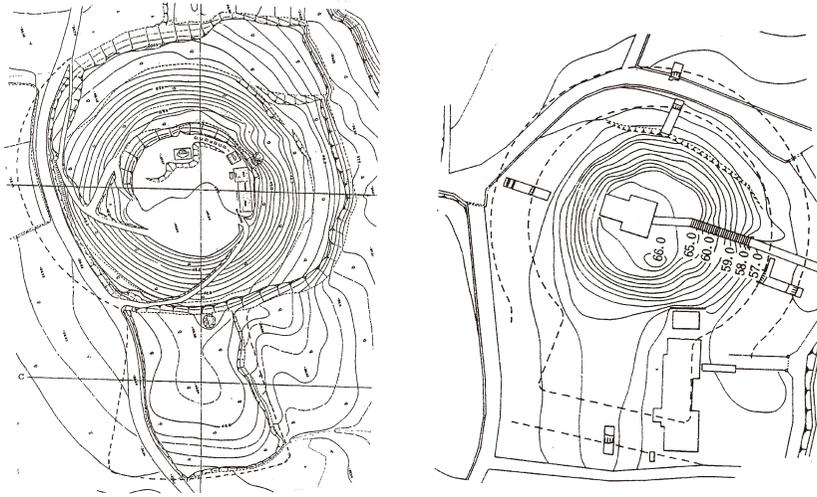
東北地方では前期に比べて中期に大型古墳の築造は少ない。特に中期前半に位置づけられる古墳はわずかで（辻 2011）、浪江町堂の森古墳（福島県博 1987）、南相馬市太田前田古墳、会津坂下町長井前ノ山古墳（菊地 2002）などを挙げうるに過ぎない。これらはいずれも全長 30 m を越える程度の前方後円墳である。灰塚山古墳の築造年代を 5 世紀前半とすれば、この時期の東北地方最大の前方後円墳といえよう。

中期後半に至り、東北地方では 40 m を越える比較的大型の前方後円墳が広く築かれるとともに、大型古墳の周囲に円墳で構成される古墳群が数多く出現する。

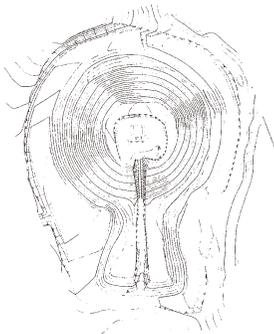
第 23 図に示したように、中期後半の最大規模の前方後円墳は宮城県名取市名取大塚山古墳（恵美、菅井 1990）で、全長 90 m を測る。他に全長 50 m を越える大型古墳には宮城県色麻町念南寺古墳全長 56 m（古川、高橋 1998）、仙台市兜塚古墳全長 72 m（手塚、加藤 1989）、白石市瓶が盛古墳全長 56 m（白石市教委、1972）福島県国見町国見八幡塚古墳全長 66～68 m（国見町 1977）、山形県山形市菅沢 2 号墳（柏倉、阿子島、加藤、江川 1987）円墳直径 50 m がある。第 2 主体部が営まれた 5 世紀後半段階では灰塚山古墳は東北地方で第 4 位の大型古墳になる。

この時期の大型墳は全体的に前方部が短く、小さい傾向があり、前方部が極端に低く、後円部との比高差が大きいタイプ（名取大塚山古墳、念南寺古墳、裏町古墳、瓶ヶ盛古墳、角塚古墳等）と前方部が短く、盾形周溝を持つ帆立貝式古墳（兜塚古墳、国見八幡塚古墳、福島市八幡塚古墳等）がある。また、多くの古墳に窯で焼成された埴輪が伴い、当時の最新の土器である須恵器が出土する例も多い。内部主体が判明している古墳は少ないが、念南寺古墳では家形石棺が用いられ、裏町古墳では川原石積竪穴石室が採用されている。

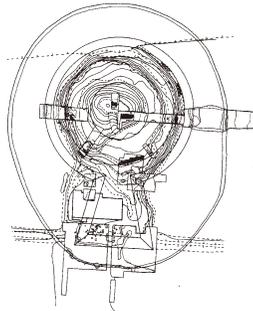
以上のような東北地方の中期古墳の類例と比較すると、灰塚山古墳は墳丘形態では中期古墳と類似する要素は少なく、前期古墳との共通性が認められる。埋葬施設では第 1 主体部の長大な木棺直葬の類例はなく、第 2 主体部の石棺は大型古墳ではなく、小型の円墳な



1. 名取大塚山古墳 (恵美、菅井 1990) 2. 国見八幡塚古墳 (国見町 1977)



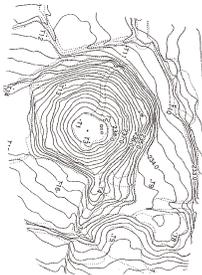
3. 念南寺古墳
(古川、高橋 1998)



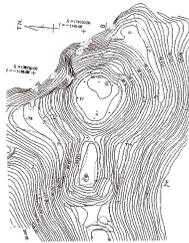
4. 角塚古墳
(朴沢他 2002)



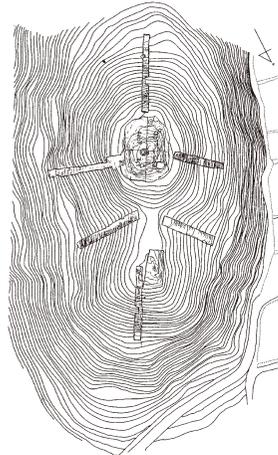
5. 裏町古墳
(岩淵他 1974)



6. 庚申壇古墳
(菊地他 2008)



7. 長井前ノ山古墳
(菊地 2002)



8. 灰塚山古墳

第23図 東北地方中期古墳比較図

どに採用される箱式石棺に類似する要素がある。

灰塚山古墳の墳丘形態を従来の中期古墳に系譜を求めることは困難で、今後その位置づけを追求する必要がある。

(辻 秀人)

4 小型仿製鏡の位置づけ

灰塚山古墳第1主体部出土鏡は、森下氏分類の分離式神獸鏡の系列に属する鏡だと考えられた。ここでは東北地方の古墳から出土した小型仿製鏡を概観し、灰塚山古墳出土鏡の位置づけを考えてみたい。

第2表は東北地方出土小型仿製鏡の集成である。出土が不明瞭である例もあるが、おおむね小型仿製鏡の出土状況を把握することができる。

第2表によれば古墳時代前期の確実な遺構からは珠文鏡4面、内行花文鏡3面が出土している。また、中期古墳では、重圏文鏡1、乳文鏡1、珠文鏡1、内行花文鏡1、獸形鏡1、擬文鏡が出土している。前期、中期を通して珠文鏡5が最も多く、次いで内行花文鏡4が出土している。

灰塚山古墳第1主体部出土鏡はかなり変形された獸文が主文様である。東北地方出土鏡の中にも獸像をモチーフとするお花山22号墳出土獸形鏡(渋谷、長橋 1985)、会津大塚山古墳南棺出土四獸鏡(伊東、伊藤 1964)があるが、いずれも灰塚山古墳出土鏡とは主文の形状、圏線と内外区の文様構成に大きな違いがあるなど、文様の系譜を異にしており直接の関係を見いだすことができない。

灰塚山古墳出土鏡は東北地方で比較的多い珠文鏡、内行花文鏡とは親縁関係を認めることは困難である。

森下章司氏のご教示によれば分離式神獸鏡系列は、宮崎県下北方5号地下式横穴、三重県二ノ谷古墳、岐阜県龍門寺15号墳などに類例があり、この系列の類例の多くは西日本に分布しているという。

以上のような状況を踏まえて、今後視野を広げて類例を検索し、入手経路についても新たな検討が必要となるだろう。

(鈴木舞香)

東北地方古墳時代鏡 集成

No	県名	遺跡名(発見場所)	所在	鏡式名	直径	種類
1	岩手	五郎屋敷	金ヶ崎村	五鈴鏡	8.5	小型? 製鏡
2		上根子熊堂古墳	花巻市	五鈴鏡		? 製鏡
3	宮城	日光山古墳群	大崎市	変形鋸歯文鏡(四獣形鏡)	7.3	小型? 製鏡
4		香取神社境内(御山古墳)	色麻市	重圏文鏡?	6.7	
5		裏町古墳	仙台市	乳文鏡(珠文鏡)	9.1	小型? 製鏡
7		吉ノ内1号墳第1主体	角田市	振文鏡	7.5	
8		狐塚古墳	丸森町	六鈴六獣形鏡	10.8	
9		台町20号墳	丸森町	六鈴七獣鏡	10.5	小型? 製鏡
10				六狐内行花文鏡	11.2	
11		入の沢遺跡	栗原市	珠文鏡	5.6	小型? 製鏡
12				珠文鏡(区画入り)	8.2	小型? 製鏡
13				内行花文鏡	9	小型? 製鏡
14				重圏文鏡(櫛歯文鏡)	5.5	小型? 製鏡
		郡山遺跡	仙台市	不明	9	
15	山形	お花山1号墳1号棺	山形市	振文鏡	9.5	
16		お花山22号墳	山形市	獣形鏡(振文鏡)	9	
17		馬洗場B遺跡	山形市	内行花文鏡	8.2	小型? 製鏡
18		下小松古墳群薬師沢支群第143号墳	川西町	鋸歯文鏡	4.9	
19	福島	会津大塚山古墳(南棺)	会津若松市	変形四獣鏡	9.5	小型? 製鏡
20		会津大塚山古墳(北棺)	会津若松市	振文鏡	10.3	小型? 製鏡
21		会津田村山古墳群(糠塚古墳)	会津若松市	内行花文鏡	11.2	小型? 製鏡
22		会津田村山古墳群(灰塚古墳)	会津若松市	内行花文鏡	9.8	小型? 製鏡
23		青木鏡塚古墳	会津若松市	(不明)		
24		土橋古墳	伊達市	珠文鏡	7.3	
25		愛宕山古墳(愛宕塚古墳)(伝)	本宮市	五鈴鏡	13	? 製鏡
26		会津坂下町(伝)	会津坂下町	珠文鏡	8.5	小型? 製鏡
27		森北1号墳	会津坂下町	珠文鏡(放射状区画珠文鏡)	8.4	小型? 製鏡
28		表西山横穴古墳群30号横穴	相馬市	珠文鏡(乳文鏡)	破鏡	
29		中田1号横穴前庭部壇	いわき市	珠文鏡	6.4	小型? 製鏡
30		横山台古墳	いわき市	四鈴鏡	6.1	
31		高阪(坂?)古墳2号墳	いわき市	鈴鏡		
32		いわき市横穴	いわき市	五鈴鏡	径2寸8分	? 製鏡
33		上平野・富岡横山古墳群	いわき市	五鈴鏡	8.5	小型? 製鏡
34		高野峰山祭祀遺跡	白河市	珠文鏡	4.6	小型? 製鏡
35		石川町(伝)	石川町	五鈴鏡	13	? 製鏡
36		桜井古墳群上洪佐支群7号墳	原町市	珠文鏡(二重)	8.7	小型? 製鏡
37		塚之目古墳	国見町	素文鏡		? 製鏡
38		灰塚山古墳	喜多方市	珠文鏡	9.0	小型? 製鏡
39		山崎横穴古墳	喜多方市	珠文鏡?		
40				(不明)		
41		飯尾町鏡塚古墳	飯尾町	(不明)		
42		十五壇原古墳	高田町	(不明)		

第2表 東北地方古墳時代小型仿製鏡一覧

参考文献:『日本における古鏡発見地名表』(東北地方)福岡 1977
『倭製鏡一覧』立命館大学考古学論集刊行会 2011
『桜井古墳群上洪佐支群7号墳発掘調査報告書』原町市教育委員会 2001
『会津田村山古墳』田村山古墳周溝調査報告刊行会 1981

5 豎櫛を用いる埋葬儀礼について

第1主体部で出土した豎櫛群は総数50点を越え、遺存状態がきわめて良好である。また、大型、小型の豎櫛が組み合わせて使われた様子が観察され、その組合せ構造を知ることができる希有な資料でもある。

ここでは大小の豎櫛を組み合わせた葬具の構造を復元し、次ぎに葬具を用いて行われた葬送儀礼について考えてみたい。

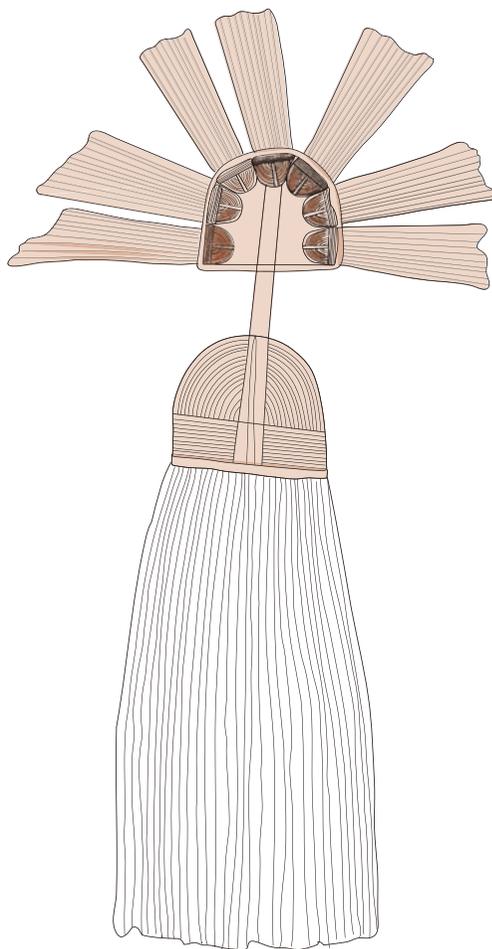
(1) 豎櫛組み合わせ葬具復元

豎櫛の中には「棒状突起」を持ち、小型櫛と組み合わせて葬送の道具として用いられることがあることが川村雪絵氏により指摘されている（川村 1999）。また、京都府宇治二子山古墳（杉本他 1991）、兵庫県茶すり山古墳（岸本他 2003）、長野県七瀬3号墳第2主体部（滝沢他 1989）等では大小豎櫛を組み合わせた葬具の一部が確認されている。

灰塚山古墳第1主体部出土例では、大小豎櫛の構成及び位置関係は明瞭であるが、棒状突起と小型豎櫛群との連結構造が不明瞭であったため、上記の出土例を参考に連結構造を補った上で葬具の復元を行った（第24図）。

第24図は第1主体部で発見された豎櫛群の中で最後に置かれた資料から復元した全長20cm、棟部4.5cm、櫛歯長さ15.5cmを測る大型櫛に棟部中央に棒状突起を加えたものである。突起の先に横棒と弓状に湾曲する棒を組み合わせ、湾曲する棒に7個の小型櫛をくくりつけた姿である。小型櫛は全長6cm、棟部1cm、櫛歯長さ5cmを測る。くくりつけられる小型櫛の数は6個の例もあるが、本例もふくめ、多くは7個であるようだ。葬具全体は全長31cm、最大幅は16cmを測る。

第24図では、復元で使用した出土例が赤漆で彩色してあるために朱彩で表現したが、他は黒漆塗りであり、特殊な例であるかもしれない。



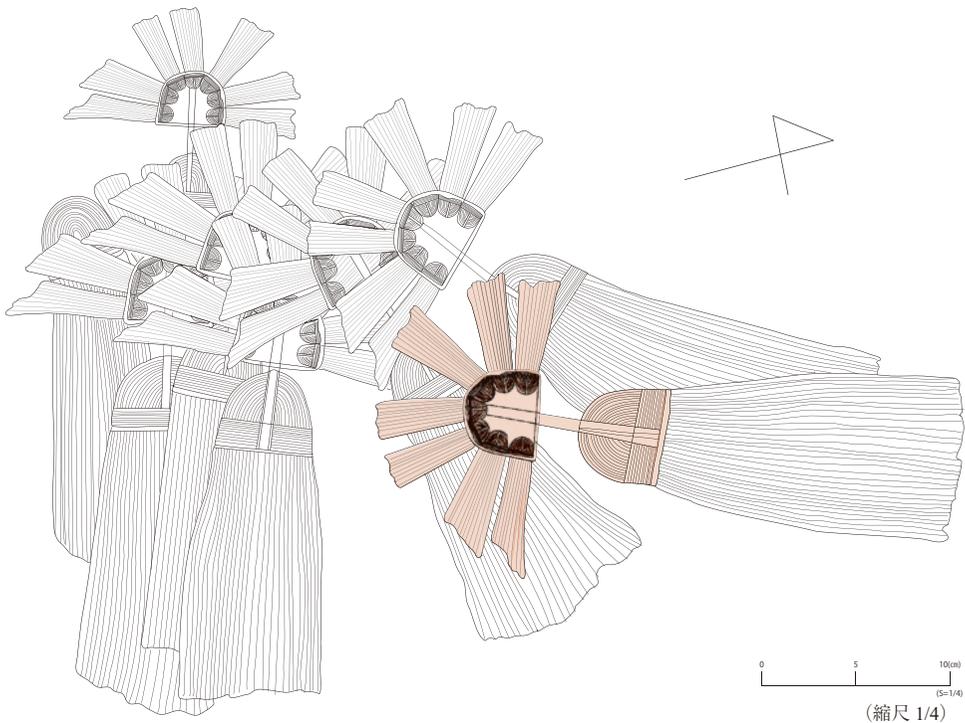
第24図 豎櫛組み合わせ葬具復元

(2) 灰塚山古墳第1主体部竪櫛群供献状況の復元

灰塚山古墳第1主体部で出土した竪櫛群は、ある程度大型竪櫛と小型竪櫛との関係が想定できる状況にある。しかし、相互に重複関係にあることや、小型竪櫛の位置に乱れがあることから正確な組み合わせ関係には不明なところも多い。

ここでは、前項で復元した葬具の姿をもとに第1主体部出土された竪櫛群がどのような姿で供献されたのか復元を試みた。ただし、関係性の不明なものに関しては図面には載せていない。

第25図に示したように、灰塚山古墳第1主体部出土竪櫛群には、少なくとも6個体の棒状突起を持つ大型竪櫛があり、これらがすべて小型竪櫛と組み合わせて葬具として用いられていたことが分かる。ただし、連結する小型竪櫛群は7単位存在し、調査途中で出土した大型竪櫛があることから本来は7個の葬具があった可能性が高い。葬具1単位は大型竪櫛1、小型竪櫛7で構成されるため、第1主体部には最大で、最初に置かれた単独の大型竪櫛1と8個の葬具(竪櫛64)で合計65個の竪櫛が供献されていたとみることができる。



第25図 竪櫛供献状態復元

(3) 供献埋納のプロセス

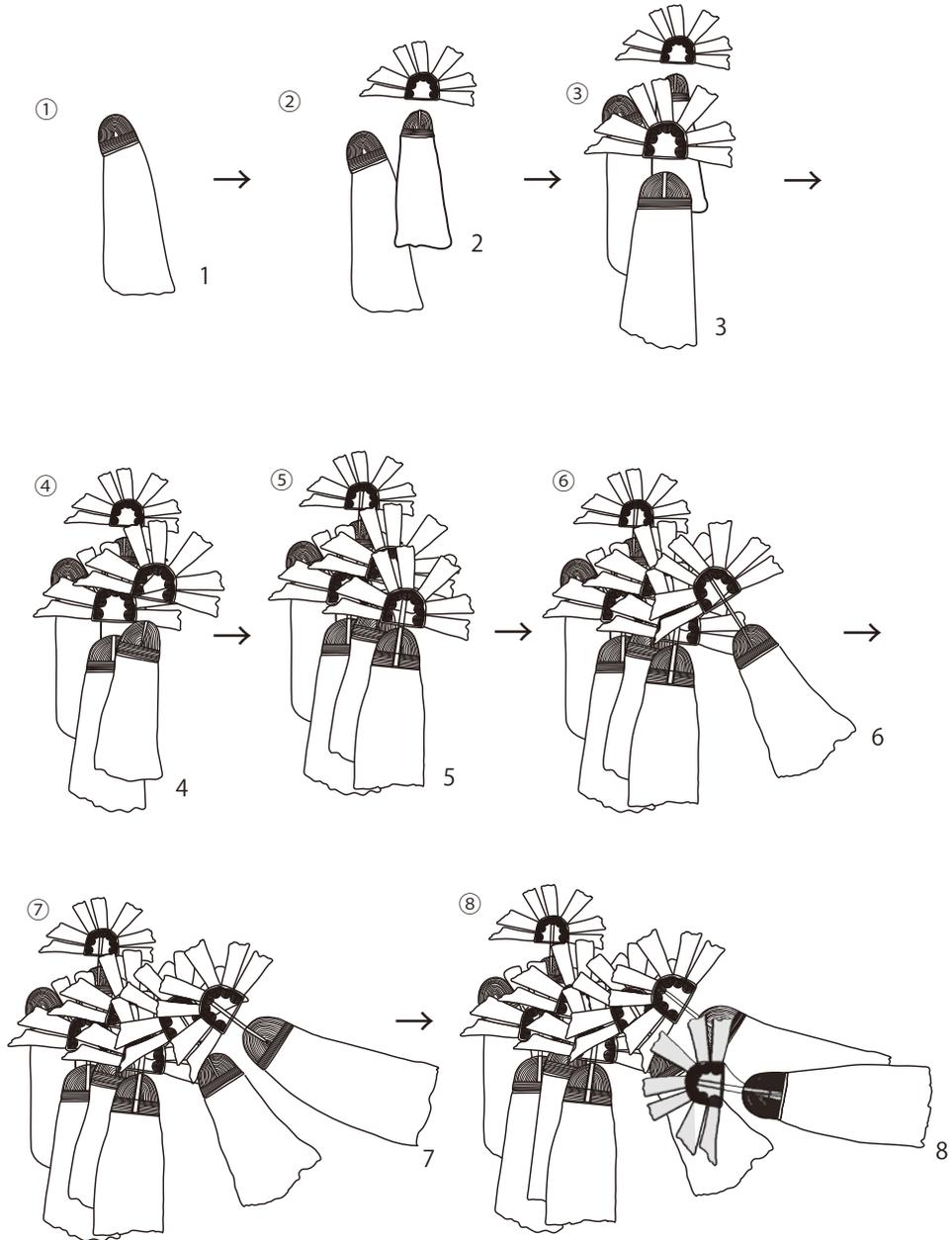
第25図に明らかなように、各個体には上下関係があり、供献された順番を知ることができる。そのプロセスを第26図に示した。

- ① 最下層は南側の単独の堅櫛1である。最初に棟を西に向け、遺体に直交する方向に置かれる。棟部は棺のほぼ中央付近にあたる。
- ② やや北にずれた位置で大型櫛の櫛歯の端が単独の大型櫛にややかかる位置に葬具2を置く、大型櫛の棟の上部はやや西側にずれる。葬具2の方向は単独堅櫛1とほぼ同じ方向である。
- ③ 葬具3を単独堅櫛1と葬具2の間の位置に置く。小型堅櫛連結部が単独堅櫛棟部よりやや東側に位置し、葬具全体は東側に寄る位置に置かれる。方向は葬具2とほぼ揃えている。
- ④ 葬具4を葬具3よりもやや北、と東にずらした位置に置く。小型堅櫛連結部一つ分西にずらして置かれる。方向は葬具3とほぼ揃えている。
- ⑤ 葬具5を葬具4よりもやや北、東にずらした位置に置く、大型堅櫛の棟部は葬具3よりもわずかに東側にずらしている。方向は葬具4とほぼ揃えている。
- ⑥ 葬具6を葬具5の北側に置く。葬具5とは小型堅櫛連結部の櫛歯部分がわずかに重複し、前後関係は分かるが、大きな重複はない。方向は葬具2～5に対して東で20度前後北に振れている。棟部の先端は南西に近い方向に向く。
- ⑦ 葬具7を葬具6の北側にはほぼ平行方向に置く。葬具6とは小型堅櫛連結部の櫛歯部分がわずかに重複し、前後関係は分かるが、大きな重複はない。方向は葬具6よりもさらに東で北に振れる。
- ⑧ 最後に葬具8を葬具6、7の上に置く。小型堅櫛連結部が葬具6、7の棟部に重なり、葬具8の棟部は最も北に位置する。方向は東でさらに北に振れ、ほぼ棺長軸方向に近く棟部が南を向く。

以上のプロセスをまとめると以下のように説明できる。

最初は単独大型堅櫛1が置かれ、その後2～5の四つの葬具が方向を同じくして順に置かれる。置かれる際にはいずれも少しずつ位置をずらして、完全に重なることがないように配慮されている。6～8の北の一群は南の1～5の一群とはやや北に離れた位置で方向を斜めに変えながら、順におかれていく。南の一群と同様に葬具6～8は方向を変え、少しずつ位置をずらして、完全に重なることがないように配慮されている。最後に置かれる葬具8は赤漆で朱彩されていることから特別な意味が込められていると思われる。

このようなあり方は、単に大量の堅櫛を副葬したと見るよりは埋葬の過程の中で堅櫛、葬具を供献する儀式が執り行われたと考える蓋然性が高いことを示しているだろう。遺体埋納過程の供献儀礼が明らかになったことは、古墳の埋葬過程を考える上で重要な視点を提供することになるだろう。



第26図 第1主体部縦櫛供献プロセス

(4) 遺体との位置関係と埋納方法

縦櫛の出土例は全国的に広くみられ、150を越す古墳埋葬部等から発見されている。出土の仕方は多岐に渡っており、川村氏は大きく4つに分類している(川村1999)。ここでは灰塚山古墳第1主体部出土縦櫛の出土状況の類似例を挙げ、縦櫛供献の意味について考えていきたい。

灰塚山古墳第1主体部では、竪櫛群が太刀と近接して棺の中央部から出土している。第3図から分かるように太刀の切っ先が北方向を向いており、南からは鏡とガラス製腕飾りが出土している。切っ先の向き、他の出土遺物との関係から、被葬者は頭位を南に埋葬されたと考えられる。その際、竪櫛群は遺体の体の上（胸の位置）に置かれたものとみることができると考えられる。

灰塚山古墳第1主体部では上記のようなプロセスで、遺体の胸の位置に竪櫛が順々に置かれていったことが分かる。その類例として、以下の遺跡が挙げられる。大阪府高槻市土保山古墳からは棺内外から計58点の竪櫛が出土している（高槻市教委 1960）。その中でも遺体の頭部付近から出土した7点については、遺体の胸の位置に置かれたものと推測される。櫛歯は腐朽しているが、ムネの方向が一方向に揃って検出している。また、山形県米沢市戸塚山第137号墳では、遺体の右上腕骨に付着するように3点重なって出土している（米沢市教委 1983）。おそらくは元々胸の位置ないし体の上に置かれていたものが遺体の腐朽と共に落ちたものと思われる。いずれの遺跡も装具と思われる形態を成したものは出ていないが、埋納位置やその意味については灰塚山古墳と同様のことが言えると考えられる。

以上の出土竪櫛例をまとめると、遺体の上に方向を揃えて、少しずつずらして重なるように竪櫛が1つずつ置かれていったということが分かる。体の上に置かれたと判断できる遺跡は多くはないが、灰塚山古墳出土竪櫛群と同様の遺体埋納に伴う供献の儀式が、各地でも行われていた可能性がある。

(5) まとめ

灰塚山古墳第1主体部では遺体を棺に納めた後、竪櫛と竪櫛を組み合わせた葬具を上記のようなプロセスで1つ1つ遺体の胸の位置に供献していったと考えられる。竪櫛の出土についてこれまでは、棺の中にばら撒かれた、或いは粘土槨に塗り込められた例が知られているが本例のように1つ1つ丁寧に「置いていく」という供献儀礼の一端を担っている例も見られる。今後竪櫛を使う供献儀礼が普遍的な広がりを持つか否か検討する必要があるだろう。

竪櫛埋納には寄り来る悪霊から遺体を守るといった呪術的な意味を認めることができるだろうが、供献儀礼の意味するところは類例の探索を行いさらに追求される必要があろう。

なお、今回の葬具の復元を通して、棒状突起と小型竪櫛の存在が組み合わせ式の葬具の存在を示すことが明らかになった。木沢直子氏により同様の葬具が韓国にまで類例があることが明らかにされており、このような葬具が倭国内から韓半島にいたるまで広がっていることが明らかになった（木沢 2014）。従来の出土例の再検討により、葬具の存在と葬具を用いた儀礼の検討が可能になったことは大きな成果だったと考えている。

(相川ひとみ)

ま と め

今年度の調査では、第5次調査までで位置が判明していた第1主体部、第2主体部の掘り下げを実施した。

第1主体部では、粘土床上に設置された長大な木棺痕跡を確認した。組合せ式で舟形を呈する長大な木棺と推定され、現状では類例を求められない。床面から小型仿製鏡、ガラス製腕飾り、多量の豎櫛、大刀が乱されない状態で出土した。鏡の位置、大刀の切っ先方向から、きわめて異例であるが南西に頭を向けていると推定された。多量の豎櫛には大小があり、組合せて葬送の道具として用いられた様子が明らかにされた。豎櫛は被葬者の胸の位置に順次おかれたと見られる。遺体を棺に安置した後に組み合わされた豎櫛を何度も供献する埋葬時の供献の儀式が存在することを示す重要な発見であった。出土遺物の系譜、時期はそれぞれに今後も検討する必要があるが、現段階では5世紀前半から中葉にかけての時期を想定しておきたい。

第2主体部では確認されていた舟底状に盛り上がっていた粘土を掘り下げ、粘土層の下部に板石による石組み遺構を発見し、さらにその下層に板石で構築された石棺を検出した。石棺を石組みで覆い、その上に粘土で密封する構造はこれまで少なくとも東北地方では類例がない。管見の限りでは全国的にも例を見つけれられていない。さらに石棺の側壁の外側にも粘土が充填され、もし、石棺の底石の下に粘土があるようであれば、石棺を粘土でくるむきわめて珍しい構造である可能性がある。今後の調査で明らかにしたい。石組み遺構の下、石棺の蓋石上から多量の鉄製武器が出土した。特に石棺中央部の蓋石上の西側から大刀、剣（槍、戟?）、30本ほどの矢の束2束が発見された。これらは整然と置き並べられており、石棺内に遺体を埋葬し、蓋を被せ終わった段階で供献されたと見られる。被葬者の埋葬から棺の埋め戻しに至るまで各段階で様々な儀礼が執り行われたと見られるが、本例は被葬者を棺に埋納後行われた儀礼の様子を良く表す大変貴重な事例となった。出土遺物の検討は今後の課題であるが、組合せ式の戟が存在する可能性があり、被葬者の性格を考える上で重要な要素となるだろう。矢の束を構成する鉄鏃は長頸鏃であり、切り合い関係から第1主体部よりも新しい第2主体部の年代は5世紀中葉から後半に位置づけしておきたい。

灰塚山古墳は調査当初前期古墳と考えていた。しかし、上述のように第1、第2主体部のいずれも5世紀代に位置づけられ、中期古墳であることが判明した。墳丘は第1主体部の時期には築造されていたと考えられる。東北地方において同時期と見られる古墳は数少ないが、現状で全長61.2mの規模はこの時期の東北最大である。当然会津盆地でも最大の古墳で、会津盆地北部に拠点をおき、広域を支配した王者の墓とみることが可能であろう。これまで筆者も含めて古墳時代中期には会津盆地に有力な首長は存在しないのではないかと考えてきた（辻 2006）。しかし、灰塚山古墳が中期に位置づけられたことで、従

来の理解が通用しなくなった。少なくとも会津盆地の北部には会津坂下町長井前ノ山古墳、喜多方市灰塚山古墳があり、有力な勢力が存在することが明らかになったのである。第2主体部で発見された豊富な鉄製武器は灰塚山古墳の主が当時貴重だった鉄製品を潤沢に入手できる状況にあったことを示している。このような状況を踏まえて、会津盆地、ひいては東北地方の古墳時代中期社会像を新たに構築することが新たに重要な課題となったと考える。

また、灰塚山古墳が5世紀中葉から後半にかけても埋葬が存続していることが判明した。灰塚山古墳からほど近い喜多方市古屋敷遺跡は、調査の結果5世紀後半から6世紀初頭に営まれた大規模な豪族居館であることが判明し、国史跡に指定されている(和田、植村、菅 1999)。灰塚山古墳の第2主体部の埋葬は、まさに古屋敷遺跡の豪族居館が営まれていた時期にあたる。灰塚山古墳の規模は古屋敷遺跡で発見された豪族居館にふさわしく、居館の主の墓所であると考えられよう。

今回の調査では第1主体部の棺内精査と第2主体部の検出、供献された鉄製武器の取り上げに終始した。第1主体部の棺下層構造の調査、第2主体部石棺内の調査、箱式石棺等残された課題は多い。今後は残された課題を解明するため調査を進めていきたいと考えている。

謝 辞

灰塚山古墳の調査の遂行にあたり、田部成彦新宮区長をはじめ新宮区の皆様、地元慶徳地区の皆様、芳賀忠夫教育長をはじめ喜多方市教育委員会の皆様にはご支援をいただきました。また、近輝夫、ノリ子ご夫妻には宿舎のご提供をいただき万端のお世話をいただきました。皆様に心から感謝申し上げます。

本学歴史学科熊谷公男先生が今年度で退官されます。25年にわたってご指導いただきましたことに心から感謝申し上げます。ご健康に留意され、ますますのご活躍を祈念いたします。

(辻 秀人)

引用文献

- 高槻市教育委員会 1960 『土保山古墳発掘調査概報』 高槻叢書第14集
- 伊東信雄、伊藤玄三 1964 『会津大塚山古墳』 会津若松史会津若松市編纂委員会
- 白石市教育委員会、1972 『鷹巣古墳群発掘調査概報』 白石市文化財報告書第12号
- 岩淵康治他 1974 『仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第7集
- 国見町 1977 『国見町史』第1巻 通史・民俗
- 伊東信雄 1979 「福島県双葉郡浪江町上の原3号墳」『福島考古』第20号
- 川崎利夫、野尻侃、横戸昭二 1979 『大之越古墳発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第18集
- 米沢市教育委員会 1983 『戸塚山第137号墳発掘調査報告書』 一戸塚山古墳群調査報告書第1集
- 伊藤玄三他 1985 『本屋敷古墳群の研究』 法政大学
- 渋谷孝雄、長橋至 1985 『お花山古墳群発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第85集
- 福島県立博物館 1987年 『古墳測量調査報告』 福島県立博物館調査報告第16集
- 柏倉亮吉、阿子島功、加藤稔、江川隆 1987.3 『菅沢古墳二号墳発掘調査報告書』 山形市教育委員会
- 手塚均、加藤明弘 1989 「兜塚古墳第二次調査」『亘理町三十三間堂遺跡ほか』 宮城県文化財調査報告書第131集
- 滝沢誠他 1989 「七瀬3号古墳。4号遺跡」『七瀬古墳群、田麦中畝古墳群』 中野市教育委員会
- 恵美昌之、菅井仁 1990 『愛島東部丘陵遺跡群詳細分布調査報告書賽ノ窪古墳群の測量 調査Ⅴ』 名取市教育委員会
- 森下章司 1991 「古墳時代仿製鏡の変遷とその特質」『史林』第74巻第6号
- 杉本宏他 1991 『宇治二子山古墳』 宇治市教育委員会
- 古川一明、高橋栄一 「念南寺古墳」『壇の越遺跡、念南寺古墳』 宮城県文化財調査報告書第177集
- 柳沼賢治他 1998 『大安場古墳群—第2次発掘調査報告—』 郡山市教育委員会
- 和田聡、植村泰徳、菅智子 1999 『古屋敷遺跡』 塩川西部地区遺跡発掘調査報告書4 塩川町文化財調査報告第6集
- 川村雪絵 1999 「古墳時代の堅櫛」『国家形成期の考古学—大阪大学考古学研究室10周年記念論集—』
- 朴沢志津江 2002 『角塚古墳』 胆沢町埋蔵文化財調査報告書第28集
- 菊地芳朗 2002 「福島県会津坂下町長井前ノ山古墳—合掌型石室を持つ前方後円墳の調査—」『考古学ジャーナル』 NO.492
- 岸本一宏他 2003 『但馬の王墓茶すり山古墳調査概報』 学生社
- 三浦俊明他 2004 『下開発茶白山古墳群Ⅱ—第3次発掘調査報告書』 石川県辰口町教育委員会
- 三浦俊明、長屋有香 2004 「下開発茶白山9号墳出土の堅櫛について」『下開発茶白山古墳群Ⅱ—第3次発掘調査報告書』 石川県辰口町教育委員会
- 辻 秀人 2006 『東北古墳研究の原点 会津大塚山古墳』 新泉社
- 菊地芳朗他 2008 『庚申壇古墳Ⅰ』 福島大学行政社会学類考古学研究室
- 辻 秀人 2011 「十 東北部」『日本の考古学講座7古墳時代上』 青木書店
- 水野敏典 2013 「金属製品の型式学的研究 鉄鏃」『副葬品の型式と編年』 同成社
- 辻 秀人他 2012年 「福島県喜多方市灰塚山古墳第1次発掘調査報告」『東北学院大学論集 歴史と文化』第48号
- 辻 秀人他 2014年 「福島県喜多方市灰塚山古墳第3次発掘調査報告」『東北学院大学論集 歴史と文化』第52号

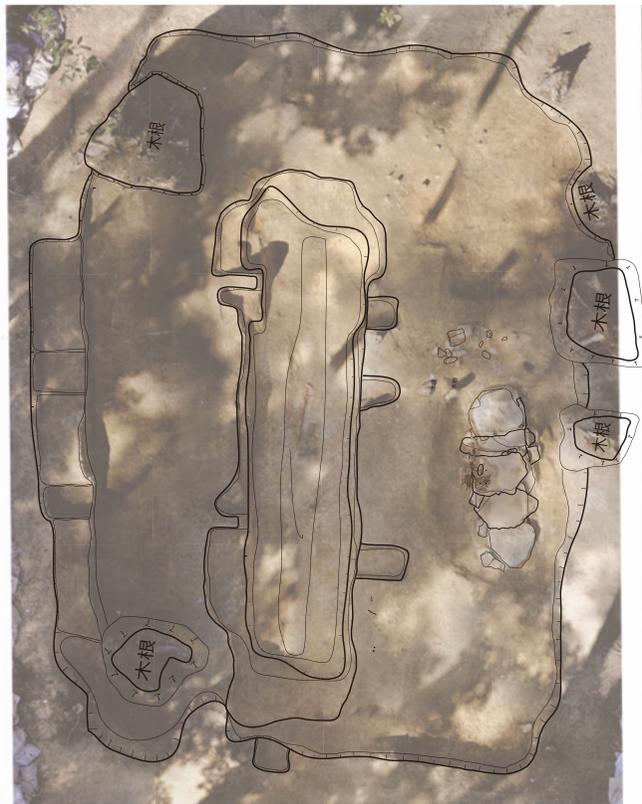
- 木沢直子 2014 「韓国と日本で出土した「竖櫛」の比較検討」『高興 野幕古墳 発掘調査報告書』
辻 秀人他 2015年 「福島県喜多方市灰塚山古墳第4次発掘調査報告」『東北学院大学論集 歴史と文化』
第53号
水澤幸一他 2016 『新潟県胎内市城の山古墳発掘調査報告書（第4次～9次調査）』 胎内市教育委員会



写真47 辻ゼミナール集合写真



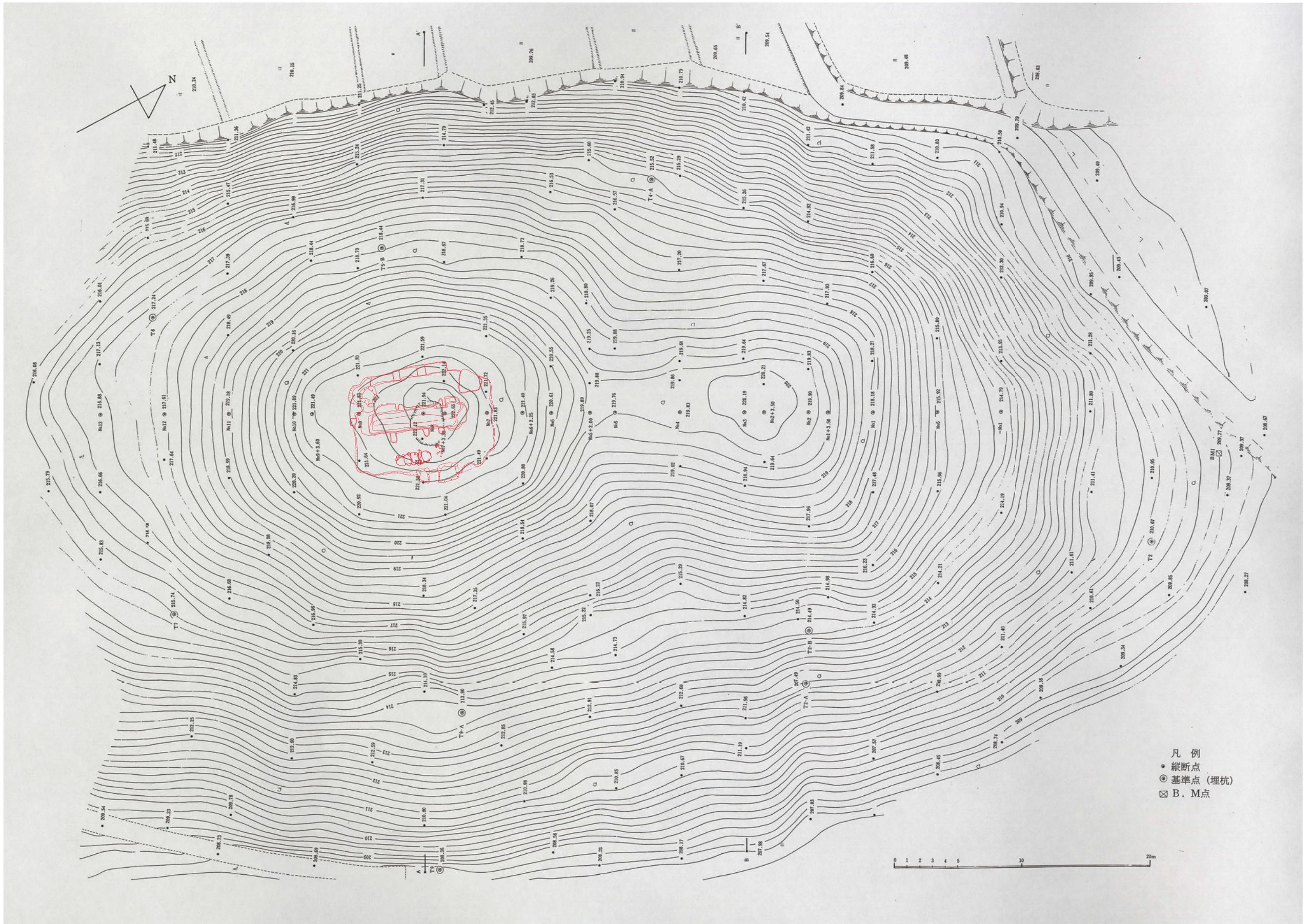
写真 48 第6次調査完掘状況



第27図 後円部墳頂平面図



写真 49 後円部墳頂写真（北から）



第28图 灰塚山古墳全体測量图 (1/300)

宮城県栗原市栗駒猿飛来

鳥矢ヶ崎古墳群青雲神社地点 発掘調査報告

辻 秀人・佐藤 由浩・森 千可子・相川ひとみ
石山 朋美・梅宮 崇成・木村 智・小丸 雄大
白銀沙也佳・鈴木 舞香・野村 真吾・吉原 夏海

調 査 体 制

調査期間 第1次調査 平成27年3月12日～23日、3月27日～31日

第2次調査 平成28年3月3日～22日、3月26日～28日

調査主体 東北学院大学文学部歴史学科考古学専攻辻ゼミナール

調査担当 東北学院大学文学部 教授 辻 秀人

調 査 員

第1次調査

佐々木拓哉・横田竜巳（大学院博士課程前期2年）

木村圭佑・森 千可子・岸 知弘・芦野 悟・阿部大樹・佐々木雪乃
渋谷若菜・東海林裕也・菅原里奈・新保摩実・西川悠也・廣瀬拓磨
結城彩花（4年生）

相川ひとみ・阿部悠大・泉澤まい・笠原大暉・鈴木里奈・野呂夕奈
星 あゆみ・村木 翔（3年生）

石山朋美・梅宮崇成・木村 智・小丸雄大・白銀沙也佳・鈴木舞香
野村真吾・吉原夏海（2年生）

佐藤由浩・山口貴久（外部参加者）

第2次調査

佐藤由浩・森千可子（大学院博士課程前期1年）

相川ひとみ・村木 翔（4年生）

石山朋美・梅宮崇成・木村 智・小丸雄大・白銀沙也佳・鈴木舞香
野村真吾・吉原夏海（3年生）

岡本莉奈・窪田磨実・斎藤千晶・佐伯鉄太郎・酒井 瞳・清野寛仁
鈴木千賀・平 大貴・高橋多津美・結城 悟・横山 舞（2年生）

高橋伶奈（1年生）

調査協力 栗原市教育委員会 猿飛来コミュニティセンター

鳥矢ヶ崎史跡公園保存会

千葉長彦、大場亜弥、安達訓仁、工藤 健、佐藤 茂（敬称略）

例 言

- 1、本書は平成27年3月12日～3月23日、3月27日～31日、平成28年3月3日～22日、3月26日～28日に実施した宮城県栗原市栗駒猿飛来に所在する鳥矢ヶ崎古墳群青雲神社地点の第1次発掘調査と第2次発掘調査の成果をまとめたものである。
- 2、発掘調査は東北学院大学文学部歴史学科考古学専攻辻ゼミナールのゼミ活動の一環として実施したものである。
- 3、調査は東北学院大学文学部教授辻秀人が担当した。調査の主な参加者は大学院、文学部考古学ゼミナール所属学生、所属予定の学生である。
- 4、出土遺物、作成図面の整理は東北学院大学文学部歴史学科考古学ゼミナール所属の3年生が中心となって実施した。
- 5、本書の編集は辻秀人が担当し、執筆は参加者が分担した。各項目の執筆者は文末に記した。報告の記載は各執筆の原稿に辻が加筆訂正を行ったものである。従って最終的な文責は辻にある。
- 6、本書に掲載した図面の高さ表示はすべて海拔、北はすべて真北を示す。
- 7、本書に掲載した平面図の位置は、便宜的に局地座標系により表示した。局地座標のX,Y座標は調査にあたって設置した基準点T1（公共座標 X=-131889.046 Y=14885.611）を X=100.00、Y=100.00 とした。X軸は真南北方向、Y軸は真東西方向である。
- 8、本書に掲載する鳥矢ヶ崎古墳群航空写真はすべて工藤健氏が所有するものである。工藤氏のご厚意により本書に掲載させていただいた。
- 9、鳥矢ヶ崎古墳群に関わるこれまでに刊行された報告書は以下の通りである。
- 10、調査した墳丘をこれまで1, 2号墳と呼称してきたが、今年度の調査で古墳ではないと判断されたので、本報告から墳丘を塚と呼称する。

鳥矢ヶ崎古墳群関連報告書

栗駒町教育委員会 1972 『宮城県栗原郡栗駒町鳥矢ヶ崎古墳調査概要』 昭和四十六年度栗駒町埋蔵文化財報告

辻 秀人他 2015年 「宮城県栗原市栗駒猿飛来鳥矢ヶ崎古墳群測量調査報告」 『東北学院大学論集 歴史と文化』 第53号

辻 秀人他 2016年 「宮城県栗原市栗駒猿飛来鳥矢ヶ崎古墳群青雲神社地点第1次発掘調査報告」 『東北学院大学論集 歴史と文化』 第54号

第1章 調査に至る経過

鳥矢ケ崎古墳群古墳の存在は明治時代から知られており、昭和46年には、東北学院大学加藤孝教授、東北大学高橋富雄教授を中心とする栗駒町鳥矢ケ崎古墳群調査団によって発掘調査が実施された。調査の結果、1号墳からは東北北部に分布する末期古墳群に共通する石室かと思われる埋葬部が、2号墳からは地表下に埋納された木棺痕跡が発見され、鳥矢ケ崎古墳群には北の要素と中央の要素が混在していると考えられた。また、鈿帯金具一式等が出土し、被葬者には当時の律令国家の役人であった人物が埋葬されていることが判明し、当地が伊治城で反乱をおこした伊治公砦麻呂の一族が基盤とした地域と見られることもあわせて、東北古代史を考える上で重要な知見をもたらすこととなった（栗駒町教委 1972）。

また、東北学院大学辻ゼミナールは2012年以降3年間にわたって測量調査を実施し、39基にのぼる古墳群全体の測量図を作成し、古墳群全体の姿を明らかにした（辻他 2015）。この結果、鳥矢ケ崎古墳群が全体の姿が良好に保存されているきわめて貴重な古墳群であることが明瞭となった。また、安達訓仁氏による出土遺物の再検討により、（安達 2015）8世紀後半代にA1・A2号墳が位置づけられることが明らかにされた。鳥矢ケ崎古墳群は伊治城が造営され、宝亀十一年の伊治公砦麻呂の乱が引き起こされた頃に営まれた古墳群と理解される。伊治公一族が基盤とした伊治城に近いこの地域には他にこの時期の有力な古墳群は他になく、鳥矢ケ崎古墳群こそが伊治公一族の墓所であったと考えられる。鳥矢ケ崎古墳群は東北古代史を考える上できわめて重要な意味を持つといえよう。

ところで、鳥矢ケ崎古墳群1号墳には北の要素が、2号墳には中央の要素があると指摘されている（栗駒町教委 1972）が、残念ながら1号墳の石室や、2号墳の木棺の構造が明瞭ではない。鳥矢ケ崎古墳群発掘調査以後東北北部にも墳丘下に木棺が埋納された事例が多数確認されており、木棺の存在だけではその性格を論ずることができない状況にある。従って鳥矢ケ崎古墳群で用いられている木棺がどのようなものかを知ることがその性格を考えるために必要であることが痛感された。

周知のように鳥矢ケ崎古墳群は県指定史跡であり、更なる発掘調査を実施することはできない。東北学院大学辻ゼミナールでは測量調査終了後、鳥矢ケ崎古墳群の埋葬部の構造を把握するため、指定地外にある新たに発見された2基とその後発見された1基を加えて合計3基の調査をすることになった。2015年には1号墳（塚）を発掘調査し、今年度は2号墳（塚）、3号墳（塚）の測量発掘調査をした。調査にあたり、土地を所有する青雲神社宮司佐藤伸成氏、総代菅原 勁氏に調査の許可をお願いし、ご快諾を得た。

引用文献

- 栗駒町教育委員会 1972 『宮城県栗原郡栗駒町鳥矢ヶ崎古墳調査概要』 昭和四十六年度栗駒町埋蔵文化財報告
- 安達訓仁 2015年 「第4章 鳥矢ヶ崎古墳 A1・A2号墳出土遺物について」 『宮城県栗原市栗駒猿飛来鳥矢ヶ崎古墳群測量調査報告』 『東北学院大学論集 歴史と文化』 第53号
- 辻 秀人他 2015年 「宮城県栗原市栗駒猿飛来鳥矢ヶ崎古墳群測量調査報告」 『東北学院大学論集 歴史と文化』 第53号
- 辻 秀人他 2016年 「宮城県栗原市栗駒猿飛来鳥矢ヶ崎古墳群青雲神社地点第1次発掘調査報告」 『東北学院大学論集 歴史と文化』 第54号



写真1 1号塚（手前）と2号塚（奥）



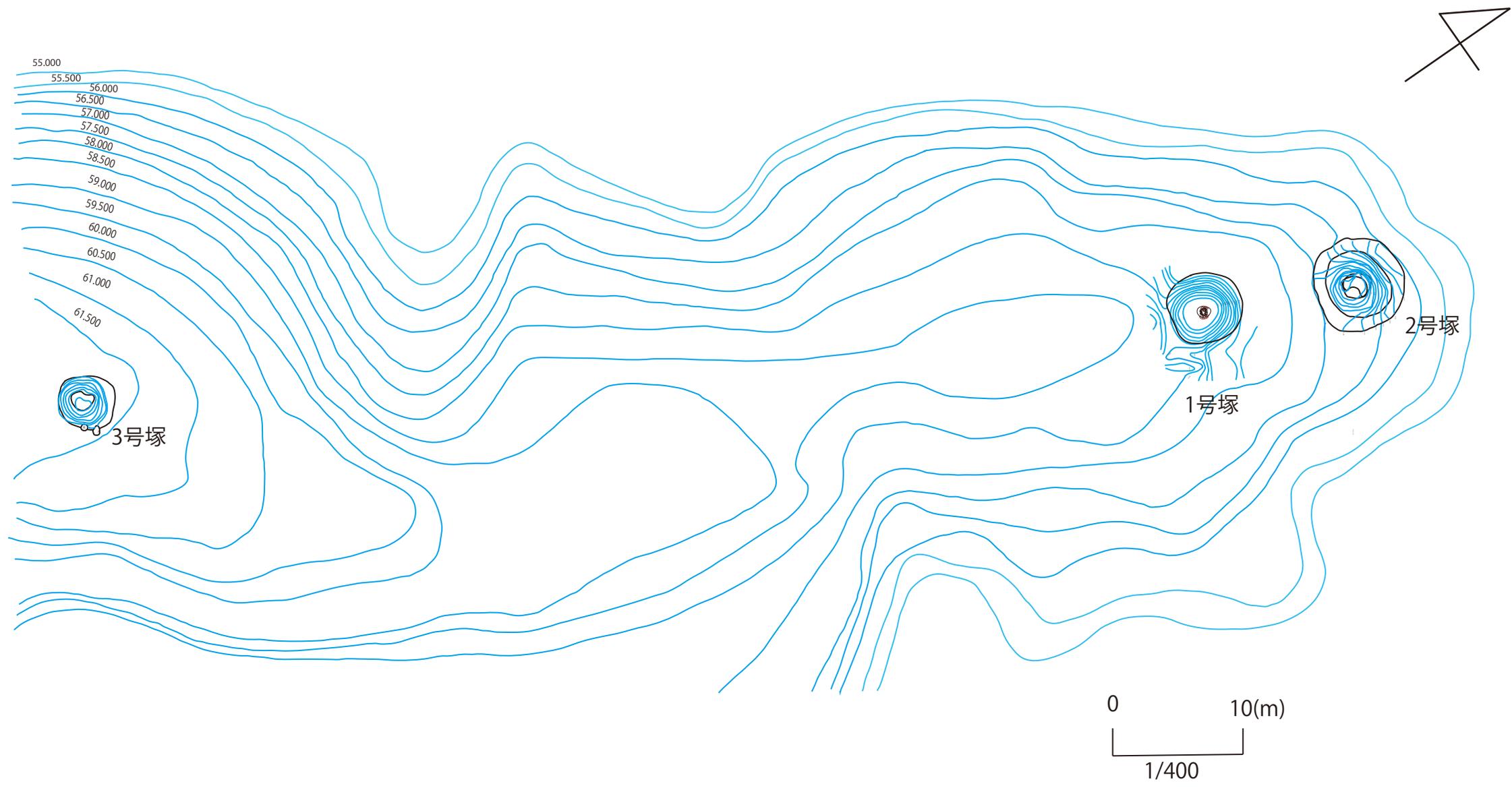
写真2 1号塚（調査前）



写真3 2号塚（調査前）



写真4 3号塚（調査前）

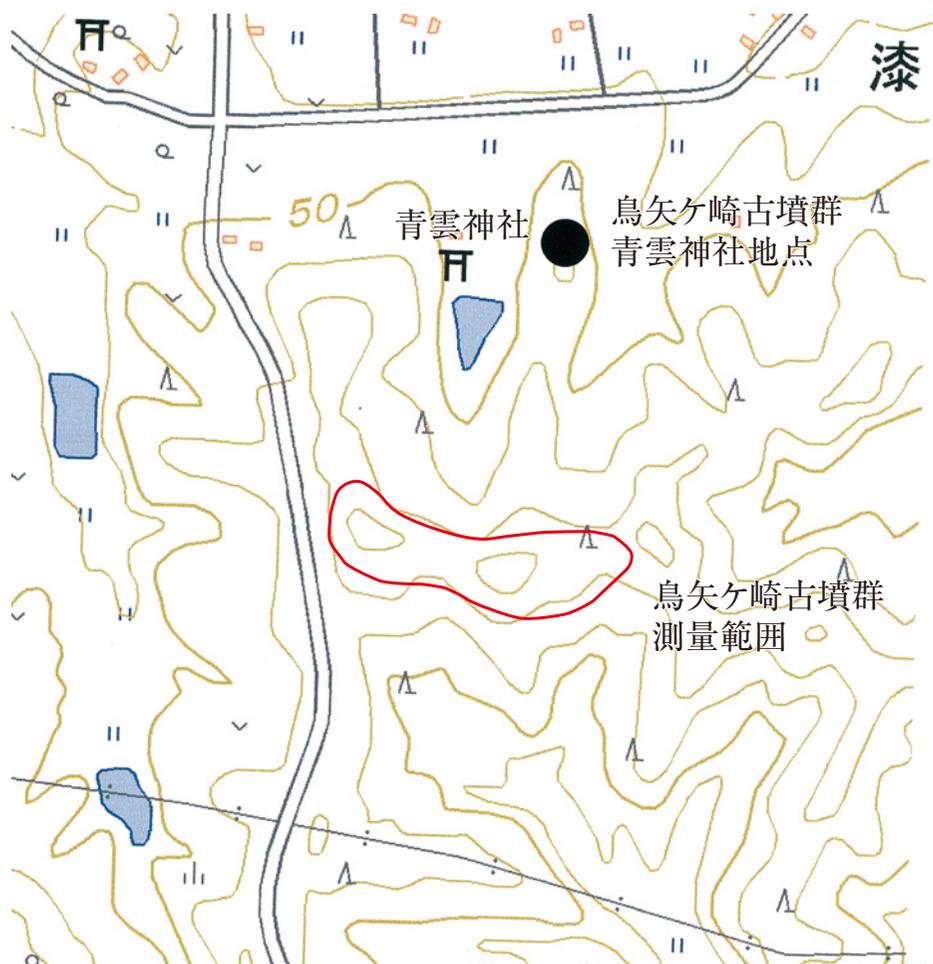


第3図 青雲神社地点周囲の地形と塚の分布

第2章 遺跡の環境

第1節 古墳の立地

鳥矢ヶ崎古墳群は、宮城県栗原市栗駒猿飛来鳥矢ヶ崎に所在する。奥羽山脈から派生する南東に延びる丘陵の痩せ尾根上から南斜面にかけて総数39基が分布する。県史跡に指定されている。鳥矢ヶ崎古墳群の西端、栗駒山を望むことができる地点から丘陵は枝分かれし、尾根線が北にも延びる。北に延びる尾根線上に史跡指定範囲外に3つの高まりが連なる地点がある。この墳丘状の高まりの性格は明らかではない。また、同じく鳥矢ヶ崎古墳群B地点の中程で枝分かれし、北に尾根線が延びて青雲神社の西側に至る。この青雲神社西側に延びる尾根線の先端近くに2基の墳丘が確認された。この地点を鳥矢ヶ崎古墳群青雲神社地点と呼び、新たに発見した1基を加え、計3基の測量、発掘調査を実施した。所在地は原市栗駒猿飛来鳥矢ヶ崎2-1である。



第1図 鳥矢ヶ崎古墳群古墳群の位置

第2節 歴史的環境

鳥矢ヶ崎古墳群が所在する現在の栗原市域は、古墳時代から古代にかけて東北北部と東北南部の文化の境界にあたり、歴史的に様々な事象が起きたことが知られている。

古墳時代には、土師器を使い、古墳を築く東北南部の文化（古墳時代社会）と狩猟、採集を生業とする北海道の文化と共通する続縄文文化とが境を接していた。

宮城県栗原市築館城生野に所在する国指定史跡伊治城跡では、2条のL字形に伸びる溝が検出され、堆積土中から大量の塩釜式土師器と北大I式の深鉢が出土し、古墳時代前期に位置づけられた（築館町教育委員会 1992）。2条の溝を組み合わせて豪族居館との理解もあるが、必ずしも明瞭ではない。ただ、古墳時代前期にこの地に古墳文化を持つ人々が暮らし、続縄文文化の文物を入手できる状況にあったと見ることができる。

また、平成26年には伊治城跡の南西約500mの位置にある入の沢遺跡の大規模な発掘調査が実施され、大規模な堀と材木堀で囲まれた古墳時代前期の拠点的な集落の存在が明らかにされた（村上 2015 宮城県教委 2014）。入の沢遺跡の西側の尾根上にある大仏古墳群は入の沢遺跡との関係が考えられている。伊治城跡の北西約3kmにある長者原遺跡の存在とあわせ、この地域には古墳時代前期において古墳文化を持つ集落の広がりが見られ、北の続縄文文化と相対していた様相を確認することができる。入の沢遺跡の大規模な防御施設の存在を考えると、古墳時代前期において古墳時代社会と続縄文社会との軋轢がこの地にあった可能性があるのだろう。

古墳時代中期～後期はこの地の遺跡は明瞭ではない。奈良時代にいたり、再び大規模な遺跡が確認されるようになる。

伊治城は、東西700m、南北900mの範囲を土塁と大溝で区画し、内部に政庁を設ける大規模な施設で、767（神護景雲元）年に律令国家の東北北部への進出の足がかりとして築かれた。伊治城建設に先だって関東の人々の移民が行われたことが伊治城の南約2kmの御駒堂遺跡で確認されている（宮城県教委 2014）。また、墳墓では姉齒横穴群、大沢横穴群が営まれた。横穴として簡略化され新しい段階のものである。在地の墓制ではなく、移民と関係する可能性が高い。両横穴群は内陸では最北の横穴群である。

鳥矢ヶ崎古墳群が営まれた奈良時代には、南東約6kmにある伊治城周辺で関東からの移民、新たな墓制の開始など伊治城造営に関わる大きな変化が進行していた。鳥矢ヶ崎古墳群を営んだ人々は歴史的な大変動に直面した。鳥矢ヶ崎古墳群には、東北北部の円墳で構成される古墳群と共通する様相を見て取ることができる。小規模な石室の存在も含めて、いわゆる末期古墳群の範疇で理解することができる。

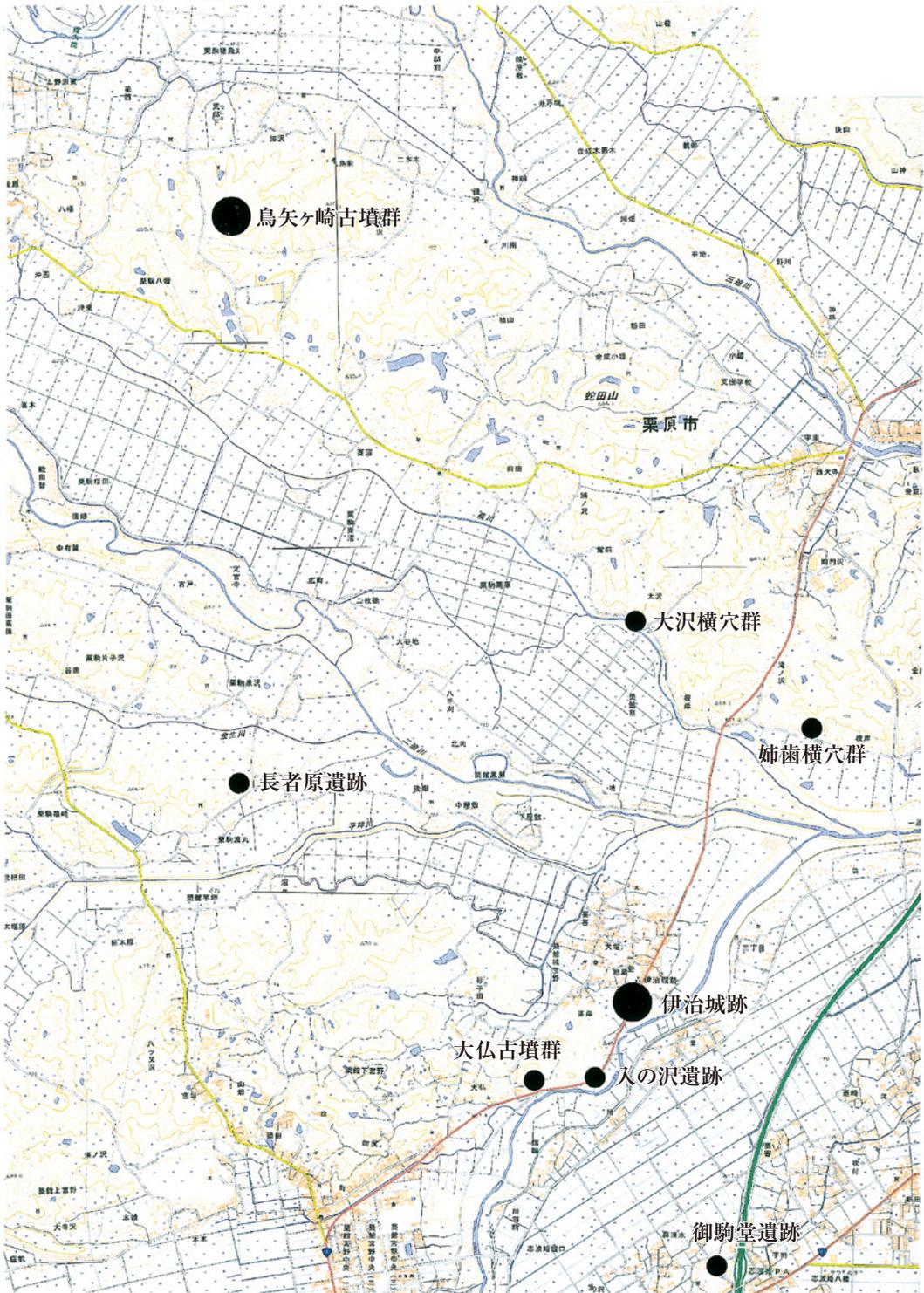
鳥矢ヶ崎古墳群を営んだ人々は、大きくみれば東北北部の蝦夷と呼ばれた人々と共通する文化の中であり、この地域の在地の勢力が営んだものと見られる。しかし出土遺物には北の末期古墳群と共通する要素とともに律令国家と関係の深い文物もあり、国家と在地勢力との緊張関係の中でこの地の人々がとった対応を示している。

引用、参考文献

- 栗駒町教育委員会 1972 『宮城県栗原郡栗駒町鳥矢ヶ崎古墳調査概要』 昭和四十六年度栗駒町埋蔵文化財報告
- 築館町教育委員会 1992年 『伊治城遺跡—平成3年発掘調査報告書一』 築館町文化財調査報告書第5集
- 宮城県教育委員会 2014年 「入の沢遺跡」『平成26年度遺跡調査成果発表会発表要旨』 宮城県考古学会
- 宮城県教育委員会 2014年 「御駒堂遺跡」『平成26年度遺跡調査成果発表会発表要旨』 宮城県考古学会
- 安達訓仁 2015年 「第4章 鳥矢ヶ崎古墳 A1・A2号墳出土遺物について」『宮城県栗原市栗駒猿飛来鳥矢ヶ崎古墳群測量調査報告』 『東北学院大学論集 歴史と文化』第53号
- 村上裕次 2015年 「入の沢遺跡の調査成果」『東北学院大学アジア流域文化研究所公開 シンポジウム古代倭国北緑の軌轢と交流栗原市入の沢遺跡で何が起きたか資料集』



写真5 鳥矢ヶ崎古墳群青雲神社地点1号塚調査風景



第2図 鳥矢ヶ崎古墳群および周辺遺跡位置図（古墳時代～古代）

第3章 測量・発掘調査成果

第1節 測量

1. 測量の方法

鳥矢ヶ崎青雲神社地点の測量調査を行うにあたって、次のような方法で原図を作成することとした。

- ・原図縮尺 墳丘分布範囲 1/20
- ・等高線 墳丘分布範囲 25 cm ごとに記入し、1 m ごとに太線とする。
- ・作図方法 T1、T2 を基準点とし、トータルステーションを用いて XY 座標を測定し、測量基準点を作成した。なお、必要に応じて併合トラバースを実施し、測量基準点の正確性を確認している。各測量基準点から平板を用いて作図した。作図に当たっては墳端線、傾斜変換線を先に記入し、後に等高線を作成した。等高線は標高により作成した。

測量原点は、2012年に栗原技研に依頼して、GPS測量により設置した、基準点を用いる。その成果は以下のとおりである。

T1 X=-131889.046 m Y=14885.611 m

標高 67.765 m

T2 X=-131860.115 m Y=14925.241

標高 66.968 m

注 この成果は2012年2月27日に観測したものである。東日本大震災前、平成20年6月14日発生岩手宮城内陸地震後のデータと比較するとX軸で、1.29 m南に、Y軸で2.875 m東に移動しており、東日本大震災と岩手宮城内陸地震のいずれよりも前のデータと比較すると、X軸で1.18 m南に、Y軸で2.729 m東に移動している。

T1、T2の座標データは公共座標で表示されている、実際の作図作業にあたっては、公共座標は数値が大きすぎ、扱いにくいので、T1をX=100.00、Y=100.00とし、真南北方向をX軸真東西方向をY軸とする局地座標系を用いた。本報告掲載図面の表示も局地座標系を用いた。局地座標XYそれぞれの数値から100.00を減じた後T1のそれぞれの数値に加えることで、公共座標に転換可能である。

引用文献

辻 秀人他 2015年 「宮城県栗原市栗駒猿飛来鳥矢ヶ崎古墳群測量調査報告」 『東北学院大学論集 歴史と文化』第53号

第2節 発掘調査成果

1. 1号塚

1号塚は、南北に延びる尾根線上の平坦面に築かれた円形の塚である。直径約6m、高さ約1.2mあり、第1次調査では墳丘上面とそれ以下の掘り下げを行い、第2次調査では墳丘の掘り下げの続きを行った。

第1次調査

第1次調査では、周濠の有無の確認や、古墳墳丘・周濠外の様子を観察するためトレンチ設定を行い、表土（腐植土）を除去したのち墳丘を30cm幅の畦を十字に残して四分劃し、北側から逆時計周りにa、b、c、d区とした。

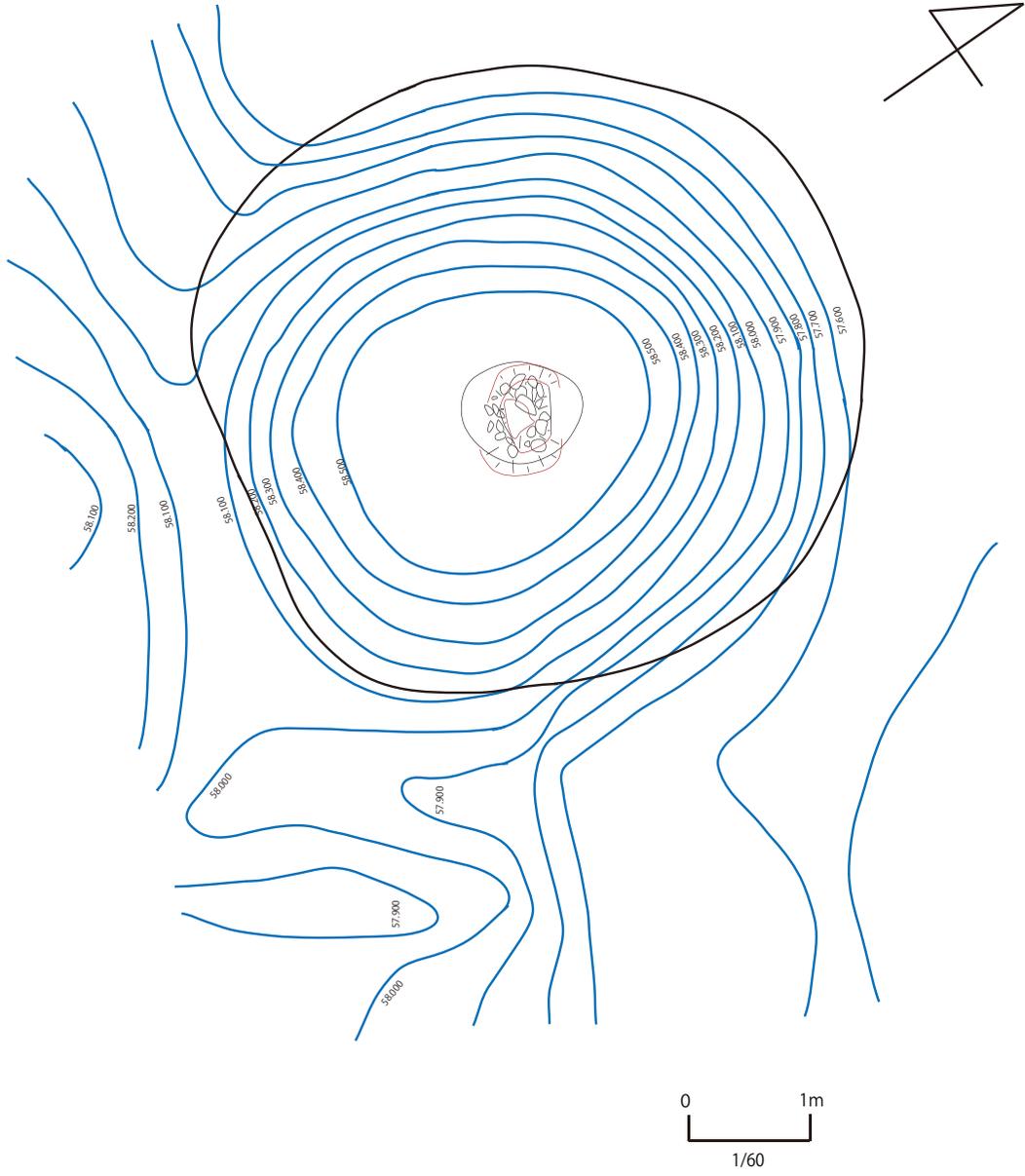
墳丘上面を検出したところ、1号塚の墳丘は下半が地山整形、上半が墳丘外周を削った土を盛り上げて作り出されていることが判明した。墳丘外周は削られているため浅いくぼみがめぐっていたが、明確な掘り込みは認められず、周溝とは理解しなかった。墳頂部分には河原石が分布し、河原石が詰め込まれたウレタン製の箱が埋め込まれていた。箱を除去し、周囲を精査したところ、箱の下にピット状のくぼみがあること、それを囲むように石が分布していることが確認できた。墳丘上面を掘り広げたところ、中央付近に長軸10cm前後の川原石が散在していること、中央部には円形に黒色土が広がることがわかった。円形の黒色土を掘り下げると直径50cm程の穴があり、その周囲に小型の川原石が円形に組み込まれていて、周囲に散在する川原石に混じって陶器破片が出土した。穴を囲む石はやや動かされているようだが、本来は円形の石組みであったと見られた。

墳丘の掘り下げを行ったところ、墳丘中央部のa～d区にわたって黄褐色の土が分布している様子が観察された。石組み遺構に壊されている部分があるものの、黄色土の分布が長方形を呈することが判明し（写真6）、木棺の埋納に伴う陥没坑の可能性が考えられた。

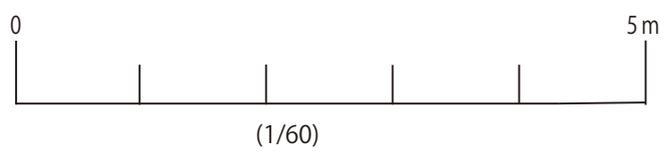
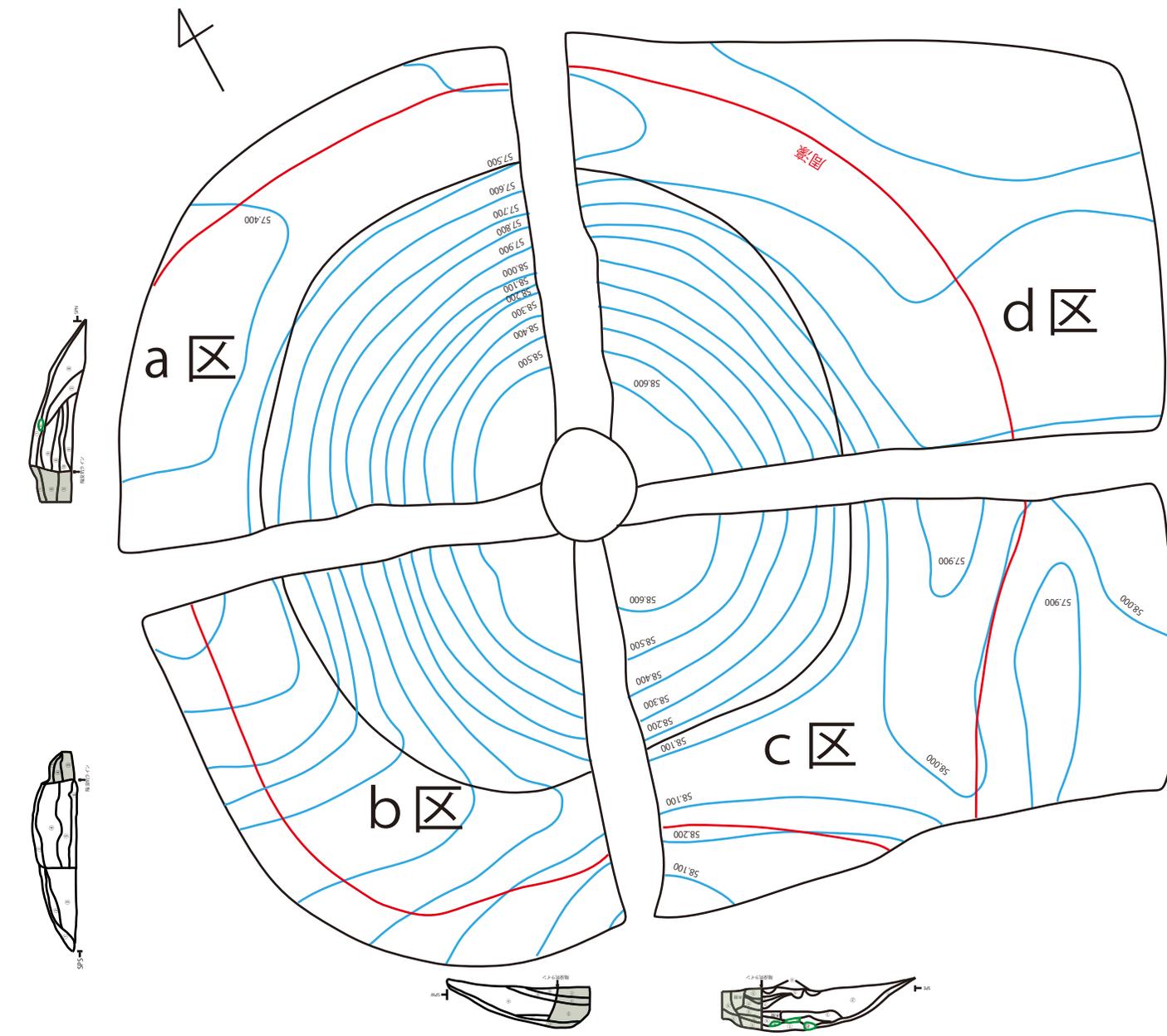
陥没坑全体の姿を確認するため、土層観察のために残しておいた畦を石組み部分を除いて除去し、精査した。陥没坑内には白色土があり、外側には旧表土と見られる黒色土が広がっていた。墳丘土層断面では墳丘の土に明らかなズレが生じており、墳丘正面まで陥没坑が達している様子が観察された。陥没坑は南北2.2m東西0.95mを測り、埋葬施設の陥没坑と見ることが可能であった。

陥没坑東半分を掘り下げ、埋葬部を探索したが、埋葬部には至らなかった。

（野呂夕奈、星あゆみ、鈴木里奈、梅宮崇成）



第4図 1号塚墳丘上面全体図



1号墳C区西壁

層色	粘性	しまり	粒度	備考
① Hue 7.5YR 黒褐3/2	弱い	なし	なし	表土
② Hue 7.5YR 明褐5/8	やや強い	弱い	なし	墳丘形成土
③ Hue 7.5YR 褐4/4	やや強い	強い	粘土	墳丘形成土
④ Hue 7.5YR 褐4/6	強い	強い	粘土	墳丘形成土
⑤ Hue 10YR 黄褐5/8	やや強い	やや強い	粘土	墳丘形成土
⑥ Hue 10YR 褐4/6	やや強い	やや強い	粘土	墳丘形成土

1号墳d区南壁

層色	粘性	しまり	粒度	備考
① Hue 10YR 黒褐2/3	弱い	中	シルト	表土
② Hue 10YR 褐4/6	弱い	中	シルト	墳丘形成土
③ Hue 7.5YR 明褐5/6	弱い	中	シルト	墳丘形成土
④ Hue 10YR 黄褐5/6	弱い	中	シルト	墳丘形成土
⑤ Hue 10YR 黄褐4/4	弱い	中	シルト	2.5YR 4/1黄灰礫小粒、2%混入
⑥ Hue 2.5YR オリーブ褐4/6	弱い	中	シルト	墳丘形成土
⑦ Hue 7.5YR 明褐5/6	弱い	中	シルト	墳丘形成土
⑧ Hue 10YR 赤い黄褐 5/4	弱い	中	シルト	墳丘形成土

d区西・南壁断面図

層色	粘性	しまり	粒度	備考
① Hue 10YR 黒褐3/2	弱い	中	シルト	表土
② Hue 10YR 黄褐8/5	弱い	中	やや粘質なシルト	墳丘形成土
③ Hue 10YR 黄褐6/3	弱い	中	シルト	墳丘形成土
④ Hue 10YR 黒2/1	やや強	中	やや粘質なシルト	旧表土
⑤ Hue 10YR 褐4/6	やや強	中	粘土	墳丘形成土
⑥ Hue 7.5YR 明褐5/6	強	中	粘土	墳丘形成土
⑦ Hue 10YR 黄褐5/8	やや強	中	やや粘質なシルト	墳丘形成土
⑧ Hue 7.5YR 明褐5/8	やや強	中	やや粘質なシルト	墳丘形成土
⑨ Hue 10YR 黄褐5/6	弱	中	やや粘質なシルト	墳丘形成土

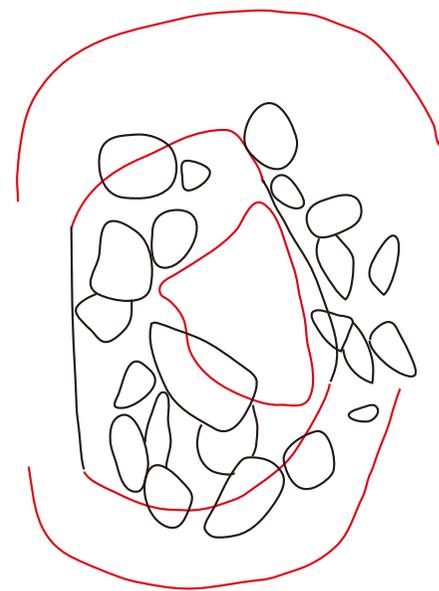
第5図 1号塚掘下げ全体図



写真6 1号塚上面写真



写真7 1号塚上面石組遺構



第6図 石組み遺構実測図

出土遺物

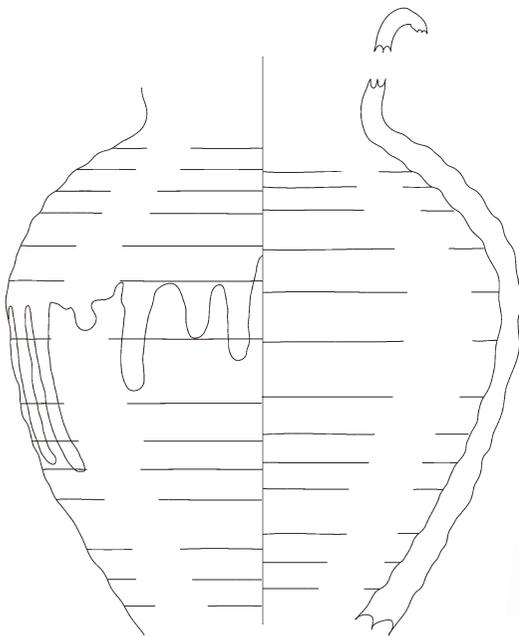
陶器

塚上面から出土した陶器破片はすべて同一個体だった。復元したところ、壺形陶器で、頸部から体部にかけて約1/3が残存していた。底部はなく、口縁部は意識的に打ち欠かれている。

全体にロクロ成形で、後円部から胴半ばにかけて灰釉がかけられ、緑色を呈している。焼成は良好で釉薬のかかっていない部分は黒褐色を呈する。体部全体に縦方向の調整の痕跡が見られる。八重樫忠郎氏から渥美焼であるとのこと教示を得た。出土状況や口縁部が打ち欠かれているなどの特徴から、経筒の外容器である可能性が高い。年代は、口縁部の特徴から渥美焼の編年（愛知県 2012）の2a期、12世紀末と推測される。

渥美焼きは、宮城県、福島県、岩手県で出土例があり、岩手県平泉遺跡群で最も多く発見されている。本例は1号塚上面に営まれた経塚と奥州藤原氏との関係がどのようなものであるか考える手がかりになる可能性がある。

（森 千可子）



第7図 渥美焼壺実測図 (1/3)



写真8 渥美焼壺写真

第2次調査

墳丘の掘り下げを行ったところ、2つの下層遺構を発見した。そこで、石組み遺構を作成するために掘られたと考えられるピット1と、第1次調査で検出した長方形のピット2の掘り下げを行った。ピット1の掘り下げを行ったところ、灰釉陶器片の口縁部が2点、古銭が1点出土した。灰釉陶器片は第1次調査でも出土していた渥美焼だと判断した。古銭は錆などにより文字の識別が難しい状態だが、中国宋代紹聖元年（1094年）に始鑄された「紹聖元寶」であると考えられる。



写真9 宋銭写真

現地説明会の際には唐銭「乾元重寶」としたが訂正をしておきたい。ピット2内から出土遺物はなく、末期古墳の埋葬部の想定は実証できなかった。

以上の調査結果から、1号塚の表面は12世紀後半の経塚が営まれていたことが判明した。渥美焼は奥州藤原氏関連経塚等でしばしば使われるもので、これにより鳥矢ヶ崎の地が奥州藤原氏と深い関係にあった可能性が考えられる。

墳丘上面で見ていた長方形のピット2は、経塚よりも下層であり、平安時代末以前に掘られたことは確実だが、時期を特定できる遺物は出土しなかった。古墳の埋葬部とは異なる様相であり、当初の末期古墳の埋葬部という想定を裏付けることはできなかった。



写真10 1号塚ピット1, 2掘り上げ写真



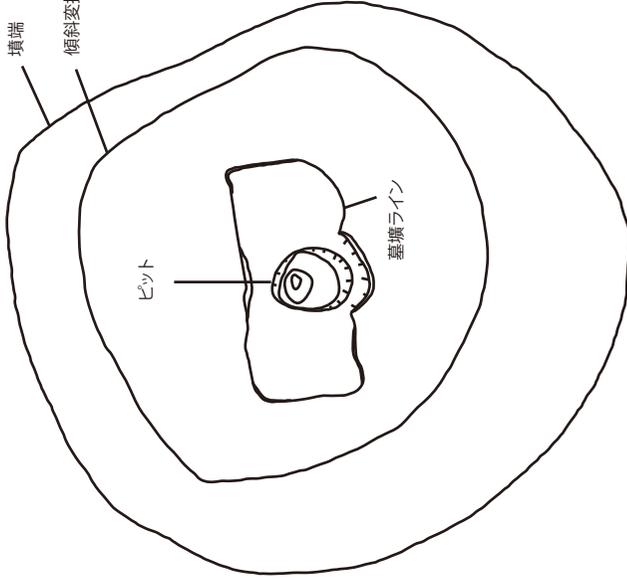
┆

┆



┆

東西セクション北壁



┆

┆

土層	粘性	しまり	粒度
① hue 7.5YR 明褐5/8	中	弱	シルト
② hue 10YR 黄褐5/8	中	弱	シルト
③ hue 7.5YR 明褐5/8	中	弱	シルト
④ hue 10YR 褐4/6	中	弱	シルト
⑤ hue 7.5YR 褐6/8	中	弱	シルト
⑥ hue 10YR 褐4/4	中	弱	シルト
⑦ hue 10YR 明黄褐7/4	中	弱	シルト
⑧ hue 10YR 褐4/6	中	弱	シルト
⑨ hue 7.5YR 明褐5/6	中	弱	シルト
⑩ hue 10YR 黄褐5/8	中	弱	シルト
⑪ hue 7.5YR 明褐5/8	中	弱	シルト
⑫ hue 7.5YR 明褐5/8	中	弱	シルト
⑬ hue 10YR 黄褐5/6	中	弱	シルト
⑭ hue 10YR 褐4/4	中	弱	シルト
⑮ hue 10YR 黄褐5/6	中	弱	シルト
⑯ hue 10YR 褐5/6	中	弱	シルト



┆

┆

南北セクション西壁

第8図 1号塚下層遺構平面図

2. 2号塚

2号塚は直径約7m、高さ約1mの円形状の塚である。2号塚の発掘調査では、塚の様子を確認するため、トレンチ設定を行い表土（腐植土）を除去した。トレンチの設定は、墳丘を30cm幅の畔を十字に残して4分割し、北西側から逆時計回りにA、B、C、D区とした。東西南北のラインは1号塚と対応させており、1号塚と2号塚の中心部を通るように南北のラインが引かれている。



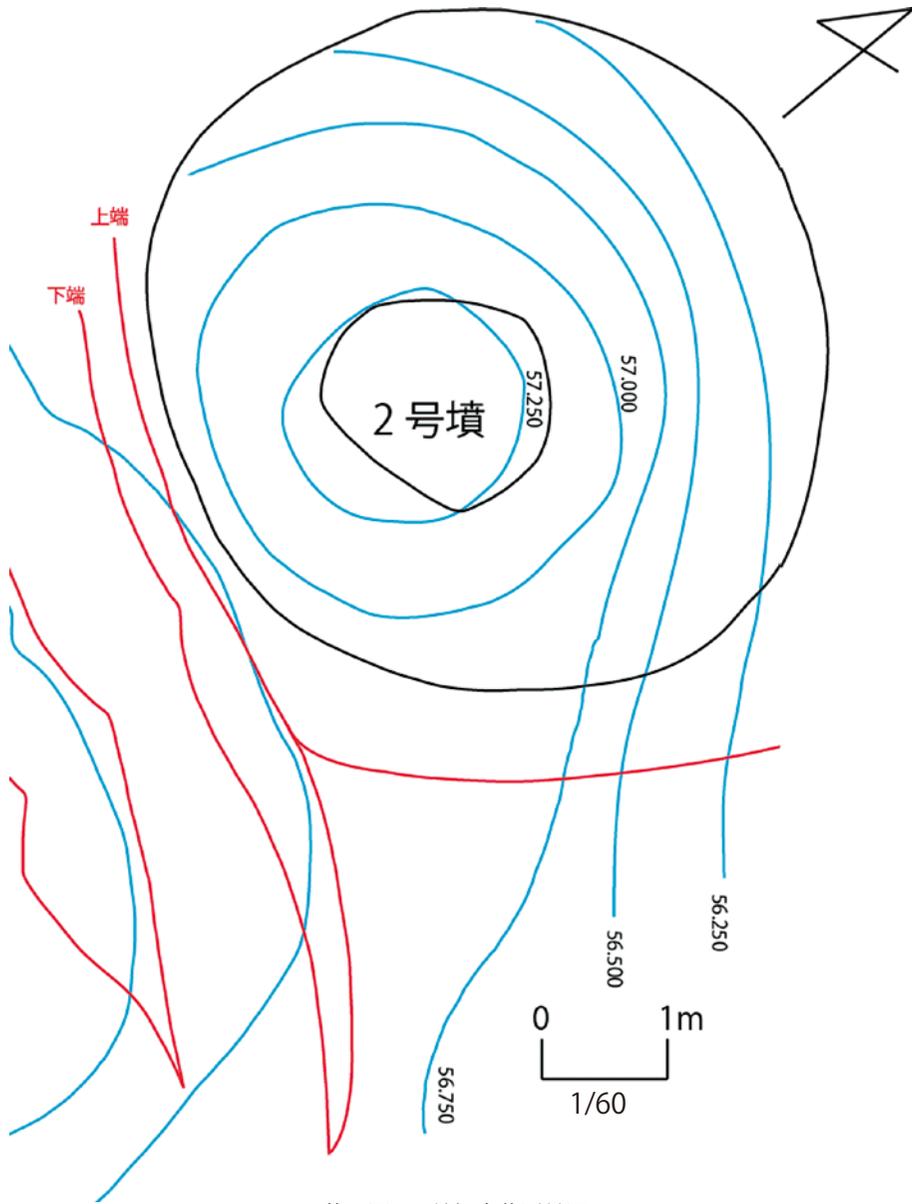
写真11 永楽通宝

1号塚の調査において、表土を除去した時点で黄色い土が検出され、これが塚の上面であると考えられていた。2号塚も同様であると考えられたため、黄色い土が検出されるまで掘り下げを行った。表土の除去以前より、塚の上面に礫の集中が確認されていた。表土を除去した段階で、2号塚が傾斜面に土を積むことで作ったものであり、上面に小礫が敷かれていることがわかった。また、塚の上部は平坦であり、周囲はややくぼむものの、周壕がないことが確認された。畔を取り外し、表面の小礫を含む層を取り外したところ、塚の中心部でピットの輪郭が確認された。その後、塚の上部より平坦に30cm程掘り下げを行った。掘り下げを終えた段階で、中央部に1m四方で色の違う土を確認した。除去した礫混じりの層からは「永楽通宝」1枚が出土した。

中央部で確認された色の違う土を4つの区画に分けA側を1、B側を2、C側を3、D側を4として、区画ごとに掘り下げを行った。1区の掘り下げを行い、地山と思われるオレンジ色の土が確認できたため、他も同様にオレンジ色の土が確認できるまで掘り下げを行った。

その後、塚の構造を明らかにするため、塚全体を十字に断ち割るように、東西南北に30cm幅のサブトレンチを設定して掘り下げを行い、地山に到達した。

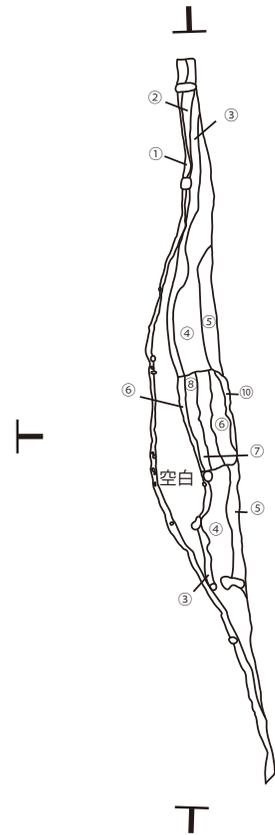
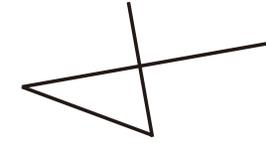
(鈴木舞香)



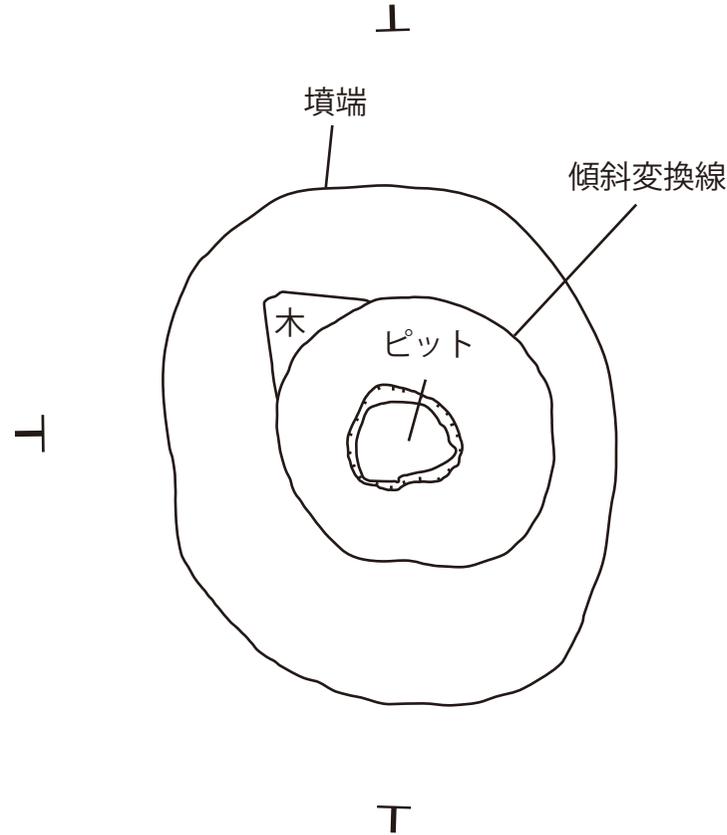
第9図 2号塚全体測量図



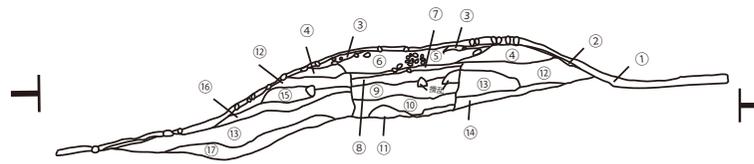
写真12 2号塚掘りあげ状況



東西セクション北壁

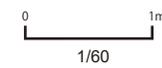


南北セクション西壁



南北セクション北壁						
層位			粘性	しまり	粒度	
①	Hue10YR	黒褐	2/3	弱	弱	シルト
②	Hue10YR	棕暗褐	2/3	弱	弱	シルト
③	Hue10YR	にぶい黄橙	6/3	弱	弱	シルト
④	Hue10YR	黄橙	5/6	弱	弱	シルト
⑤	Hue10YR	褐	4/6	弱	弱	シルト
⑥	Hue10YR	黄褐	5/8	弱	弱	シルト
⑦	Hue7.5YR	褐	4/6	弱	弱	シルト
⑧	Hue10YR	褐	4/6	弱	弱	シルト
⑨	Hue10YR	黄褐	5/6	弱	弱	シルト
⑩	Hue10YR	褐	4/4	弱	弱	シルト
⑪	Hue10YR	黄褐	5/8	弱	弱	シルト
⑫	Hue10YR	褐	4/4	弱	弱	シルト
⑬	Hue10YR	褐	4/6	弱	弱	シルト
⑭	Hue10YR	暗褐	3/4	弱	弱	シルト
⑮	Hue10YR	黄褐	5/6	弱	弱	シルト
⑯	Hue10YR	にぶい黄褐	4/3	弱	弱	シルト
⑰	Hue10YR	にぶい黄褐	6/4	弱	弱	シルト

東西セクション北壁					
層位			粘性	しまり	粒度
①	Hue10YR	2/3	弱	弱	シルト
②	Hue10YR	2/3	弱	弱	シルト
③	Hue10YR	4/4	弱	弱	シルト
④	Hue10YR	4/6	弱	弱	シルト
⑤	Hue10YR	3/4	弱	弱	シルト
⑥	Hue7.5YR	4/6	弱	弱	シルト
⑦	Hue10YR	4/6	弱	弱	シルト
⑧	Hue10YR	5/6	弱	弱	シルト
⑨	Hue10YR	4/4	弱	弱	シルト
⑩	Hue10YR	5/8	弱	弱	シルト



第10図 2号塚 全体図

3. 3号塚

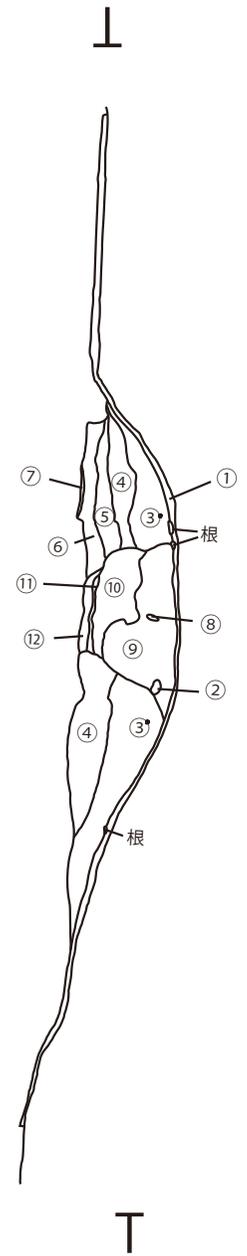
3号塚は南北に延びる尾根線上に築かれた円形の塚である。直径約4m、高さ1mの円形状の塚あり、第2次調査から掘り下げを開始した。

3号塚では、周濠の有無の確認や、古墳墳丘・周濠外の様子を観察するため、トレンチ設定し、表土（腐植土）の除去を行なった。トレンチは、墳丘を30cm幅の畦を十字に残して四分割し、北側から逆時計周りにa、b、c、d区とした。墳丘上で黄褐色の土が検出され、墳丘の上面であると考えられた。墳丘下部から、その外周では褐色の均質な土層が広がり、地山面であると判断された。表土を除去したところ、塚の周辺に周溝は見られず、墳丘の大半が人工的な盛り土によるものであることがわかった。墳丘上面をやや掘り下げたところ、墳丘中央部に黒色の土が見られた。除去したところ約1m四方、深さ50cm程度のピット状の落ち込みが確認できた。その後、墳丘全体を十字に断ち割り、墳丘構造の調査を行った結果、墳丘の下に浅い掘り込みが確認できた。この掘り込みは墳丘構築に先立ち、表土を剥ぎ、地山を削るなど整地が行われたためのものと考えられる。

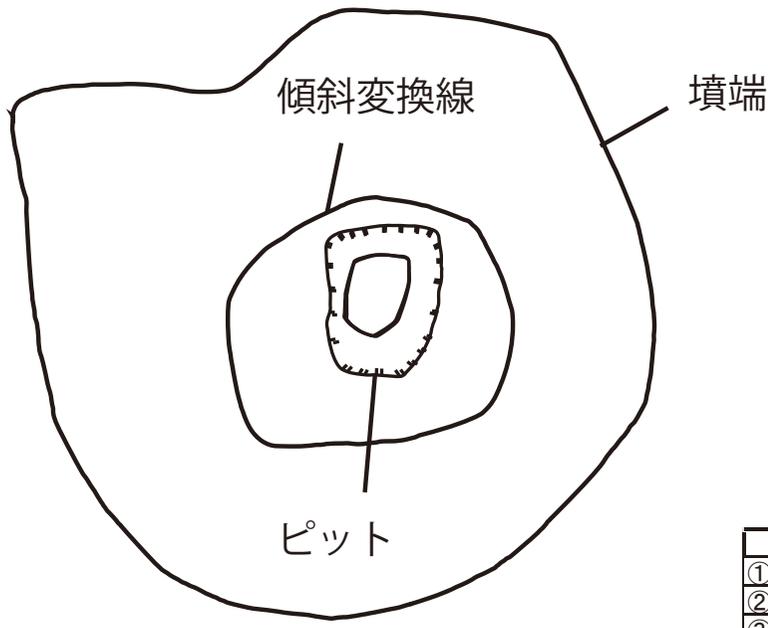
(石山朋美)



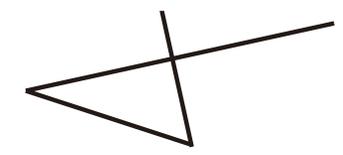
第11図 3号塚全体測量図



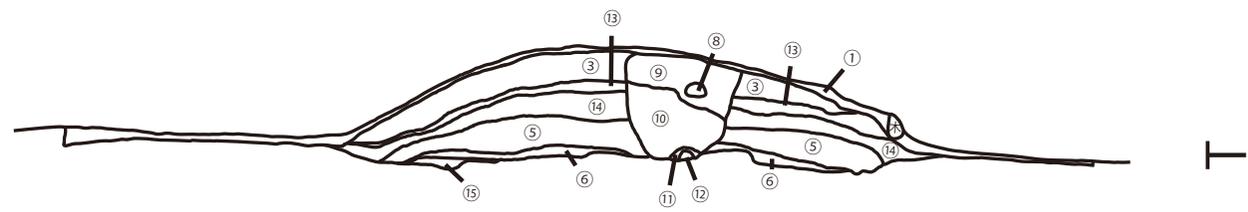
東西セクション北壁



0 1m
1/60



	土層	粘性	しまり	粒度	備考
①	Hue7.5YR 2/3極暗褐	弱	弱	シルト	表土
②	Hue7.5YR 5/8明褐	弱	弱	シルト	単色・均質(ブロック)
③	Hue10YR 5/6黄褐	弱	弱	シルト	墳丘形成土
④	Hue10YR 4/6褐	弱	弱	シルト	粘性あり
⑤	Hue10YR 4/6褐	弱	弱	シルト	④と比べ粘性なし
⑥	Hue10YR 4/4褐	弱	弱	シルト	
⑦	Hue5YR 5/8明赤褐	中	中	シルト	地山
⑧	Hue10YR 4/6褐	弱	弱	シルト	ピット埋土
⑨	Hue10YR 5/6黄褐	弱	弱	シルト	ピット埋土
⑩	Hue10YR 5/6黄褐	弱	弱	シルト	⑨よりしまりが強い(粘土ブロック)
⑪	Hue10YR 5/8黄褐	弱	弱	シルト	ピット埋土
⑫	Hue10YR 4/6褐	弱	弱	シルト	ピット埋土
⑬	Hue10YR 5/8黄褐	弱	弱	シルト	
⑭	Hue10YR 5/6黄褐	弱	弱	シルト	③より粘性がやや強い
⑮	Hue7.5YR 4/4褐	中	中	シルト	地山



南北セクション西壁



写真13 3号塚ピット検出状況



写真14 3号塚 掘りあげ状況

ま と め

2015年から2016年の2年間にわたって青雲神社東側の丘陵上に分布する3基の墳丘の調査を実施した。調査を開始するときは、これらは県指定史跡鳥矢ヶ崎古墳群と同じ終末期古墳群の一部で、鳥矢ヶ崎古墳群の分布がこの場所まで広がっているのではないかと考えていた。しかし、調査の結果墳丘は古代のものだという確証は得られなかった。

一方、これらの墳丘には古墳とは違う歴史的な意味があることが判明した。

1号塚では墳丘が経塚として利用されていることが分かった。残念ながら後世に攪乱されているため、埋納されたはずの写経されたお経やその容器は本来の姿では発見されなかったが、墳丘上にお経を入れる容器として利用された壺の破片が発見された。八重樫忠郎氏のご教示により、この壺は渥美焼であることが分かった。渥美焼の壺は奥州平泉でしばしば経塚でお経をいれる容器として使われていることが知られている。渥美焼の年代は12世紀後半、藤原秀衡の時代にあたる。この渥美焼の壺は源頼朝が奥州平泉を攻める直前の時代に、この鳥矢ヶ崎の地が奥州平泉の文化を持っていた、ひいては平泉の勢力と関係を結んでいたことを示す大変重要な資料である。この経塚を作るときに中国宋代に铸造された銭「紹聖元寶」が埋められていることも新しい発見で、経塚を考える上で重要な材料を提供するものと思われる。

2号塚は、調査前には1号と同様の経塚の可能性が考えられていたが、調査の結果経塚として使われた証拠はなかった。墳丘の上面から小型の穴が掘りこまれていることがわかった。おそらく墓として使われたのではないかと考えられる。墳丘上から「永楽通宝」が発見された。「永楽通宝」は室町時代から江戸時代初期に多く使われたが、江戸時代の初期には使用が禁じられた銭貨である。実際には江戸時代にも使われてはいるが、ここでは最も多く使われた室町時代を考えておきたい。2号塚は室町時代またはそれ以前の時期と考えられる。

3号塚は新たに発見されたものである。調査の結果、2号塚と同様に墳頂から穴が掘られていることが分かった。2号塚ときわめて良く似ているので、2号塚と同じく室町時代またはそれ以前と考えておきたい。

以上述べてきたように青雲神社東側の丘陵部分には3基の塚が確認された。うち1号塚は経塚として利用されているが、本来は中央部に長方形の穴が掘られた塚であったと考えられる。2、3号塚も中央に長形状の穴が掘られた塚で、築造の時期等の詳細は知り得ない。その性格も決めたいが古代、中世の墳墓である可能性も考えておきたい。

ところで、青雲神社西側には2基の板碑がある。佐藤信行氏、佐々木繁喜氏によって紹介され、14世紀から15世紀頃と考えられている（佐藤、佐々木 2011）。また、青雲神社の東西には南から北に伸びる丘陵がある。東側の丘陵には今回の調査で3基の塚があることが判明した。時期は確定できないが、墓であるかどうかは別にして、古代、中世の信

仰に関わる遺構である可能性は高い。一方、西側丘陵上には、三つの塚が連なって築かれている。これらも東の丘陵上の3基と近い性質の塚である可能性は高いと思われる。また、東西の丘陵の間には南側の湧水地点から流れ出る水をたたえた池が南北に二つ連なっており、池の周囲には平場も観察される。

このような状況を総合すると、青雲神社周囲は古代中世から現代にいたるまで、長い時間にわたって信仰の場所として機能していた可能性が高い。また、池の存在も合わせ考えると、浄土庭園が存在した可能性もあながち否定はできないように思われる。

2年間の調査の結果、青雲神社東側の丘陵上は古代末から室町時代にかけて、地域の人々に神聖な信仰の場所として使われていたことが判明した。青雲神社周囲に残る塚群、板碑等も含む総合的な検討により、この地の信仰の姿が解明されることを期待している。

引用文献

佐藤信行・佐々木繁喜 2011 「宮城県三迫川流域の溶結凝灰岩板碑群」『宮城考古学』第13号

謝辞

調査終了にあたり、ご神域の調査ご許可くださいました青雲神社宮司佐藤伸成氏、総代長菅原勁氏、山本政広氏、調査実施にあたり、ご支援をいただいた佐藤茂会長をはじめとする鳥矢ヶ崎史跡公園保存会の皆様、宿舎をご提供いただいた工藤健委員長をはじめとする猿飛来コミュニティセンター運営委員会の皆様、調査を支えていただいた栗原市教育委員会の皆様に心から御礼を申し上げます。



写真 15 現地説明会

平成 28 年度 東北学院大学学術研究会評議員名簿

会 長		松本 宣郎
評 議 員 長		小宮 友根
編 集 委 員 長		小宮 友根
評 議 員		
文 学 部	〔英〕	植松 靖夫 (庶務)
	〔総〕	佐藤 司郎 (編集)
	〔歴〕	加藤 幸治 (会計)
経 済 学 部	〔経〕	舟島 義人 (編集)
	〔経〕	白鳥 圭志 (編集)
	〔共〕	小宮 友根 (評議員長・編集委員長)
経 営 学 部		小池 和彰 (会計)
		折橋 伸哉 (編集)
法 学 部		岡田 康夫 (庶務)
		白井 培嗣 (編集)
教 養 学 部	〔人〕	仙田 幸子 (編集)
	〔言〕	伊藤 春樹 (庶務)
	〔情〕	上之郷高志 (編集)
	〔地〕	柳井 雅也 (編集)

東北学院大学論集 歴史と文化 第 56 号

2017 年 3 月 17 日 印刷

(非売品)

2017 年 3 月 23 日 発行

編集兼発行人 小 宮 友 根

印 刷 者 笹 氣 義 幸

印 刷 所 笹氣出版印刷株式会社

発 行 所 東北学院大学学術研究会

〒 981-8511

仙台市青葉区土樋一丁目 3 番 1 号

(東北学院大学内)

THE TOHOKU GAKUIN UNIVERSITY REVIEW

HISTORY AND CULTURE

(Formerly HISTORY AND GEOGRAPHY)

No. 56

March, 2017

- The Result of Sixth Excavation of Haizukayama Ancient Tomb Hideto Tsuji 1
- The Result of Excavation of Toyagasaki Ancient Tombs Aokumojinja Spot Hideto Tsuji 85

The Research Association
Tohoku Gakuin University
Sendai, Japan